

「赦しに関する教え」

§ 092 マタ 18 : 15~35

1. はじめに

(1) 文脈の確認

① 弟子訓練が佳境に入っている。

② 3つの問題

* プライド (誰が一番偉いかという議論)

* 分派意識 (プライドから出てくるもの)

* 兄弟間の赦し

(2) 「教会」という言葉

① ギリシア語でエクレシア (呼び出された者)

* 普遍的教会とは、使徒2章から携挙までにイエスを信じる人の総体。

* 地域教会とは、時間的、地理的に制約がある。未信者も含んでいる。

② マタ 16 : 18

「ではわたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません」

* これは、普遍的教会である。

③ マタ 18 : 17

* これは、地域教会である。

(3) A. T. ロバートソンの調和表

「他の兄弟に対して罪を犯した人の、正しい取り扱い方」 (§ 92)

マタ 18 : 15~35

2. アウトライン

(1) 赦しに関する4つのステップ (15~20節)

(2) ペテロの質問に対する答え (21~22節)

(3) 多額の借金を免除された人のたとえ (23~35節)

3. 結論 : 3つの誤解を解く

(1) 18節

(2) 19~20節

(3) この箇所全体

教会時代のクリスチャンが実行すべき赦しの原則について学ぶ。

I. 赦しに関する4つのステップ(15～17節)

「また、もし、あなたの兄弟が罪を犯したなら、行って、ふたりだけのところで責めなさい。もし聞き入れたら、あなたは兄弟を得たのです。もし聞き入れないなら、ほかにひとりかふたりをいっしょに連れて行きなさい。ふたりか三人の証人の口によって、すべての事実が確認されるためです。それでもなお、言うことを聞き入れようとしないなら、教会に告げなさい。教会の言うことさえも聞こうとしないなら、彼を異邦人か取税人のように扱いなさい」

1. 訳文の比較

「また、もし、あなたの兄弟が罪を犯したなら、」(新改訳)

「兄弟があなたに対して罪を犯したなら、」(新共同訳)

(1)ここでの罪とは、必ずしも道徳的なものではない。

①道徳的な罪に関しては、長老たちにそれを取り除く権威がある。

②1コリ5:1～5

「あなたがたの間に不品行があるということが言われています。しかもそれは、異邦人の中にもないほどの不品行で、父の妻を妻にしている者がいるとのことです。それなのに、あなたがたは誇り高ぶっています。そればかりか、そのような行いをしている者をあなたがたの中から取り除こうとして悲しむこともなかったのです。私のほうでは、からだはそこにいなくても心はそこにおり、現にそこにいるのと同じように、そのような行いをした者を主イエスの御名によってすでにさばきました。あなたがたが集まったときに、私も、霊においてともにおり、私たちの主イエスの権能をもって、このような者をサタンに引き渡したのです。それは彼の肉が減ぼされるためですが、それによって彼の霊が主の日に救われるためです」

③基本的には、兄弟間の争いである。

2. 4つのステップ

(1)傷つけられた人が、罪を犯した人と対面する段階

①これは、標準的なユダヤ人の処理法である。

*ラビたちは、他者からの叱責を受け入れるように教えている。

②聞き入れられたなら、兄弟を得たことになる。

③もし相手が聞き入れないなら、次の段階に進む。

④この手順を踏まない場合は、教会内に問題が広がる。

(2) ひとりかふたりの証人を連れて行って悔い改めを迫る。

①これもまたユダヤ的手順である。イエスはモーセの律法の教えを採用している。

②申 19 : 15

「どんな咎でも、どんな罪でも、すべて人が犯した罪は、ひとりの証人によって立証されない。ふたりの証人の証言、または三人の証人の証言によって、そのことは立証されなければならない」

③これは、その兄弟がいかに靈的に深刻な状態にあるかを示している。

④これは、罪を犯した兄弟を回復させるための手順である。

(3) それでもだめなら、地域教会に事実を告げる。

①弟子たちは、会衆に告げることをイメージしたのであろう。

②ペンテコステ以降、この命令はさらに深みを増したはずである。

③信者同士の争いを法廷に持ち込むのは禁じられている(1コリ6:1~8)。

④信者と未信者の争いでは、法廷に持ち込んでよい。

(4) それさえも拒否したなら、異邦人や取税人のように扱う。

①ユダヤ人が異邦人や取税人を扱っていた方法にならうという意味である。

*イエスが異邦人や取税人を見下していたわけではない。

②つまり、教会の交わりから追放するということである。

③その兄弟が真に悔い改めたなら、交わりに回復する。

「その人にとっては、すでに多数の人から受けたあの処罰で十分ですから、あなたがたは、むしろ、その人を赦し、慰めてあげなさい。そうしないと、その人はあまりにも深い悲しみに押しつぶされてしまうかもしれません。そこで私は、その人に対する愛を確認することを、あなたがたに勧めます」(2コリ2:6~8)

3. 文脈を無視して解釈される危険性のある聖句

(1) 18節

(2) 19~20節

II. ペテロの質問に対する答え(21~22節)

「そのとき、ペテロがみもとに来て言った。『主よ。兄弟が私に対して罪を犯した場合、何

度まで赦すべきでしょうか。七度まででしょうか。』イエスは言われた。『七度まで、などとはわたしは言いません。七度を七十倍するまでと言います』

1. ペテロの質問

(1) ここでペテロが質問を挟む。

①彼は、7度までと言い、自らの寛大さを示そうとしたのであろう。

(2) パリサイ人の教えでは、3度まで赦すとなっていた。

2. イエスの答え

(1) 7の70倍

①これは、490回のことではない。

*無限に赦せという意味である。

(2) 赦しとは、内面に起こることである。

①毎回数えているなら、内面での赦しは起こっていない。

②これを教えるために、次のたとえ話が出てくる。

III. 多額の借金を免除された人のたとえ (23～35 節)

「このことから、天の御国は、地上の王にたとえることができます。王はそのしもべたちと清算をしたいと思います。清算が始まると、まず一万タラントの借りのあるしもべが、王のところに連れて来られた。しかし、彼は返済することができなかったので、その主人は彼に、自分も妻子も持ち物全部も売って返済するように命じた。それで、このしもべは、主人の前にひれ伏して、『どうかご猶予ください。そうすれば全部お払いいたします』と言った。しもべの主人は、かわいそうに思って、彼を赦し、借金を免除してやった」(23～27 節)

1. 借金を赦した王の物語

(1) 異邦人の王と借金のあるしもべ (家来)

①このしもべは、王から徴税を委ねられた地方統治者であろう。

②彼は、自分の取り分を除いた額を、王に収める義務があった。

(2) しかし彼は、その義務を果たさず、借金が1万タラントにも達していた。

①もし払えなければ、妻子や持ち物を売ってでもお金を作らねばならない。

②「どうかご猶予ください。そうすれば全部お払いいたします」

*借金を抱えた人の多くが、時間があれば返済できると思い込んでいる。

(3) 借金の額は1万タラント

- ①恐らく王の年収以上の額であろう。
- ②1タラントは6千デナリ。
- ③1万タラントは、6千万デナリ。労働者の約16万年分の収入。
- ④これは、到底返せない額を示す誇張法である。

(4) 王は、彼の懇願に応じて、借金を帳消しにしてやった。

2. 借金を赦さないしもべの話

「ところが、そのしもべは、出て行くと、同じしもべ仲間で、彼から百デナリの借りのある者に出会った。彼はその人をつかまえ、首を絞めて、『借金を返せ』と言った。彼の仲間
間
は、ひれ伏して、『もう少し待ってくれ。そうしたら返すから』と言って頼んだ。しかし彼
は承知せず、連れて行って、借金を返すまで牢に投げ入れた」(28～30節)

(1) 彼は、100デナリの借金が赦せない。

- ①対比は、60万対1である。
- ②多額と小額の劇的な対比がポイントである。

3. 赦さない者に下る裁きの話

「彼の仲間たちは事の成り行きを見て、非常に悲しみ、行って、その一部始終を主人に話
ら
した。そこで、主人は彼を呼びつけて言った。『悪いやつだ。おまえがあんなに頼んだか
こそ借金全部を赦してやったのだ。私がおまえをあわれんでやったように、おまえも仲間
をあわれんでやるべきではないか。』こうして、主人は怒って、借金を全部返すまで、彼
を
獄吏に引き渡した。あなたがたもそれぞれ、心から兄弟を赦さないなら、天のわたしの父
も、あなたがたに、このようになさるのです」(31～35節)

(1) 彼は、当然の報いを受けた。

- ①投獄された。
- ②これは、終身刑である。

4. たとえ話の教訓

(1) 神から多く赦された者は、赦しの心を示すべきである。

- (2) 天の父は憐れみ深いのだから、私たちはその姿を真似るべきである。
- (3) 兄弟たちを赦さないなら、神からの赦しを受けることができない。
 - ①永遠のいのちに関わる赦しではない。
 - ②父なる神との断絶のこと。
 - ③クリスチャン生活に障害が生じる。

結論

1. マタイ 18 : 18 は、よく誤解される。

「まことに、あなたがたに告げます。何でもあなたがたが地上でつなぐなら、それは天においてもつながれており、あなたがたが地上で解くなら、それは天においても解かれています」

- (1) 文脈を考える。赦しに関する教えが、この箇所文脈である。
- (2) サタンの縛りとは無関係である。
- (3) 「つなぐ」と「解く」は、ラビ用語
 - ① つなぐとは、禁止する、有罪を宣言するという意味。
 - ② 解くとは、許可する、無罪を宣言するという意味。
 - ③ ペテロにこの権威が与えられた (マタ 16 : 19)。
 - ④ ここでは、使徒たち全員にこの権威が与えられた。
- (4) 神の御心に沿った決定は、神がそれを承認しておられる。
 - ① 交わりを断たれた兄弟の死は、サタンの支配下に置かれる。
 - ② 魂は救われている。(1 コリ 5 : 1~13)

2. マタイ 18 : 19~20 も、よく誤解される。

「まことに、あなたがたにもう一度、告げます。もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心をつ一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです」

- (1) 文脈を考えると、これは教会の定義ではない。
- (2) 19 節の「ふたり」とは、証人のこと。
 - ① 複数の祈りには力があるが、ここではそれが強調点ではない。
- (3) 20 節の「ふたりでも三人でも」もまた証人のこと。
 - ① 教会の定義ではない。教会は権威という秩序のある組織。
 - ② 4つのステップをイエスが承認しているということ。
- (4) 以上のことを、愛を込めて行うなら、イエスはその中におられる。

3. この箇所全体

(1) 懲戒に関する教えの土台にあるのは、憐みと赦しである。

①懲戒を実行する目的は、罪を犯した兄弟を回復するためである。

(2) なぜ4つのステップを踏む必要があるのか。

①兄弟が自分に対して罪を犯したなら、ただちに赦す。

「お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい」(エペ4:32)

*これによって、自分は自由になる。

*責めは相手の方に残る。

②まだ相手には、赦したとは伝えていない。

*その人が悔い改めるまでは、赦しを公に宣言すべきではない。

*それゆえ、個人的に対面し、愛をこめて叱責するのである。

③もし相手が謝罪し、罪を告白したなら、赦されていることを伝える。

「気をつけていなさい。もし兄弟が罪を犯したなら、彼を戒めなさい。そして悔い改めれば、赦しなさい。かりに、あなたに対して一日に七度罪を犯しても、『悔い改めます』と言って七度あなたのところに来るなら、赦してやりなさい」(ル

カ

17:3~4)

(例話) 第5回「再臨待望聖会」

*メシニックジューとアラブ人クリスチャンの和解

*終末論的和解

「エルサレムに顔を向けるイエス」

§ 094 ヨハ7:2~9

§ 095 ルカ9:51~56、ヨハ7:10

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ガリラヤでの弟子訓練が終わった。
- ②この箇所から、迫害に立ち向かうイエスの姿が描かれる。
- ③弟子訓練の内容は、迫害の中でどのように生きるかという点に移行する。
- ④本来であれば、§ 93 を扱うべきであるが、ルカの順序に従う。
 - *ルカだけが時間の順に出来事を並べている。
 - * § 93 は、次回取り上げる。

(2) イエスの活動

- ①最初は、ユダヤで弟子たちが集まってきた。
- ②しかし、パリサイ人の嫉妬のために、ユダヤを去った。
- ③活動の拠点ガリラヤに移した。
- ④最初は、かなりの人気を博した。
- ⑤しかし、いのちのパンのメッセージ以降、多くの弟子たちが去った。

(3) A. T. ロバートソンの調和表

「不信仰なイエスの兄弟たちの助言」 (§ 94)

ヨハ7:2~9

「サマリヤを通過してエルサレムに向かう」 (§ 95)

ルカ9:51~56、ヨハ7:10

2. アウトライン

(1) 出発前の出来事

- ①出来事の文脈
- ②兄弟たちの提案
- ③イエスの回答

(2) 移動中の出来事

- ①出来事の文脈
- ②ヤコブとヨハネの提案

③イエスの回答

3. 結論：3つのキーワード

- (1) 時
- (2) この世
- (3) 復讐

エルサレムに顔を向けるイエスの姿から、クリスチャン生活の原則を学ぶ。

I. 出発前の出来事 (ヨハ7:2~9)

1. 出来事の文脈

「さて、仮庵の祭りというユダヤ人の祝いが近づいていた」(2節)

(1) ユダヤの3大巡礼祭

①過越の祭り

* 出エジプトの記念。メシアの身代わりに死の予表。

②七週の祭り (五旬節、ペンテコステ)

* 律法の付与の記念。聖霊降臨の予表

③仮庵の祭り

* 荒野の放浪の記念。メシア的王国の予表

* 最も喜びに満ちた祭りである。

(2) 時期的には、十字架の死の半年ほど前のことである。

①イエスの弟子たちは、メシア的王国の到来が近いと感じていた。

②人々の間では、イエスがメシア的王国をもたらすメシアであるかどうか話題になっていた。

(3) 仮庵の祭りの成就是、メシア的王国の実現に直結している。

「エルサレムに攻めて来たすべての民のうち、生き残った者はみな、毎年、万軍の【主】である王を礼拝し、仮庵の祭りを祝うために上って来る。地上の諸氏族のうち、万軍の【主】である王を礼拝しにエルサレムへ上って来ない氏族の上には、雨が降らない。もし、エジプトの氏族が上って来ないなら、雨は彼らの上に降らず、仮庵の祭りを祝いに上って来ない諸国の民を【主】が打つその災害が彼らに下る。これが、エジプトへの刑罰となり、仮庵の祭りを祝いに上って来ないすべての国々への刑罰となる。その日、馬の鈴の上には、『主への聖なるもの』と刻まれ、【主】の宮の中のなべは、祭壇の前の鉢のようになる。エルサレムとユダのすべてのなべは、万軍の【主】への聖

なるものとなる。いけにえをささげる者はみな来て、その中から取り、それで煮るようになる。その日、万軍の【主】の宮にはもう商人がいなくなる」(ゼカ 14: 16~21)

2. 兄弟たちの提案

「そこで、イエスの兄弟たちはイエスに向かって言った。『あなたの弟子たちもあなたがしているわざを見ることができるよう、ここを去ってユダヤに行きなさい。自分から公の場に出たいと思いながら、隠れた所で事を行う者はありません。あなたがこれらの事を行うのなら、自分を世に現しなさい。』兄弟たちもイエスを信じていなかったのである」(3~5節)

(1) イエスの兄弟たち

- ①母を同じくする兄弟たちのことである。
- ②彼らは、最初はイエスに好意的であった(ヨハ2:12)。
- ③しかし、後に懐疑的になり、この時点ではイエスを疑っている。

(2) 兄弟たちの挑戦

- ①イエスはガリラヤでは人気があったが、エルサレムでは排斥されていた。
- ②そこで兄弟たちは、ユダヤに上って自分を公にするように挑戦した。
- ③「あなたの弟子たち」とは、12弟子以外の弟子たちである。
- ④メシアであるなら、自分を公に表すべきだという挑戦である。

(3) 不信仰の言葉

- ①皮肉に満ちた言葉でもある。
- ②もしイエスがメシアなら、自分たちも有名になれるという思いがあったのか。
- ③イエスもまた、まだ救われていない家族の問題で心を痛めた。

3. イエスの回答

「そこでイエスは彼らに言われた。「わたしの時はまだ来ていません。しかし、あなたがたの時はいつでも来ているのです。世はあなたがたを憎むことはできません。しかしわたしを憎んでいます。わたしが、世について、その行いが悪いことをあかしするからです。あなたがたは祭りに上って行きなさい。わたしはこの祭りには行きません。わたしの時がまだ満ちていないからです。』こう言って、イエスはガリラヤにとどまられた」(6~9節)

- (1) イエスは、兄弟たちの助言に従ってエルサレムに上ることはない。

- ①イエスの時はまだ来ていない。
- ②イエスは、まだ王になることはできない。

(2) 不信者の特徴

- ①神の御心を考慮しないので、時はいつでも来ている。

(3) 兄弟たちが祭りに上ったとき、イエスは内密にエルサレムに上られた。

- ①イエスの外見は、ごく普通のユダヤ人男性のそれであった。

II. 移動中の出来事 (ルカ 9 : 51~56)

1. 出来事の文脈 (51~53 節)

「さて、天に上げられる日が近づいて来たころ、イエスは、エルサレムに行こうとして御顔をまっすぐ向けられ、ご自分の前に使いを出された。彼らは行って、サマリヤ人の町に入り、イエスのために準備した。しかし、イエスは御顔をエルサレムに向けて進んでおられたので、サマリヤ人はイエスを受け入れなかった」

- (1) イエスは、ご自分の時に従って、エルサレムに向かわれた。
 - ①イエスの公生涯のターニングポイントである。
 - ②パウロもまた、エルサレムに向かっている。そしてローマへ (使 19 : 21)。
 - ③有能な作家は、プロットの変化を示すヒントを与えてくれる。
 - ④「御顔をまっすぐ向け」とは、決意を示す言葉である。
- (2) 途中、サマリヤを通過された。
 - ①ユダヤ人にとっては一般的な旅程ではなかったが、イエスはここを通過された。
 - ②サマリヤの女の回心がきっかけで、多くのサマリヤ人がイエスに好意を持った。
 - ③イエスは、使いを派遣して、宿泊の準備をさせた。
 - ④しかし、サマリヤ人はイエスを受け入れなかった。
 - ⑤エルサレムから下ってくるユダヤ人は無視したが、エルサレムに上るユダヤ人は妨害した。

*ゲリジム山に神殿があり、そこをエルサレム以上に重視した。

2. ヤコブとヨハネの提案 (54 節)

「弟子のヤコブとヨハネが、これを見て言った。『主よ。私たちが天から火を呼び下して、彼らを焼き滅ぼしましょうか』」

- (1) ヤコブとヨハネの不寛容

- ①不寛容は、多くの場合、誤った特権意識から出てくる。
- (2) エリヤの奉仕を思い出している。
 - ①カルメル山での出来事 (1列18:38)
 - ②イスラエルの王アハズヤの兵士50人が焼き殺された (2列1:10)。
 - ③2度も同じことが起こった (2列1:12)
- (3) エリヤの場合は、生死をかけた戦いをしている。
 - ①サマリヤを通過するイエスの一行が置かれた状況とは、異なる。

3. イエスの回答 (55~56節)

「しかし、イエスは振り向いて、彼らを戒められた。そして一行は別の村に行った」

- (1) イエスは、彼らの不寛容を戒めた。
 - ①今は復讐の時ではなく、恵みの時である。

「すると、預言者イザヤの書が手渡されたので、その書を開いて、こう書いてある所を見つけられた。『わたしの上に主の御霊がおられる。主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油をそそがれたのだから。主はわたしを遣わされた。捕らわれ人には赦免を、盲人には目の開かれることを告げるために。しいたげられている人々を自由にし、主の恵みの年を告げ知らせるために』」(ルカ4:17~19)
- (2) イエスには、サマリヤ人を裁くよりも重要な任務があった。
 - ①エルサレムに向かって進んで行かれた。

結論

1. 時

- (1) イエスにとっては、「わたしの時」とは、十字架の時である。
 - ①カナの婚礼での奇跡 (ヨハ2:4)
 - ②エルサレムに上らない理由 (ヨハ7:8)
- (2) 時とは、神の御心の時である。
 - ①ハーベスト・タイムは、種まきの時から、収穫の時に移行しつつある。
 - ②神の時を認識している人には、今が「永遠の今」となる。

2. この世

「世はあなたがたを憎むことはできません。しかしわたしを憎んでいます。わたしが、世について、その行いが悪いことをあかしするからです」(ヨハ7:7)

(1) 世とは、悪魔が支配する人間社会のことである。

①世には、世の価値観や世界観がある。

②不信者には、この世との葛藤はない。

③この世の一部であるので、この世から憎まれることはない。

(2) イエスの価値観は、この世の価値観とは対立する。

①イエスは、その行いが悪いことを指摘するので、この世から憎まれる。

(3) クリスマンは、この世に住んでいるが、この世のものではない。

「もしあなたがたがこの世のものであったなら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではなく、かえってわたしが世からあなたがたを選び出したのです。それで世はあなたがたを憎むのです」(ヨハ15:19)

①この世とうまくいっているクリスマンは、自分を吟味すべきである。

3. 復讐

(1) 今が恵みの時であるからといって、神を軽く扱ってはならない。

①恵みの時の後に、裁き(復讐)の時が来るからである。

(2) クリスマンの心構え

①裁きを神に委ねる

「愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。『復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる』」(ロマ12:19)

②時が来たなら、すべては清算される。

③ヤコブとヨハネは、神の愛を理解した。

*殉教者ヤコブ

*愛の人ヨハネ

「3人の弟子候補」

§ 093 マタ 8 : 19~22、ルカ 9 : 57~62

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ガリラヤでの弟子訓練が終わった。
- ②前回の箇所から、イエスは御顔をエルサレムに向けて進み始めた。
- ③サマリヤを通過する際、サマリヤ人から拒否された。
- ④道を進んで行く間も、イエスは弟子訓練を行われた。
- ⑤3人の弟子候補が登場する。
*表面だけでなく、内面の動機を読み取る必要がある。
- ⑥救いは、信仰と恵みによる。
- ⑦この箇所は、救われた後の歩みがテーマである。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「3人の弟子候補」 (§ 93)

マタ 8 : 19~22、ルカ 9 : 57~62

2. アウトライン

- (1) 最初の弟子候補 (57~58 節)
- (2) 第2の弟子候補 (59~60 節)
- (3) 第3の弟子候補 (61~62 節)

3. 結論

- (1) 最初の弟子候補の例
- (2) 第2の弟子候補の例
- (3) 第3の弟子候補の例

真の弟子になることを妨げる3つのことらについて学ぶ。

I. 最初の弟子候補 : 急ぎ足太郎 (57~58 節)

1. 57 節

「さて、彼らが道を進んで行くと、ある人がイエスに言った。『私はあなたのおいでになる所なら、どこにでもついて行きます』」

- (1) ある人がイエスに弟子入りを申し込んだ。

- ①この人は、律法学者である(マタ8:19)。
- ②ユダヤ人の習慣では、弟子志願者が教師を自分で見つけるのが普通である。
- ③イエスの場合は、イエスが主導権を握って、先に声をかける場合があった。

(2) この律法学者の特徴

- ①イエスから招かれるのを待たなかった。
- ②自身満々である。「あなたのおいでになる所なら、どこにでもついて行きます」
- ③過剰な熱心さが見られる。

「底ひなき 淵やはさわぐ 山川の 浅き瀬にこそ 仇波は立て」

2. 58節

「すると、イエスは彼に言われた。『狐には穴があり、空の鳥には巣があるが、人の子には枕する所もありません』」

(1) この律法学者の問題点

- ①彼は、快適な生活や富の所有を放棄しようとしていない。
(例話) 富を嫌う高名な哲学者。生徒に法外な要求をすることで、吟味する。
- ②彼は、弟子になるための犠牲を計算していない。

(2) イエスのことば

- ①イエスの公生涯は、十字架への道であった。
- ②使命を全うするために、イエスは家を捨て、旅に出た。
- ③当時の庶民は貧しかったが、ほとんどの人は住む家を持っていた。
- ④イエスの生活は、他者の善意に頼るものであった。
- ④自然界が狐や鳥に約束している安息以下のものしか与えられていない。
- ⑤イエスの弟子になろうとするなら、この世の快適さに束縛されてはならない。

(3) イエスを哀れに思う必要はない。

- ①自分の献身を妨げる家があるなら、それこそ哀れに思うべきである。

II. 第2の弟子候補：決断のび太(59～60節)

1. 59節

「イエスは別の人に、こう言われた。『わたしについて来なさい。』しかしその人は言った。『まず行って、私の父を葬ることを許してください』」

- (1) この人の場合は、イエスから声をかけている。

- ①マタイの召命の場面に似ている(ルカ5:27)。
- ②この人には、召命に応答する信仰と決意があったのであろう。
- ③いわば、時が満ちているのである。

(2)しかし、この人は行動を先延ばしにしている。

- ①「まず行って、私の父を葬ることを許してください」
- ②この人の父は、死んでいない。また、死にそうな状態でもない。
- ③モーセの律法は、両親を敬えと教えている。
- ④タルムードの命令
 - *長男の最大の役割は、父の埋葬である。
 - *長男は父が死ぬまでともに住まなければならない。
 - *父の死後、さらに1年留まって、「カディッシュ」という祈りを唱える。
 - *悲しみの中でも神をたたえるという祈りである。
- ⑤タルムードは、モーセの律法以上のものを要求している。

2. 60節

「すると彼に言われた。『死人たちに彼らの中の死人たちを葬らせなさい。あなたは出て行って、神の国を言い広めなさい』」

- (1)「死人たちに彼らの中の死人たちを葬らせなさい」
 - ①「死人たち」とは、霊的に死んでいる人たちのこと。
 - ②次の「死人たち」とは、肉体的に死んだ人たちのこと。
- (2)「あなたは出て行って、神の国を言い広めなさい」
 - ①優先順位から言うと、福音の伝達の方が重要であり、緊急性がある。
 - ②不信者にできることは、不信者にまかせよ。
 - ③信者にしかできないことを優先すべきである。
- (3)父親はどうするのかという疑問
 - ①ここでは、父親を放棄することを容認しているわけではない。
 - ②先延ばしにしようとしている心の状態が問題である。
 - ③信者には、マタ6:33の約束が与えられている。
「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます」

III. 第3の弟子候補：二股かけ次郎(61～62節)

1. 61節

「別の人はこう言った。『主よ。あなたに従います。ただその前に、家の者にいとまごいに帰らせてください』」

(1) 1番目と2番目をミックスしたような人

- ①自分から申し出ている(1番目のパターン)。
- ②しかし、条件を付けている(2番目のパターン)。

(2) 「ただその前に、家の者にいとまごいに帰らせてください」

①エリヤとエリシャの例

「エリヤはそこを立って行って、シャファテの子エリシャを見つけた。エリシャは、十二くびきの牛を先に立て、その十二番目のくびきのそばで耕していた。エリヤが彼のところを通り過ぎて自分の外套を彼に掛けたので、エリシャは牛をほうっておいて、エリヤのあとを追いかけて行って言った。『私の父と母とに口づけさせてください。それから、あなたに従って行きますから。』エリヤは彼に言った。

『行って来なさい。私があなたに何をしたというのか』(2列19:19～20)

- ②エリシャの場合は許されているが、この人の場合は許されていない。
- ③問題は、優先順位が確立していないことである。

2. 62節

「するとイエスは彼に言われた。『だれでも、手を鋤につけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくありません』」

(1) イエスは、農夫ならよく知っている話を用いて、この人の問題点を指摘する。

- ①畑を耕す時は、前方を見据える必要がある。
- ②後ろを振り返ると、畝が曲がってしまう。

(2) この人の問題は、イエスに仕えること以外に関心事があることである。

- ①「神の国にふさわしくありません」とは、救いに関することではない。
- ②真の弟子になれるかどうかの問題である。

結論

はじめに

- (1) 3人の弟子候補者たちがどのように応答したかは書かれていない。
- (2) その回答は、私たち自身が書くべきである。

1. 急ぎ足太郎の例

(1) マタ 26 : 33~35

「すると、ペテロがイエスに答えて言った。『たとい全部の者があなたのゆえにつま ずいても、私は決してつまずきません。』イエスは彼に言われた。『まことに、あなたに告げます。今夜、鶏が鳴く前に、あなたは三度、わたしを知らないと言います。』ペテロは言った。『たとい、ごいっしょに死ななければならぬとしても、私は、あなたを知らないなどとは決して申しません。』弟子たちはみなそう言った」

- ①自信満々の時は、危険である。
- ②自分の弱さを知ることは、弟子になるための第一歩である。
- ③ペテロが回復されたことは、私たちにとっては慰めである。

2. 決断のび太の例

(1) マタ 4 : 18~22

「イエスがガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、ふたりの兄弟、ペテロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレをご覧になった。彼らは湖で網を打っていた。漁師だったからである。イエスは彼らに言われた。『わたしについて来なさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう。』彼らはすぐに網を捨てて従った。そこからな お行かれると、イエスは、別のふたりの兄弟、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが父ゼベダイといっしょに舟の中で網を繕っているのを ご覧になり、ふたりをお呼びになった。彼らはすぐに舟も父も残してイエスに従った」

- ①舟も父も残してイエスに従ったというのは、興味深い。

3. 二股かけ次郎の例

(1) ルカ 17 : 31~32

「その日には、屋上にいる者は家に家財があっても、取り出しに降りてはいけません。同じように、畑にいる者も家に帰ってはいけません。ロトの妻を思い出さない」

おわりに：なぜイエスの弟子になろうとするのか。

そうせざるを得ない理由

- (1) 本能である。これが、クリスチャンの生きがいである。
- (2) キリストの愛が迫ってくる。
- (3) 最高の特権である。
- (4) 将来の報いがある。

「仮庵の祭りで姿を現すイエス (1)」

§ 096 ヨハ7:11~52 (朗読は7:11~24)

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ① § 096~111 までは、後期ユダヤ伝道と呼ばれる箇所である。
- ② 十字架にかかる前の年
- ③ 仮庵の祭りから奉献の祭り (ハヌカ) までの3ヵ月間 (10月~12月)
- ④ ヨハネとルカだけが取り上げている。
 - * ヨハネはエルサレムを中心に描いている。
 - * ルカはエルサレムの外、ユダヤ地方での働きを描いている。
- ⑤ イエスは、公にではなく、内密にエルサレムに上った (10節)。
- ⑥ イエスの登場によって、緊張感が高まる。
- ⑦ この箇所は、ヨハネに記録されたイエスの7つの説教の第4番目のものである。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「イエスが仮庵の祭りに来たことで、イエスのメシア性に関する議論が激しくなる」 (§ 96)

ヨハ7:11~52

2. アウトライン

- (1) 状況説明 (11~13節)
 - (2) Q&A (1) (14~19節)
 - (3) Q&A (2) (20~24節)
 - (4) Q&A (3) (25~30節)
 - (5) 群衆の反応 (31~36節)
 - (6) イエスの招き (37~44節)
 - (7) パリサイ人の反応 (45~52節)
- (今回は、(1) ~ (3) を取り上げる)

3. 結論

- (1) みことばの学びの方法
- (2) 霊的覚醒の方法

イエスに関する疑問について、回答を得る。

I. 状況説明 (11~14 節)

1. 11 節

「ユダヤ人たちは、祭りのとき、『あの方はどこにおられるのか』と言って、イエスを捜していた」

(1) 訳文の比較

「ユダヤ人たちは、祭りのとき、『あの方はどこにおられるのか』と言って、イエスを捜していた」(新改訳)

「祭りのときユダヤ人たちはイエスを捜し、『あの男はどこにいるのか』と言っていた」(新共同訳)

「ユダヤ人らは祭の時に、『あの人はどこにいるのか』と言って、イエスを捜していた」(口語訳)

「ユダヤ人の指導者たちは、祭りの間にイエスを見つけ出してやろうと思い、『だれかイエスを見かけた者はいないか』と、やっきになって尋ね回りました」(LB)

(2) ヨハネの福音書には、「ユダヤ人」という言葉が31回出てくる(単数と複数)。

- ①ユダヤ人一般。アブラハム、イサク、ヤコブの子孫。
- ②ガリラヤ人と対比してのユダヤ人(ユダヤ地方の住民)
- ③ユダヤ人の宗教的指導者たち

(3) 宗教的指導者たちが抱いた危機意識

- ①仮庵の祭りとメシア的王国の関係
- ②自分はメシアであるというイエスの主張に群衆が乗ってしまう危険性がある。
- ③この年の仮庵の祭りは、ピリピリした雰囲気の中で進行していた。

2. 12 節

「そして群衆の間には、イエスについて、いろいろとひそひそ話がされていた。『良い人だ』と言う者もあり、『違う。群衆を惑わしているのだ』と言う者もいた。

(1) 「群衆」が複数形にないっている(オクロイ)。ヨハネではここだけである。

- ①いくつかのグループがいたということ。
- ②ガリラヤ地方や他の地方、また国々から来ていた巡礼者のグループである。

(2) 群衆の意見は、二分されていた。

①イエスを擁護する人たち

* 「良い人」(アガソス)とは、動機が正しい人。究極的には神を指す。

②イエスを非難する人たち

- * 「違う。群衆を惑わしているのだ」とは、偽預言者のこと。
- * 宗教的指導者たちは、多くの支持者を得ていたということ。
- * 申13:1~18によれば、石打ちの刑に処すべきケースである。

(3) 紀元2世紀にまで遡ることのできるユダヤ人の記録

- ①イエスは、魔術を使って人々を惑わした(タルムードに記録されている)。
- ②この評価は、ユダヤの指導者だけでなく民衆も共有していた。
- ③イエスが奇跡を行ったことは否定していない。
- ④今も、この評価は生き続けている。

3. 13節

「しかし、ユダヤ人たちを恐れたため、イエスについて公然と語る者はひとりもいなかった」

- (1) 群衆は、公然と語るのではなく、ひそひそ話をしていた。
 - ①公然とイエスを支持する者はいなかったという意味である。
- (2) 彼らは、宗教的指導者たちを恐れた。
 - ①アリマタヤのヨセフ(ヨハ19:38)
 - ②弟子たち(ヨハ20:19)
 - ③共同体から追放される。
- (3) この張りつめた空気を破るのは誰なのか。

II. Q&A (1) (14~19節)

1. 14節

「しかし、祭りもすでに中ごろになったとき、イエスは宮に上って教え始められた」

- (1) 最初の3日は姿を見せないで、4日目に姿を現した。
 - ①神殿の外庭に、ソロモンの廊と呼ばれる場所があった。
 - ②高名なラビたちは、多くの聴衆を集めた。
 - ③イエスが教え始めると、多数の聴衆が集まった(メシアの街頭演説である)。
- (2) まだ王としての姿を現そうとはしておられない。

①イエスの心は、十字架に向かっている。

2. 15節

「ユダヤ人たちは驚いて言った。『この人は正規に学んだことがないのに、どうして学問があるのか』」

(1) 宗教的指導者たちがひそかに紛れ込んで、イエスの話に耳を傾けていた。

①イエスの話を聞いた人たちは、これまでも驚いていた。

②旧約聖書の知識、的を射た説明、心を探られる内容

(2) 「この人は正規に学んだことがないのに、どうして学問があるのか」

①ラビ的教育のことである。

②当時の人たちには、2つの可能性があった。

・専門のラビ教育機関(神学校)で学ぶ方法

・独学で学ぶ方法

③ここでは、第3の方法(情報源は悪魔である)が示唆されている。

④専門家集団の特権意識と閉鎖性などが表現されている。

⑤イエスは、第4の方法を開示する。

3. 16～17節

「そこでイエスは彼らに答えて言われた。『わたしの教えは、わたしのものではなく、わたしを遣わした方のものです。だれでも神のみこころを行おうと願うなら、その人には、この教えが神から出たものか、わたしが自分から語っているのかがわかります』」

(1) イエスの教えは、父から学んだものである。

①「わたしを遣わした方」とは、父なる神である。

②ユダヤ的には、これはイエスの神性宣言である。

③イエスは、神のみこころの啓示である。

(2) イエスの教えが父なる神からのものであることをどのようにして知るのか。

①まず、神のみこころを行おうと願う。

②従順は、霊的知識に至る。

③信仰は、より深いみことばの理解につながる。

(3) イエスを信じるのが神のみこころであることが分かるようになる。

4. 18～19節

「自分から語る者は、自分の栄光を求めます。しかし自分を遣わした方の栄光を求める者は真実であり、その人には不正がありません。モーセがあなたがたに律法を与えたではありませんか。それなのに、あなたがたはだれも、律法を守っていません。あなたがたは、なぜわたしを殺そうとするのですか」

(1) 神のことばを語ることと、自分の思いを語ることは、大いに異なる。

- ①100%神のことばだけを語るのは、イエスだけである。
- ②人間の説教者は、多かれ少なかれ、自分の栄光を求めてしまう。
- ③イエスは、父なる神の栄光だけを求めている。

(2) ユダヤ人の宗教的指導者たちの誇りを粉碎するイエス

- ①彼らは、モーセの律法を持っていることを誇りとしていた。
- ②しかし、律法の所有と、その実行とは、別の話である。
- ③彼らは、律法を誇りとしながら、それを守っていない。
- ④もし守っているなら、イエスをメシアとして受け入れたはずである。
- ⑤しかし彼らは、イエスを殺そうとしている。

III. Q&A (2) (20～24 節)

1. 20 節

「群衆は答えた。『あなたは悪霊につかれています。だれがあなたを殺そうとしているのですか』」

(1) 「群衆」は単数形である。

- ①きょうの箇所では、いくつものグループの人たちが登場している。
 - *ユダヤ人の宗教的指導者たち (ユダヤ人たち)
 - *ガリラヤや他の地方からの巡礼者たち (群衆)
 - *エルサレムに住む一般庶民

- ②20 節の言葉は、ガリラヤからの巡礼者たちである。
- ③彼らは、指導者の意見に同意している。
- ④しかし、エルサレムの住民のような情報通ではない。

(2) 彼らは、イエスのことばを聞いて悔い改めようとはしなかった。

- ①イエスは悪霊つきだという意見に、同調した。
- ②バプテスマのヨハネの場合

「ヨハネが来て、食べも飲みもしないと、人々は『あれは悪霊につかれているのだ』と言い、」(マタ 11:18)

③光が差してきた時に、暗やみに逃げ込もうというパターンがある。

「悪いことをする者は光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない」(ヨハ3:20)

2. 21～24節

「イエスは彼らに答えて言われた。『わたしは一つのわざをしました。それであなたがたはみな驚いています。モーセはこのためにあなたがたに割礼を与えました。——ただし、それはモーセから始まったのではなく、父祖たちからです——それで、あなたがたは安息日にも人に割礼を施しています。もし、人がモーセの律法が破られないようにと、安息日にも割礼を受けるのなら、わたしが安息日に人の全身をすこやかにしたからといって、何でわたしに腹を立てるのですか。うわべによって人をさばかないで、正しいさばきをしなさい』

(1) 彼らが悔い改めない理由は、律法を表面的にしか理解していないからである。

- ①律法の意図を理解しないで、外面の行為にこだわる。
- ②自分たちは正しいと思い込んでいるので、真実な教えに反発する。
- ③イエスを悪霊つきだと判断するのは、その反発の表れである。

(2) イエスは、ひとつの例を指摘する。

- ①「一つのわざ」とは、ベテスダの池での癒しである(ヨハ5章)。
- ②38年間病気の人が癒されたが、これは安息日に行われたいやしであった。
- ③これがきっかけで、ユダヤの指導者たちはイエスを迫害し始めた。

(3) この迫害の原因は、安息日の規定の誤解である。

- ①生まれて8日目の割礼は、安息日でも行う。
- ②割礼は肉体の痛みを伴う儀式であるが、安息日の規定よりも重要である。
- ③それなら、肉体の癒しが安息日の規定に優先するのは自明のことである。
- ④自明のことが分からないのは、表面的に人を裁いているからである。

結論

1. みことばの学びの方法

- (1) 専門教育を受ける。
- (2) 独学で学ぶ。
- (3) 神から学ぶ。
 - ①イエスの場合は、父なる神から学んだ。
 - ②私たちの場合は、聖霊が教えてくださる。

「生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわきまえるものだからです」(1コリ2:14)

・この愚かさとは、知的に理解できないことではなく、霊的なものである。

③御心を行うことによって学ぶ。

・ユダヤ的教育法。実践を通した学び。

・イエスの弟子訓練法

2. 霊的覚醒の方法

(1) 日本の教会に将来はあるか。

(2) ヨハ7:18

「自分から語る者は、自分の栄光を求めます。しかし自分を遣わした方の栄光を求める者は真実であり、その人には不正がありません」

(3) 自分の栄光を求める危険性を回避する最善の方法は、講解メッセージである。

(4) このメッセージを聞くことは、セミフォーマルな教育を受けることである。

(5) その上に、独学を積み重ねる。

(6) 最も大切なことは、聖霊に導かれてみことばを学ぶことである。

「仮庵の祭りで姿を現すイエス(2)」

§ 096 ヨハ7:11~52 (朗読は7:25~36)

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ① § 096~111 までは、後期ユダヤ伝道と呼ばれる箇所である。
- ② 十字架にかかる前の年
- ③ 仮庵の祭りから奉献の祭り(ハヌカ)までの3ヵ月間(10月~12月)
- ④ ヨハネとルカだけが取り上げている。
 - * ヨハネはエルサレムを中心に描いている。
 - * ルカはエルサレムの外、ユダヤ地方での働きを描いている。
- ⑤ イエスは、公にではなく、内密にエルサレムに上った(10節)。
- ⑥ イエスの登場によって、緊張感が高まる。
- ⑦ この箇所は、ヨハネに記録されたイエスの7つの説教の第4番目のものである。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「イエスが仮庵の祭りに来たことで、イエスのメシア性に関する議論が激しくなる」 (§ 96)

ヨハ7:11~52

(3) 登場人物

- ① 宗教的指導者たち
 - * パリサイ人
 - * 祭司長(24組の長)
- ② 群衆
 - * ガリラヤから来た巡礼者
 - * その他の地方から来た巡礼者(ディアスポラの地)
- ③ エルサレムの住民

2. アウトライン

- (1) 状況説明(11~13節)
- (2) Q&A(1)(14~19節)
- (3) Q&A(2)(20~24節)
- (4) Q&A(3)(25~30節)
- (5) 群衆の反応(31~36節)

- (6) イエスの招き(37~44節)
- (7) パリサイ人の反応(45~52節)
- (今回は、(4)~(5)を取り上げる)

4. 結論

- (1) 聖書的メシア論
- (2) ヨハネの福音書における「時」

イエスに関する疑問について、回答を得る。

IV. Q&A(3)(25~30節)

1. 25~26節

「そこで、エルサレムのある人たちが言った。『この人は、彼らが殺そうとしている人ではないか。見なさい。この人は公然と語っているのに、彼らはこの人に何も言わない。議員たちは、この人がキリストであることを、ほんとうに知ったのだろうか』」

- (1) エルサレムの住民たちの言葉である。
 - ①祭りに来ている巡礼者の群衆とは、区別されるグループである。
 - ②彼らは、指導者たちがイエスを殺す計画を練っていることを知っていた。
- (2) 彼らの驚きの理由
 - ①この人は、指導者たちが殺そうとしている人ではないか。
 - ②これは、「Yes」という答えを期待する疑問文である。
 - ③イエスの外見については、ガリラヤ人ほどの知識はない。
 - ④その人物が、公然と(おおっぴらに)教えている。
 - ⑤なのに、指導者たちは何も手を打とうとしていない。
 - ⑥彼らは、イエスがキリストであることを知ったのか。

2. 27節

「けれども、私たちはこの人がどこから来たのか知っている。しかし、キリストが来られるとき、それが、どこからか知っている者はだれもないのだ」

(1) 訳文比較

「だけどさ、この人がキリスト様のわけはないよ。どこの生まれか、身元が知れてるんだから。キリスト様は、どこからともなく、突然、現われなさるはずだからね」(LB)

(2) 当時流布していたメシア論

①バビロニアタルムード サンヘドリン 97a

「予期せぬ時に現れるものが3つある。メシア、神からの使者、そしてサソリ」

②指導者たちは、メシア誕生の地がベツレヘムであることを知っていた。

③しかし、一般的にはメシアは突如、神秘的な方法で出現すると信じられていた。

(3) 人々の戸惑い

①彼らは、イエスがガリラヤ出身であることを知っていた。

*ナザレの大工である。

②この情報は、彼らが描いていたメシア像とは異なる。

③もしイエスがメシアなら、そのように信ずべきである。

④もしイエスがメシアでないなら、即座に逮捕すべきである。

⑤指導者が正しく導いていないので、人々は混乱の中に置かれた。

3. 28 節

「イエスは、宮で教えておられるとき、大声をあげて言われた。『あなたがたはわたしを知っており、また、わたしがどこから来たかも知っています。しかし、わたしは自分で来たのではありません。わたしを遣わした方は真実です。あなたがたは、その方を知らないのです』

(1) 「**大声をあげて**」とは、厳粛な宣言が始まるしるしである。

①ヨハ1:15 (バプテスマのヨハネの証言)

②ヨハ7:37 (イエスの招きのことば)

③ヨハ12:44 (イエスの教え)

(2) 「**あなたがたはわたしを知っており、また、わたしがどこから来たかも知っています**」

①これは、アイロニー(皮肉)である。

②人々は、イエスが誰であるか、イエスがどこ出身であるか、知っている。

③しかし、それはイエスを人間として知っているだけのことである。

④残りの部分は、彼らは知らないのである。

(3) 「**しかし、わたしは自分で来たのではありません。わたしを遣わした方は真実です。あなたがたは、その方を知らないのです**」

①イエスを遣わした方は「真実である」とは、父なる神のことである。

②人々は、イエスを遣わした神を知らない。

4. 29 節

「わたしはその方を知っています。なぜなら、わたしはその方から出たのであり、その方がわたしを遣わしたからです」

(1) このことばは、イエスの神性宣言である。

①指導者たちを激怒させることばである。

5. 30節

「そこで人々はイエスを捕らえようとしたが、しかし、だれもイエスに手をかけた者はなかった。イエスの時が、まだ来ていなかったからである」

(1) 「イエスの時」とは、十字架にかかる時である。

①十字架に至るイエスの公生涯は、父なる神によって計画されていた。

(2) 神の守りがあるので、だれもイエスに手を出すことができない。

V. 群衆の反応(31~36節)

1. 31節

「群衆のうちの多くの者がイエスを信じて言った。『キリストが来られても、この方がしているよりも多くのしるしを行われるだろうか』」

(1) 多くの者がイエスを信じた。

①イエスは多くのしるしを行った。

②たとえメシアが登場したとしても、これほどのしるしは行わないだろう。

③つまり、イエスはメシアである。

(2) 彼らの信仰は、一時的なものであった。

①受難のメシアという理解がなかった。

2. 32節

「パリサイ人は、群衆がイエスについてこのようなことをひそひそと話しているのを耳にした。それで祭司長、パリサイ人たちは、イエスを捕らえようとして、役人たちを遣わした」

(1) パリサイ人にとっては、困った事態が到来した。

①イエスを逮捕するためにさっそく動く。

②当時、パリサイ人には人を逮捕する権限はなかった。

③紀元70年以降、権限を持つようになった。

④ヨハネは、その時代の読者のことを考えながらこれを書いている。

⑤「役人」とは、神殿を警備しているレビ人の守衛である。

3. 33～34節

「そこでイエスは言われた。『まだしばらくの間、わたしはあなたがたといっしょにいて、それから、わたしを遣わした方のもとに行きます。あなたがたはわたしを捜すが、見つからないでしょう。また、わたしがいる所に、あなたがたは来ることができません』」

(1) イエスを逮捕するために来た役人、パリサイ人、そして一般民衆へのことば

(2) 残された時は、少なくなっている。

①父なる神が時を定めておられる。

②人間に与えられている機会は、いつまでも続くものではない。

(3) イエスは父なる神のもとに行く。

①昇天のことである。

②ユダヤ人たちは、最もメシアの助けが必要なときに、メシアを発見することができなくなる。

③今もユダヤ人たちは、メシアを求めている。

④次に彼らがメシアを見るときは、嘆き、涙を流すときである。

*ゼカ 12 : 10～13

*黙 1 : 7

(4) 「また、わたしがいる所に、あなたがたは来ることができません」

①イエスと父とは、永遠に、完全な調和の中で住まわれる。

②そこに、罪を持った者が行くことはできない。

③以上の教えは、たとえ話を使ったものである。

④それゆえ、不信仰な者には理解することができない。

4. 35～36節

「そこで、ユダヤ人たちは互いに言った。『私たちには、見つからないという。それならあの人はどこへ行こうとしているのか。まさかギリシヤ人の中に離散している人々のところへ行行って、ギリシヤ人を教えるつもりではあるまい。「あなたがたはわたしを捜すが、見つからない」、また「わたしのいる所にあなたがたは来ることができない」とあの人が出たこのことばは、どういう意味だろうか』」

(1) これは、指導者たちの言葉である。

①「あの人」(こいつ) : 軽蔑のニュアンスを含めた言葉である。

(2) 「ギリシヤ人の中に離散している人々のところへ行って、」

- ①ディアスポラのユダヤ人のこと
- ②ギリシヤ人を教えるとは、異邦人を教えるということ。
- ③パレスチナでユダヤ人を教えることに失敗したので、ディアスポラの地で異邦人を教えようとするのか。
- ④そんなことができるはずがない。

(3) しかし、これは教会時代に起こることの無意識的な預言になっている。

- ①パウロの伝道は、ディアスポラのユダヤ人を訪問し福音を伝えるという方法。
- ②先ずユダヤ人に伝道する。
- ③次に異邦人に伝道する。

(4) 議論は、あくまでも平行線である。

- ①頑なな心があるので、イエスの人間性しか見えない。
- ②表面的な判断しかしていないので、イエスのことばの真意が理解できない。

結論

1. 聖書的メシア論

(1) 当時の民衆のメシア論

- ①突然現れる。
- ②神秘的に現れる。

(2) 聖書的メシア論

- ①メシアは、赤子として誕生された。
- ②メシアは、すべての人がたどる成長の過程をたどられた。
- ③メシアは、十字架の苦しみをしのばれた。
- ④メシアの辱めは、受肉の最初から始まっている。
- ⑤聖書的メシア論は、愛のメシア論である。

2. ヨハネの福音書における「時」

*ヨハネは、十字架の時を「時」という言葉で表現している。

*イエスの公生涯の節目を見逃すことなく、克明に記している。

(1) ヨハ2:4

「すると、イエスは母に言われた。『あなたはわたしと何の関係があるのでしょうか。女の方。わたしの時はまだ来ていません』」

(2) ヨハ7:6

「そこでイエスは彼らに言われた。『わたしの時はまだ来ていません。しかし、あなたがたの時はいつでも来ているのです』」

(3) ヨハ7:8

「あなたがたは祭りに上って行きなさい。わたしはこの祭りには行きません。わたしの時がまだ満ちていないからです」

(4) ヨハ8:20

「イエスは宮で教えられたとき、献金箱のある所でこのことを話された。しかし、だれもイエスを捕らえなかった。イエスの時がまだ来ていなかったからである」

(5) ヨハ10:39

「そこで、彼らはまたイエスを捕らえようとした。しかし、イエスは彼らの手からのがれられた」（神殿奉献祭：ハヌカの時）

(6) ヨハ13:1

「さて、過越の祭りの前に、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時が来たことを知られたので、世にいる自分のものを愛されたイエスは、その愛を残るところなく示された」

*イエスの時とは、愛の時である。

*試練に遭遇した時は、分かっていること（神の愛）を捨ててはならない。

「仮庵の祭りで姿を現すイエス(3)」

§ 096 ヨハ7:11~52 (朗読は7:37~52)

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ① 十字架にかかる前の年の仮庵の祭り(半年前)
- ② イエスは、公にではなく、内密にエルサレムに上った(10節)。
- ③ イエスの登場によって、緊張感が高まる。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「イエスが仮庵の祭りに来たことで、イエスのメシア性に関する議論が激しくなる」 (§ 96)

ヨハ7:11~52

2. アウトライン

- (1) 状況説明(11~13節)
 - (2) Q&A(1)(14~19節)
 - (3) Q&A(2)(20~24節)
 - (4) Q&A(3)(25~30節)
 - (5) 群衆の反応(31~36節)
 - (6) イエスの招き(37~44節)
 - (7) パリサイ人の反応(45~52節)
- (今回は、(6) ~ (7) を取り上げる)

3. 結論(救いの構造)

- (1) 招きの対象
- (2) 救いの前提
- (3) 救われた者への約束
- (4) 救いの証明

イエスの招きの意味について、考える。

VI. イエスの招き(37~44節)

1. 37節 a

「さて、祭りの終わりの大いなる日に、イエスは立って、大声で言われた」

(1) 「祭りの終わりの大いなる日」

- ① 仮庵の祭りは、7日間の祭りである。
- ② 8日目は、聖なる会合の日、安息の日である。

「七日間、あなたがたは火によるささげ物を【主】にささげなければならない。八日目も、あなたがたは聖なる会合を開かなければならない。あなたがたは火によるささげ物を【主】にささげる。これはきよめの集会で、労働の仕事はいっさいしてはならない」(レビ23:36)

(2) 仮庵の祭りの間に行われた儀式(最初の6日間)

- ① ギホンの泉に行列が向かい、金の水差しに水を汲む。
- ② その際、聖歌隊がイザ12:3を歌う。

「あなたがたは喜びながら／救いの泉から水を汲む」(イザ12:3)

- * 「マイム・マイム」は、1900年代に作曲された曲である。
- * 歌詞は、イザ12:3がそのまま採用された。

- ③ 神殿の祭壇の回りを1度回り、水を祭壇のそばに置いた容器に注ぐ。

(3) 7日目の儀式

- ① 前半は同じ。
- ② 祭壇の回りを7度回り、水を注ぐ。
- ③ この日から、雨のために祈り始める。
 - * 乾季から雨季に移行する時期である。
 - * 仮庵は、屋根が雨を防ぐ構造になっていない。
- ④ この祭りのテーマは、水である。

(4) 仮庵の祭りの意味

- ① 荒野の放浪を記念する。
 - * 水を汲むのは、岩から水が出たことを記念している。
- ② メシア時代を預言する。
 - * 朗読される聖書箇所は、ゼカ14:1~21とエゼ47:1~23である。

「その日には、エルサレムから湧き水が流れ出て、その半分は東の海に、他の半分は西の海に流れ、夏にも冬にも、それは流れる」(ゼカ14:8)

「彼は私を神殿の入口に連れ戻した。見ると、水が神殿の敷居の下から東のほうへと流れ出ていた。神殿が東に向いていたからである。その水は祭壇の南、宮の右側の下から流れていた」(エゼ47:1)

- * ユダヤ的理解では、神殿の敷居は地球の中心である。
- * 地球の中心から水が流れ出て、全地を潤すというイメージがある。

(5) 劇的な状況

- ①水がテーマになっている日に、水の約束を語る。
- ②イエスは立っている。通常のラビの姿勢ではない。
- ③大声で語っている。

2. 37節b~38節

「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる」

(1) イエスは、すべての人を招かれた。

- ①「わたしのもとに来て飲みなさい」とは、信じなさいという招きである。
- ②信じれば、「その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる」。

* 「rivers of living water」

(2) イエスは、どの聖書箇所かは語っていない。

- ①詩78:15~16、ゼカ14:8などが考えられる。

3. 39節

「これは、イエスを信じる者が後になってから受ける御霊のことを言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったため、御霊はまだ注がれていなかったからである」

(1) ヨハネによる解説

- ①「生ける水の川」とは、聖霊のことである。

(2) 「栄光を受ける」という意味

- ①十字架、復活、昇天のことである。
- ②昇天したイエスは、聖霊を信者の上に注がれた。
- ③使2章、ペンテコステの祭りでこの約束が成就した。
- ④この日は、教会の誕生日となった。

4. 40~43節

「このことばを聞いて、群衆のうちのある者は、『あの方は、確かにあの預言者なのだ』と言い、またある者は、『この方はキリストだ』と言った。またある者は言った、『まさか、キリストはガリラヤからは出ないだろう。キリストはダビデの子孫から、またダビデがいたベツレヘムの村から出る、と聖書が言っているではないか』。そこで、群衆の間にイエスのことで分裂が起こった」

(1) イエスの評価に関して、分裂が起こった。

①あの預言者(モーセのような預言者。申18:15)

②キリスト(メシア)

③ガリラヤ出身なので、キリストではない。

*ダビデの子孫であり、ベツレヘムから出るといふのは、正解である。

*しかし、イエスがベツレヘムで誕生したことは知らない。

5. 44節

「その中にはイエスを捕らえたいと思った者もいたが、イエスに手をかけた者はなかった」

(1) イエスの時がまだ来ていない。

①神の御心を歩む人は、その働きが完成するまでは、守られる。

VII. パリサイ人の反応(45~52節)

1. 45~46節

「それから役人たちは祭司長、パリサイ人たちのもとに帰って来た。彼らは役人たちに言った。『なぜあの人を連れて来なかったのか。』役人たちは答えた。『あの人と話のように話した人は、いまだかつてありません』」

(1) 役人たちは、手ぶらで帰ってきた。

①祭司長とパリサイ人たちは怒り、なぜ任務を果たさないのかと詰問する。

(2) 役人たちは、イエスの話に感動していた。

①これまでも高名なラビの話を聞いてきた。

②イエスの話は、そのどれとも異なっていた(イエスの神性をほぼ認めている)。

③罪人がイエスの話に感動した例がここにある。

2. 47~49節

「すると、パリサイ人が答えた。『おまえたちも惑わされているのか。議員とかパリサイ人のうちで、だれかイエスを信じた者があつたか。だが、律法を知らないこの群衆は、のろわれている』」

(1) 群衆が惑わされている理由は何か。

①律法に無知だから、こうなる。

②律法を学ばない者は、のろわれている。

(2) 議員とかパリサイ人で信じた者はいない。

- ①律法を学んだ者は、知恵があるので、惑わされない。
- ②ところが、次に登場するニコデモは信じている。

3. 50～52節

「彼らのうちのひとりで、イエスのもとに来たことのあるニコデモが彼らに言った。『私たちの律法では、まずその人から直接聞き、その人が何をしているのか知ったうえでなければ、判決を下さないのではないか。』彼らは答えて言った。『あなたもガリラヤの出身なのか。調べてみなさい。ガリラヤから預言者は起こらない』」

- (1) かつて、夜にイエスを訪問したことのあるニコデモが提言した。
 - ①モーセの律法に基づいて、相手の言い分を聞いてから判決を下すべきだ。
 - ②ニコデモは、すでにイエスを信じていたと思われる。

(2) 「ガリラヤから預言者は起こらない」

- ①これは間違っている。
 - *ホセア、ヨナ、エリシャは、ガリラヤ出身
- ②ガリラヤにラビの学校がなかったので、こういう発言になったのであろう。

結論

1. 招きの対象

「だれでも」

- (1) すべての人が招かれている。
- (2) 滅びに選ばれているという教えは、聖書にはない。
- (3) 個人への招きである。
- (4) イスラエルの民が民族的に救われるのは、終末時代である。
 - *彼らの救いもまた、聖霊の傾注による。
- (5) しかし、すべての人がイエスのもとに来るわけではない。

2. 救いの前提

「渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい」

- (1) 霊的渴きを覚えている人だけが、来る。
 - (例話) 祭りの後の空しさ。水差しの土産物。
- (2) イエスのもとに来る。
- (3) 水を飲むことが、比喩的にイエスを信じるという意味になっている。

3. 救われた者への約束

「わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる」

- (1) 神への渇きが癒される。
- (2) 霊的に新生する。
- (3) 聖霊の導きを受けるようになる。
- (4) 聖霊の力を受ける。

4. 救いの証明

- (1) 内から外への命の流れが始まる。
(例話) クリスチャンの聖地旅行の記憶は、常に新しい。
- (2) 命の流れは、隣人に影響を与える。
- (3) この流れは、信じた瞬間から始まる。

「姦淫の場で捕えられた女」

§ 097 ヨハ7:53~8:11

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①十字架にかかる前の年の仮庵の祭り(半年前)
- ②イエスは、祭りの終わりの大いなる日に、立って大声で人々を招かれた。
- ③そして、祭りが終わった。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「姦淫の女がイエスの前に連れてこられた話」 (§ 97)

ヨハ7:53~8:11

2. この箇所は聖書の一部なのか。

(1) 初期の写本群には、この箇所は含まれていない。

(2) ほとんどの学者が、この箇所はヨハネの福音書の原典の一部ではないと考える。

- ①プロテスタントの福音派は、これを聖典の一部とは認めない。
- ②カトリックは、ブルガタ訳に入っているので、聖典の一部と認める。

(3) 後になって、ギリシア語のヨハネの福音書に付加された(4種類の箇所がある)。

- ①ヨハ7:36の後
- ②ヨハ7:44の後
- ③ヨハ7:52の後
- ④ルカ21:38の後

(4) ヨハ20:30

「この書には書かれていないが、まだほかの多くのしるしをも、イエスは弟子たちの前で行われた」

- ①聖書に書かれていないが、歴史的事実であることが多くある。
- ②ほとんどの学者が、これを歴史的事実と認める。
- ③信頼できる初期の伝承が、写本製作をする書記によって付加されたのであろう。

3. アウトライン

(1) 状況説明(7:53~8:2)

- (2) 指導者たちが仕掛けた罠 (3～6 節 a)
- (3) イエスの応答 (6b～8 節)
- (4) 結末 (9～12 節)

4. 結論：3つの誤解

- (1) 罪に関する誤解
- (2) イエスのことばに関する誤解
- (3) イエスに関する誤解

イエスのことばに関する誤解を正す。

I. 状況説明 (7 : 53～8 : 2)

1. 7 : 53～8 : 1

「そして人々はそれぞれ家に帰った。イエスはオリーブ山に行かれた」

- (1) 祭りが終わったので、人々はそれぞれの家に帰った。
 - ①イエスを顔と顔を合わせて見て、信じる人たちが起こった。
 - ②しかし、大半の人たちがイエスを拒否した。
 - ③指導者たちの危機感はさらに深くなった。早くイエスを逮捕せねばならない。

(2) 訳語の問題

- ①1 節の冒頭にあるギリシア語の「de」が訳されていない。
- ②「but」を入れるべきである。
- ③「そして人々はそれぞれ家に帰った。しかし、イエスはオリーブ山に行かれた」
- ④イエスには、枕するところもないのである。
- ⑤ベタニヤに宿泊することもあったが、オリーブ山が主な宿泊地であった。

2. 2 節

「そして、朝早く、イエスはもう一度宮に入られた。民衆はみな、みもとに寄って来た。イエスはすわって、彼らに教え始められた」

- (1) 文脈上、この日は祭りの8日目である。
 - ①仮庵の祭りは、7日間続いた。
 - ②8日目は、聖なる会合の日、安息の日である。
 - ③イエスは、オリーブ山から神殿に向かわれた。徒歩で約30分弱。

(2) ルカ 21 : 37～38

「さてイエスは、昼は宮で教え、夜はいつも外に出てオリーブという山で過ごされた。

民衆はみな朝早く起きて、教えを聞こうとして、宮におられるイエスのもとに集まって来た」

- ①民衆は、いつものパターンで行動している。
- ②指導者たちは、イエスが神殿のどこに姿を現すかを予想できた。

II. 指導者たちが仕掛けた罠 (3~6節 a)

1. 3~5節

「すると、律法学者とパリサイ人が、姦淫の場で捕えられたひとりの女を連れて来て、真ん中に置いてから、イエスに言った。『先生。この女は姦淫の現場でつかまえられたのです。モーセは律法の中で、こういう女を石打ちにするように命じています。ところで、あなたは何と言われますか』」

(1) 律法学者は、律法の研究をし、写本を作る法律の専門家である。

①パリサイ人は、律法学者よりも広い概念である。

(2) 申 19 : 15

「どんな咎でも、どんな罪でも、すべて人が犯した罪は、ひとりの証人によっては立証されない。ふたりの証人の証言、または三人の証人の証言によって、そのことは立証されなければならない」

- ①姦淫の場で捕えられたひとりの女が真ん中に置かれた (恐らく既婚の女性)。
- ②証人が複数いる。
- ③有罪のケースである。

(3) レビ 20 : 10

「人がもし、他人の妻と姦通するなら、すなわちその隣人の妻と姦通するなら、姦通した男も女も必ず殺されなければならない」

(4) 申 22 : 22

「夫のある女と寝ている男が見つかった場合は、その女と寝ていた男もその女も、ふたりとも死ななければならない。あなたはイスラエルのうちから悪を除き去りなさい」

(5) モーセの律法によれば、男女ともに裁かれなければならない。

- ①男は逃げている。
- ②これは仕組まれた罠である。
- ③指導者たちが訴えている方法自体が、すでに律法違反である。

(6) モーセの律法によれば、この罪は石打ちに当たる。

- ① 「あなた」に強調がある。
- ② イエスが、モーセの律法をどう解釈し、どう適用するかを問うたのである。

2. 6節 a

「彼らはイエスをためしてこう言ったのである。それは、イエスを告発する理由を得るためであった」

(1) 彼らは、真剣にイエスを告発する理由を得ようとした。

- ① 告発する理由が見当たらないので、自分たちでそれを作り出した。
- ② これまでは、口伝律法を巡る議論が行われてきた。
- ③ ここでは、モーセの律法がテーマになっている。

(2) イエスが石打ちの刑を命じた場合

- ① その可能性は、大いにある。
- ② イエスは恵みに欠けると判断され、大衆の支持を失う。
- ③ イエスをローマの裁判に引き渡すことができる。
- ④ ヨハ 18 : 31

「そこでピラトは彼らに言った。『あなたがたがこの人を引き取り、自分たちの律法に従ってさばきなさい。』ユダヤ人たちは彼に言った。「私たちには、だれを死刑にすることも許されてはいません」

(3) イエスが赦しを宣言した場合

- ① イエスはモーセの律法に反することばを語った。
- ② それゆえ、イエスはメシアではないと言える。

Ⅲ. イエスの応答 (6b~8節)

1. 6b節

「しかし、イエスは身をかがめて、指で地面に書いておられた」

(1) イエスは地面になにを書かれたのか。

- ① この動詞では、文字でも、絵でも、何かのしるしでも、すべて可能性あり。
- ② ある人たちは、イエスが告発する人たちの罪を書いていたと推測する。
- ③ イエスが書いたものは残っていないが、文字を書けたことは確かである。

(2) 強調点は、「指で」にある。

- ①モーセの律法は、613の規定から成っている。
- ②その内、603は人間が手で書いたものである。
- ③十戒だけが、神の手によって書かれた。
- ④姦淫の禁止は、その中に出て来る。

(3) 出 31 : 18

「こうして主は、シナイ山でモーセと語り終えられたとき、あかしの板二枚、すなわち、神の指で書かれた石の板をモーセに授けられた」

(4) 出 32 : 15~16

「モーセは向き直り、二枚のあかしの板を手にして山から降りた。板は両面から書いてあった。すなわち、表と裏に書いてあった。板はそれ自体神の作であった。その字は神の字であって、その板に刻まれていた」

(5) イエスは、モーセの律法の作者である。

- ①告発する者たちは、罪を正すための正当な手続きを踏んでいない。
- ②イエスは、彼らの動機が間違っていることを知っておられた。

2. 7~8節

「けれども、彼らが問い続けてやめなかったので、イエスは身を起こして言われた。『あなたがたのうちで罪のない者が、最初に彼女に石を投げなさい。』そしてイエスは、もう一度身をかがめて、地面に書かれた」

(1) イエスのことばの背景には、モーセの律法のラビ的解釈がある。

(2) 申 17 : 6~7

「ふたりの証人または三人の証人の証言によって、死刑に処さなければならない。ひとりの証言で死刑にしてはならない。死刑に処するには、まず証人たちが手を下し、ついで、民がみな、手を下さなければならない。こうしてあなたがたのうちから悪を除き去りなさい」

- ①最初に石を投げる証人は、同じ罪を犯していない人でなければならない。
- ②イエスは、証人たちが同じ罪を心に宿していることを知っていた。

(3) ここでイエスは、罪の裁きを否定しているわけではない。

- ①イエスは、モーセの律法に違反していない。
- ②イエスは、モーセの律法の正しい運用を指示された。
- ③イエスは、罪を大目に見ているのではなく、指導者たちの罪を糾弾している。

IV. 結末 (9～12 節)

1. 9 節

「彼らはそれを聞くと、年長者たちから始めて、ひとりひとり出て行き、イエスがひとり残された。女はそのままそこにいた」

- (1) 証人たちは、全員が去って行った。
 - ①年長者は先に良心の呵責を覚えたのであろう。
 - ②彼らは、同じ罪を心に宿したのである。
 - ③告訴する者と証人がいなくなったので、告訴は取り下げられる。
- (2) イエスと女だけがその場に残された。
 - ①人の罪を裁くことができるのは、イエスだけである。

2. 10～11 節

「イエスは身を起こして、その女に言われた。『婦人よ。あの人たちは今どこにいますか。あなたを罪に定める者はなかったのですか。』彼女は言った。『だれもいません。』そこで、イエスは言われた。『わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。今からは決して罪を犯してはなりません』」

- (1) イエスは、罪を赦す権威をお持ちである。
 - ①罪を大目に見たのではない。
 - ②イエスは、神の小羊として罪の贖いの代価を支払おうとしておられる。
- (2) パリサイ人たちは、謙遜にさせられた。
 - ①これ以降、イエスに畏を仕掛けることはなくなった。

結論：3つの誤解

1. 罪に関する誤解

- (1) 律法学者とパリサイ人は、なぜこの女を告訴できたのか。
 - ①罪人は、自分よりも重大な罪を犯している人を見ると、糾弾したくなる。
 - ②相対的に自分が善人であるかのように思えてくる。
 - ③罪の現実是不変なのに、喜びを覚えるようになる。
- (2) すべての人は、神の前に罪人である。
 - ①イエスは、罪を容認していない。

- ②そのために、十字架にかかるのである。
- ③罪の解決法は、他者との比較によって与えられるものではない。
- ④イエスの十字架上での死を受け取る信仰が必要である。

2. イエスのことばに関する誤解

「あなたがたのうちで罪のない者が、最初に彼女に石を投げなさい」(7節)

- (1) このことばは、私たちは他者を裁くべきではないという意味に誤解される。
 - ①しかし、このことばは、他者を裁く者は罪のない者でなければならないという一般論を論じているのではない。

- (2) マタ 18 章にあった手順
 - ①傷つけられた人が、罪を犯した人と対面する。
 - ②ひとりかふたりの証人を連れて行って悔い改めを迫る。
 - ③それでもだめなら、地域教会に事実を告げる。
 - ④それさえも拒否したなら、教会の交わりから追放する。

3. イエスに関する誤解

ヨハ 1 : 14

「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた」

- (1) まことを強調することも、恵みを強調することも、アンバランスにつながる。

- (2) まこと (真理)
 - ①罪に対して厳しく対応する。
 - ②今後、決して罪を犯してはならないと言われた。

- (3) 恵み
 - ①罪の女を赦された。

「世の光イエス」

§ 098 ヨハ 8 : 12~20

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①十字架にかかる前の年の仮庵の祭り(半年前)
- ②イエスは、祭りの終わりの大いなる日に、立って大声で人々を招かれた。
- ③前回学んだ「姦淫の女」の箇所は挿入句であった。
- ④ヨハ 7 : 52 に続いて、8 : 12 が来る。
- ⑤ § 98 と § 99 は、5 番目の説教である(ヨハネの福音書に7つの説教がある)。
- ⑥今回は、§ 98 だけを取り上げる。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「パリサイ人たちは、自分は世の光であるというイエスの宣言に怒る」(§ 98)
ヨハ 8 : 12~20

2. アウトライン

(1) イエスの宣言(12節)

(2) 論争(13~19節)

- ①パリサイ人：自己証言は無効である(13節)
- ②イエスは証人を必要としない(14節)
- ③イエスの裁きは人間のそれとは違う(15~16節)
- ④イエスにも証人がいる(17~18節)
- ⑤パリサイ人：見たこともない父は証人になれない(19節)

(3) 結末(20節)

3. 結論：

- (1) 人生の渇きに対する答え
- (2) 人生の不安に対する答え

イエスは、人間の必要に答えるお方である。

I. イエスの宣言(12節)

1. 宣言の時はいつか。

- (1) 「姦淫の女」の箇所は挿入句である。

- ①つまり、祭りの終わりの日(7日目)が続いているということである。
- ②イエスは、人々を招かれた。

2. 宣言の場所はどこか。

(1) 宮の中である。

- ①20節によれば、「献金箱のある所」である。
- ②婦人の庭に13の献金箱が置かれていた。
- ③箱にはラッパのような形をした口が付いていた(ショフェロット)。
- ④人々、特にパリサイ人たちは、この口の中に献金を投げ込んでいた。

(2) ランプに火を灯す儀式

- ①仮庵の祭りでは、水を汲んで祭壇に注ぐ儀式があった。
- ②もう一つの儀式は、ランプに火を灯すというものである。
- ③巨大な燭台が2台そこに置かれた。
 - *50キュビトの高さ(22メートル)
 - *燭台の上に4個のランプが置かれていた。
 - *毎日、夕暮れになると、若い祭司たちがランプに火を灯した。
- ④ミシュナによれば、ランプの光は、エルサレムの狭い路地まで照らしたという。

(3) 音楽と踊り

- ①レビ人の聖歌隊が階段の上に整列し、讚美歌を歌った。
- ②詩120~134篇 「都上りの歌」、「都に上る歌」
 - *「שִׁיר הַמַּעֲלוֹת」(上りの歌)
 - *巡礼歌であり、祭司たちが階段を上った時に歌われた歌でもある。
- ③階段の段数は、15段である。「上りの歌」も15段である。
- ④その音楽に合わせて、祭司、パリサイ人、巡礼者たちが、夜通し踊った。
- ⑤仮庵の祭りは、喜びの祭りである。
- ⑥もう一つの光の祭りがある。ハヌカの祭り。

「そのころ、エルサレムで、宮きよめの祭りがあった」(ヨハ10:22)

3. 宣言の内容

「イエスはまた彼らに語って言われた。『わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです』(12節)

- (1)「彼ら」とは、霊的指導者たちと群衆であろう。
- (2)ユダヤの文書には、「世の光」という用語が頻繁に登場する。

- ①イスラエル、②エルサレム、③族長たち、④メシア、⑤神、⑥有名なラビたち、⑦律法 (以上に共通しているのは、究極的な意義を有するということ)

(2) ラビ的解釈

- ①ランプに火を灯す儀式は、シャカイナグローリーの象徴である。
- ②シャカイナグローリーは、イスラエルの間に住まれる神の臨在の現れである。
- ③出エジプト記の荒野の旅で現れた雲の柱と火の柱
- ④幕屋に宿ったシャカイナグローリー

(3) イエスの主張

- ①イエスは、ご自分がシャカイナグローリーだと宣言しておられる。
- ②変貌山では、3人の弟子たちがシャカイナグローリーを目撃した。
- ③さらに彼らは、天からかかった父の声を聞いた (バット・コル)。
- ④イエスは、イスラエルの民の間に現れたシャカイナグローリーである。
- ⑤ヨハネの福音書の中の2番目の「I am.」である。

II. 論争 (13~19 節)

1. 自己証言は無効である (13 節)

「そこでパリサイ人はイエスに言った。『あなたは自分のことを自分で証言しています。だから、あなたの証言は真実ではありません』 (13 節)

(1) これはモーセの律法に基づく法律議論である。

- ①申 17 : 6 と 19 : 15 の規定
 - *2人、または3人の証人の証言が必要である。
- ②ラビたちは、自己証言の有効性を認めなかった。

(2) しかし、「姦淫の女」の裁きにおいては、彼らはこの規定に違反した。

- ①自分たちが違反した規定を、イエスに適用している。
- ②彼らは、最初からイエスを信じるつもりはないのである。

2. イエスは証人を必要としない (14 節)

「イエスは答えて、彼らに言われた。『もしこのわたしが自分のことを証言するなら、その証言は真実です。わたしは、わたしがどこから来たか、また、どこへ行くかを知っているからです。しかしあなたがたは、わたしがどこから来たのか、またどこへ行くのか知りません』

- (1) イエスは、自分の場合は複数の証人を必要としないと言われた。

- ①ラビたちが自己証言を否定した理由は、人間には偏見(片寄り)があるから。
- ②イエスの場合は、それがない。イエスは、完ぺきな自己認識を持っておられた。
- ③自分が父のもとから来て、父のもとに帰ろうとしているのを知っていた。
- ④イエスは神であるので、その証言に誤りはない。

(2) しかし、パリサイ人たちは無知で、偏見に満ちている。

- ①彼らは、イエスがどこから来たかを知らない。
*父のもとから来たシャカイナグローリーだということを知らない。
- ②彼らは、イエスがどこに行くかを知らない。
*イエスは、死後に復活し、父なる神のもとに行こうとしておられる。

3. イエスの裁きは人間のそれとは違う(15~16節)

「あなたがたは肉によってさばきます。わたしはだれをもさばきません。しかし、もしわたしがさばくなら、そのさばきは正しいのです。なぜなら、わたしひとりではなく、わたしとわたしを遣わした方がさばくのだからです」

(1) パリサイ人たちの裁き

- ①肉による裁き
- ②表面的なことしか見ない。
- ③だから、イエスの本質が見えないのである。
- ④彼らはイエスのことを、「ナザレの大工」としてしか見ていない。

(2) イエスの裁き

- ①イエスは裁かない。
「神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである」(ヨハ3:17)
- ②終末における裁きも、イエスは父なる神の裁きを執行するだけである。
- ③しかし、もしイエスが裁くなら、その裁きは常に正しい。
- ④イエスひとりの裁きではなく、父なる神とともに裁くから。
- ⑤イエスは、ご自分が父なる神と一体であることを強調された。
- ⑥パリサイ人たちから見ると、これは冒涇罪に当たる。

4. イエスにも証人がいる(17~18節)

「あなたがたの律法にも、ふたりの証言は真実であると書かれています。わたしが自分の証人であり、また、わたしを遣わした父が、わたしについてあかしされます」

(1) 「あなたがたの律法」

- ①この言い方は、皮肉である。
- ②彼らはモーセの律法の所有者であるが、それを都合よく利用しているだけ。
*本当に所有者なら、その命令に完全に従うべきである。
- ③イエスは、律法が2人ないし3人の証人を要求していることを認めた。

(2) ここには、ユダヤ的議論がある(大から小の議論)。

- ①もし、人間の証人(2人ないし3人)が有効なら、ましてや…。
- ②イエスが、第1の証人である。
*イエスが行ったメシア的奇跡
- ③父なる神が、第2の証人である。
*天からの声
- ④それでもユダヤ人たちは、イエスを信じようとはしなかった。

5. 見たこともない父は証人になれない(19節)

「すると、彼らはイエスに言った。『あなたの父はどこにいるのですか。』イエスは答えられた。「あなたがたは、わたしをも、わたしの父をも知りません。もし、あなたがたがわたしを知っていたなら、わたしの父をも知っていたでしょう」

- (1) 彼らの言葉は、嘲りである。
 - ①あなたの父は誰かではなく、どこにいるのかと聞いた。
 - ②イエスが、神を父だと主張していると理解した。
 - ③イエスの誕生に関する噂を知っていたのであろう。
*タルムードでは、婚外子だとされている。
 - ④父が証人なら、法廷に姿を現さなければならない。

(2) イエスの回答

- ①福音書では、イエスは一度もヨセフを父と呼んでいない。
- ②イエスが誰であるかを知らないなら、父をも知らない。
- ③イエスを通してでなければ、父を知ることはない。

IV. 結末(20節)

1. 20節

「イエスは宮で教えられたとき、献金箱のある所でこのことを話された。しかし、だれもイエスを捕らえなかった。イエスの時がまだ来ていなかったからである」

- (1) イエスは、公然と話しておられた。

①神殿の中の婦人の庭、献金箱のある所で、教えた。

(2) しかし、だれもイエスを逮捕しなかった。

①神の守りがあったから。

②「イエスの時」(十字架の時)が、まだ来ていなかった。

結論：

はじめに：

(1) 仮庵の祭りの2つの儀式

①水を汲む儀式

②ランプに火を灯す儀式

(2) イエスは、この2つの儀式に応答して、人々を教えた。

1. 水を汲む儀式：人生の渇きへの回答

「さて、祭りの終わりの大いなる日に、イエスは立って、大声で言われた。『だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる』(ヨハ7:37~38)

(1) (例話) ある婦人の証し

2. ランプに火を灯す儀式：人生の不安への回答

「イエスはまた彼らに語って言われた。『わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです』(ヨハ8:12)

(1) (例話)

質問：創造主が神なら、それはどうして出来たのですか？最初から神が存在していたことが信じられません。

回答：イエス・キリストを通して神を知るのである。

(2) イエスの弟子たちは「世界の光」である。

「あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません」

(マタ5:14)

①イエスが太陽だとするなら、私たちは月である。

②イエスに従う者は、決して闇の中を歩くことがない。

「唯一の救い主イエス」

§ 099 ヨハ 8 : 21~30

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①十字架にかかる前の年の仮庵の祭り(半年前)
- ②「水の儀式」と「光の儀式」
- ③その状況にふさわしいイエスの招きのことば
- ④神殿の中でのイエスの教えが続いている。
- ⑤ § 98 と § 99 は、5番目の説教である(ヨハネの福音書に7つの説教がある)。
- ⑥今回は、§ 99 の前半を取り上げる。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「自らの罪が暴かれたのでイエスに石を投げようとするパリサイ人たち」(§ 99)
ヨハ 8 : 21~59

2. アウトライン

- (1) イエスの教え① (21 節)
- (2) パリサイ人たちの反応① (22 節)
- (3) イエスの教え② (23~24 節)
- (4) パリサイ人たちの反応② (25 節 a)
- (5) イエスの教え③ (25b~26 節)
- (6) パリサイ人たちの反応③ (27 節)
- (7) イエスの教え④ (28~29 節)
- (8) パリサイ人たちの反応④ (30 節)

3. 結論 :

- (1) 普遍的救いの教理は正しいか。
- (2) 信仰の妨げとは何か。
- (3) 指導者の権威をどこまで認めるべきか。
- (4) 信仰を告白する者はすべて救われているか。

イエスは、唯一の救い主である。

I. イエスの教え①

1. 21 節

「イエスはまた彼らに言われた。『わたしは去って行きます。あなたがたはわたしを捜すけれども、自分の罪の中で死にます。わたしが行く所に、あなたがたは来ることができません』」

- (1) イエスは将来自分の身に起こることを知っておられた。
 - ①十字架、埋葬、復活
 - ②昇天
 - ③イエスは、父なる神のもとに行こうとしていた。

- (2) パリサイ人たちは、自分の罪の中で死ぬ。
 - ①「罪」という言葉が単数形になっている。
 - ②ここでは、イエスをメシアとして受け入れないことが罪である。

- (3) ユダヤ人たちはメシアを探し続ける。
 - ①メシアはすでに来られ、彼らに語られた。
 - ②今も、ユダヤ人たちはメシアを待っている。

- (4) イエスが行く所に、彼らは来ることができない。
 - ①イエスは父なる神のもとに戻られる。

II. パリサイ人たちの反応①

1. 22 節

「そこで、ユダヤ人たちは言った。『あの人は「わたしが行く所に、あなたがたは来ることができない」と言うが、自殺するつもりなのか』」

- (1) 誤解
 - ①以前は、イエスが離散の地に行こうとしていると誤解した(ヨハ7:35)。
 - ②ここでは、イエスが自殺するつもりなのか、と誤解している。
 - ③ユダヤ教では、自殺は厳しく禁じられていた。
 - ④自殺した者は、ゲヘナの奥深い所に投げ込まれると教えられていた。

- (2) 皮肉
 - ①イエスは自分たちの追及を逃れるために、自殺しようとしている。
 - ②そうなれば、イエスはゲヘナの奥深い所に投げ込まれる。
 - ③敬虔なユダヤ人である自分たちがそこに行けないのは、当然のことである。

- (3) 彼らの反応は、罪の暗黒を示すものである。

Ⅲ. イエスの教え②

1. 23～24節

「それでイエスは彼らに言われた。『あなたがたが来たのは下からであり、わたしが来たのは上からです。あなたがたはこの世の者であり、わたしはこの世の者ではありません。それでわたしは、あなたがたが自分の罪の中で死ぬと、あなたがたに言ったのです。もしあなたがたが、わたしのことを信じなければ、あなたがたは自分の罪の中で死ぬのです』」

(1) 対比

①パリサイ人たちは、下(地上)から来た。

*それゆえ、彼らは「この世の者」である。

②イエスは、上(天)から来た。

*それゆえ、イエスは「この世の者」ではない。

(2) 反復

①イエスを信じない者は、「自分の罪の中で死ぬ」。

②「罪」は複数形である。つまり、行為としての罪のことである。

③罪の原理は、種々の行為となって現れる。

(3) 訳文の比較(24節)

「もしあなたがたが、わたしのことを信じなければ、あなたがたは自分の罪の中で死ぬのです」(新改訳)

『わたしはある』ということ信じないならば、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる」(新共同訳)

「もしわたしがそういう者であることをあなたがたが信じなければ、罪のうちに死ぬことになるからである」(口語訳)

①ギリシア語では、「わたしはある」(I am.)である。

②イエスが神であり、救い主であることを信じないならば、という意味である。

Ⅳ. パリサイ人たちの反応②

1. 25節a

「そこで、彼らはイエスに言った。『あなたはだれですか?』」

(1) 混乱し、怒るパリサイ人たち。

①イエスの神性宣言

②イエスを信じないなら、罪の中で死ぬという教え

(2) イエスの神性宣言に対する反応である。

- ①「あなたね、そんなことを言うとは、いったい自分を誰だと思っているのか」
- ②イエスを冒とく罪に定めようとする質問である。

V. イエスの教え③

1. 25節b

「イエスは言われた。『それは初めからわたしがあなたがたに話そうとしていることです』」

(1) 訳文の比較

「それは初めからわたしがあなたがたに話そうとしていることです」(新改訳)

「それは初めから話しているではないか」(新共同訳)

「わたしがどういう者であるかは、初めからあなたがたに言っているではないか」

(口語訳)

(2) イエスは意図的に、「メシア」という言葉を避けている。

- ①その言葉は、政治的意味合いを持っているから。
- ②これまで主張してきた内容に立って、答えている。

2. 26節

「わたしには、あなたがたについて言うべきこと、さばくべきことがたくさんあります。しかし、わたしを遣わした方は真実であって、わたしはその方から聞いたことをそのまま世に告げるのです」

(1) 追加すべき教えはまだたくさんある。

- ①パリサイ人の罪を暴いたり、裁きを宣言したりすることなどがそれであろう。
- ②しかしそれは、イエスがこの世に来た目的ではない。

(2) イエスは、遣わした方の御心だけを伝える。

- ①「わたしを遣わした方」とは、父なる神のことである。
- ②ユダヤ法では、使者は主人の命令を実行する範囲において、主人の権威によって守られる。

VI. パリサイ人たちの反応③

1. 27節

「彼らは、イエスが父のことを語っておられたことを悟らなかつた」

(1) イエスの教えは、比喻を用いた教えである。

- ①公生涯のこの段階では、イエスの教えは比喩的なものになっている。

②聴き手は、その教えの内容を理解することができない。

(2) 父のことを知らないので、イエスのことを知らない。

(3) イエスのことを知らないので、父のことを知らない。

VII. イエスの教え④

1. 28 節

「イエスは言われた。『あなたがたが人の子を上げてしまうと、その時、あなたがたは、わたしが何であるか、また、わたしがわたし自身からは何事もせず、ただ父がわたしに教えられたとおりに、これらのことを話していることを、知るようになります』」

(1) パリサイ人たちがイエスの本質を知るタイミング

①彼らがイエスを十字架に付けた時

②「人の子を上げる」とは、十字架に付けるという意味である。

③イザ 52 : 13 の七十人訳 (ギリシア語訳) から取られた言葉である。

「見よ、わがしもべは栄える。彼は高められ、あげられ、ひじょうに高くなる」

(イザ 52 : 13)

④イザ 52 : 14～53 : 12 の文脈は、メシアの受難である。

(2) 十字架は、イエスの本質を啓示する。

①すべての人が救われるという意味ではない。

②地震、暗黒、復活などが、イエスは神であることを示す。

③「わたしが何であるかを知るようになります」

* 「わたしはある」 (I am.)

2. 29 節

「わたしを遣わした方はわたしとともにおられます。わたしをひとり残されることはありません。わたしがいつも、そのみどころにかなうことを行うからです」

(1) イエスと父の愛による一体性

①人に拒否されても、父なる神はイエスから離れない。

②ヨハ 16 : 32

「見なさい。あなたがたが散らされて、それぞれ自分の家に帰り、わたしをひとり残す時が来ます。いや、すでに来ています。しかし、わたしはひとりではありません。父がわたしと一つしよにおられるからです」

VIII. パリサイ人たちの反応④

1. 30節

「イエスがこれらのことを話しておられると、多くの者がイエスを信じた」

- (1) 本物の信者と、見せかけの信者がいる。
- ①いつの時代にも、これと同じことが起こる。

結論：

1. 普遍的救いの教理は正しいか。

- (1) イエスは天の父のもとに上られる。
- (2) イエスを信じない者は、そこには行けない。
- (3) ユダヤ人にとっては、「罪の中で死ぬ」のは、恐ろしいことである。
- (4) エゼキエル 18 : 21~32

「わたしは悪者の死を喜ぶだろうか。——神である主の御告げ——彼がその態度を悔い改めて、生きることを喜ばないだろうか」(エゼキエル 18 : 23)

「わたしは、だれが死ぬのも喜ばないからだ。——神である主の御告げ——だから、悔い改めて、生きよ」(エゼキエル 18 : 32)

- ①死ぬと、悔い改めの機会がなくなる。
- ②ラビたちは、死刑囚に罪の告白を勧告した。
- ③自分の死が罪の贖いとなることを信じるように教えた。
- (5) イエスの教えでは、「悔い改め」とは、イエスを信じることである。

2. 信仰の妨げとは何か。

「あなたがたが来たのは下からであり、わたしが来たのは上からです。あなたがたはこの世の者であり、わたしはこの世の者ではありません」(ヨハ 8 : 23)

- (1) 信仰とは、究極的な異文化体験である。
- (2) イエスを通して、天の御国がこの世に侵入してきたのである。
- (3) イエスのことば、行動、人格を通して、超自然の世界に触れる。
- (4) イエスを信じた人は、この世に生きながら、この世の者ではなくなる。

3. 指導者の権威をどこまで認めるべきか。

「わたしには、あなたがたについて言うべきこと、さばくべきことがたくさんあります。しかし、わたしを遣わした方は真実であって、わたしはその方から聞いたことをそのまま世に告げるのです」(26節)

- (1) 遣わされた者は、遣わした者の代理として権威をふるう。
- (2) 権威の委譲は、無制限ではない。

- (3) 遣わした者の意図に従順であるという範囲内で、権威を与えられている。
- (4) 教会の霊的指導者にも同じことが言える。
 - ①指導者の責務は、神の教えの全体を教えること。
 - ②信者の責務は、忠実な指導者に従うこと。

4. 信仰を告白する者はすべて救われているか。

「イエスがこれらのことを話しておられると、多くの者がイエスを信じた」(30節)

(1) ヨハ2:23

「イエスが、過越の祭りの祝いの間、エルサレムにおられたとき、多くの人々が、イエスの行われたしるしを見て、御名を信じた」

- ①公生涯の最初にも、これと同じことが起こっていた。
- ②信仰が表面的なものであるか、救いに至るものであるか、吟味する必要がある。

(2) 信仰から離れる人の問題

- ①一時的なものであり、最後は必ず戻ってくる。
- ②最初から、救われていなかった。

「解放者イエス(1)」

ヨハ8:31~50

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①十字架にかかる前の年の仮庵の祭り(半年前)
- ②神殿中でのイエスの教えが続いている。
- ③§98と§99は、5番目の説教である(ヨハネの福音書に7つの説教がある)。
- ④今回は、§99の後半を取り上げる。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「自らの罪が暴かれたのでイエスに石を投げようとするパリサイ人たち」(§99)

ヨハ8:21~59

2. アウトライン

- (1) 罪からの解放者(31~39a節)
- (2) 悪魔からの解放者(39b~50節)
- (3) 死からの解放者(51~59節)

*今回は(1)と(2)を取り上げる。次回は(3)を取り上げる。

3. 結論:

- (1) 悪魔の働きとは。
- (2) アブラハムの業とは。
- (3) 奴隷と息子とは。

イエスは、解放者である。

I. 罪からの解放者(31~39a節)

1. イエスの教え(31~32節)

「そこでイエスは、その信じたユダヤ人たちに言われた。『もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、あなたがたはほんとうにわたしの弟子です。そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします』」

- (1) 前回の箇所、多くの者がイエスを信じた。
- (2) イエスは、信じた者を2分された。
 - ①弟子(学ぶ者という意味)
 - ②本当の弟子(イエスに身を預けた者)

(3) 本当の弟子の特徴

- ①イエスのことばにとどまることによって、本当の弟子になるのではない。
- ②本当の弟子になったから、イエスのことばにとどまるのである。
- ③とどまるとは、信じ続けることである。イエスとつながっていることである。

(3) 本当の弟子が受ける祝福

- ①イエスのことばにとどまる人は、真理を知る。
- ②真理はその人を自由にする。
- ③ギリシア的概念では、「真理」は、「現実、実在、事実」と関係した言葉である。
- ④ヘブル的概念では、「真理」は「約束や言葉に対する忠実さ」である。
 - *神は、ご自身の約束に忠実なお方である。
 - *イエスは、神の真実なご性質に言及している。
- ⑤聖書に啓示された神を知ることは、人を自由にする(罪からの解放)。

2. ユダヤ人たちの反論(33節)

「彼らはイエスに答えた。『私たちはアブラハムの子孫であって、決してだれの奴隷になったこともありません。あなたは どうして、「あなたがたは自由になる」と言われるのですか?』(33節)

(1) ユダヤ人たちの誤解

- ①奴隷という言葉に、政治的な意味に誤解している。
- ②彼らは、エジプト、アッシリヤ、バビロン、ペルシヤ、ローマの奴隷となった。

(2) ユダヤ人たちの無知

- ①彼らは、自分たちはアブラハムの子孫だと思っていた。
 - *アブラハムの子孫なら、メシア的王国に自動的に入れる。
 - *本当の弟子なら、パリサイ的教を捨てることになる。
 - *パウロは、パリサイ的教を捨てた。
- ②彼らは、自分たちが罪と悪魔の奴隷であることに気付いていない。

3. イエスの教え(34~38節)

「イエスは彼らに答えられた。『まことに、まことに、あなたがたに告げます。罪を行っている者はみな、罪の奴隷です。奴隷はいつまでも家にいるものではありません。しかし、息子はいつまでもいます。ですから、もし子があなたがたを自由にするなら、あなたがたはほんとうに自由なのです。わたしは、あなたがたがアブラハムの子孫であることを知っています。しかしあなたがたはわたしを殺そうとしています。わたしのことばが、あなたがたのうちに入っ

ていないからです。わたしは父のもとで見たことを話しています。ところが、あなたがたは、あなたがたの父から示されたことを行うのです』(34~38節)

(1) 奴隷とは、罪の奴隷のことである。

①罪を行っている者はみな、罪の奴隷である。

②罪が擬人法で語られている。

③ロマ6:23でパウロが同様に語っている。

「罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです」(ロマ6:23)

(2) イエスは、奴隷と息子の身分の違いを例話として語る。

①奴隷の身分は保証されていないが、息子の身分は保証されている。

②イエスを信じた者は神の子とされているので、自由になっている。

(3) イエスは、彼らがアブラハムの肉体的子孫であることを認めている。

①しかし、彼らはアブラハムの信仰を持っていない。

②なぜなら、彼らはイエスを殺そうとしている。

(4) 彼らがイエスを殺そうとする理由は、イエスのことばが心に入っていないから。

①イエスは父のもとで見たことを話している。イエスと父はひとつである。

②彼らは、彼らの父から示されたことを行う。

*彼らの父が誰かは、まだ示されていないが、予想は付く。

4. ユダヤ人たちの反論(39a節)

「彼らは答えて言った。『私たちの父はアブラハムです』(39a節)

(1) 再度、アブラハムと自分たちの肉体的つながりを主張した。

①ユダヤ人たちは、自分たちがアブラハムの子孫であることを誇りとした。

(2) 彼らは、イエスが罪からの解放者であることを理解できなかった。

II. 悪魔からの解放者(39b~50節)

1. イエスの教え(39b~41a節)

「イエスは彼らに言われた。『あなたがたがアブラハムの子どもなら、アブラハムのわざを行いなさい。ところが今あなたがたは、神から聞いた真理をあなたがたに話しているこのわたしを、殺そうとしています。アブラハムはそのようなことはしなかったのです。あなたがたは、あなたがたの父のわざを行っています』

- (1) 「子ども」は、父親のように考え、父親のように行動する。
- (2) しかし、ユダヤ人たちはアブラハムのように行動していない。
 - ①彼らは、神から聞いた真理を話しているイエスを殺そうとしている。
 - ②アブラハムは、そのようなことをしなかった。
 - ③アブラハムは、神を信じ、義とされた。真理に信頼したのである。
- (3) ユダヤ人たちは、アブラハムではない別の「父」のわざを行っている。
 - ①それゆえ、アブラハムは彼らの父ではない。
 - ②その父とは悪魔であることが、暗示されている。

2. ユダヤ人たちの反論(41b節)

「彼らは言った。『私たちは不品行によって生まれた者ではありません。私たちにはひとりの父、神があります』」

- (1) 法律上に父がいて、肉体的に別の父がいるのは、母親が不品行を犯したから。
 - ①アブラハムは法律上の父であるが、それとは別に、父がいる。
- (2) ユダヤ人たちは、自分たちは不品行によって生まれた者ではないと言う。
 - ①これは、偶像礼拝の民ではないという主張である。
 - ②さらに、イエスが不品行から生まれたことを示唆している可能性もある。

*マリアがローマ兵に生んだのがイエスだというユダヤ人の記録がある。

3. イエスの教え(42~43節)

「イエスは言われた。『神がもしあなたがたの父であるなら、あなたがたはわたしを愛するはずです。なぜなら、わたしは神から出て来てここにいるからです。わたしは自分で来たのではなく、神がわたしを遣わしたのです。あなたがたは、なぜわたしの話していることがわからないのでしょうか。それは、あなたがたがわたしのことばに耳を傾けることができないからです』」

- (1) ユダヤ人の家族制度
 - ①家族の間に愛がある。
 - ②神が父なら、彼らは父を愛するはずである。
 - ③父を愛するなら、父が派遣した者を愛するはずである。
- (2) イエスのことば(ロゴス)を理解できないのは、霊的に盲目だからである。
 - ①生まれながらの人間は、御霊に属することを受け入れない(1コリ2:14)。

4. イエスの教え(44~47節)

「あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと願っているのです。悪魔は初めから人殺しであり、真理に立ってはいません。彼のうちには真理がないからです。彼が偽りを言うときは、自分にふさわしい話し方をしているのです。なぜなら彼は偽り者であり、また偽りの父であるからです。しかし、このわたしは真理を話しているために、あなたがたはわたしを信じません。あなたがたのうちだれか、わたしに罪があると責める者がいますか。わたしが真理を話しているなら、なぜわたしを信じないのですか。神から出た者は、神のことばに聞き従います。ですから、あなたがたが聞き従わないのは、あなたがたが神から出た者でないからです」

- (1) ここでイエスは、彼らの父が悪魔であることを明らかにする。
 - ①悪魔に見習っているという意味で、悪魔は父なのである。
 - ②悪魔は、偽りの父、人殺し、真理を否定する者(イエスを殺そうとしている)。
- (2) イエスに罪があると責める者はいない。
 - ①モーセの律法に違反していないということ。
- (3) イエスが真理を話しているのに、それを信じないのは、悪魔から出ているから。

5. ユダヤ人たちの反論(48節)

「ユダヤ人たちは答えて、イエスに言った。『私たちが、あなたはサマリヤ人で、悪霊につかれていると言うのは当然ではありませんか』(40節)

- (1) 正しく反論できないと、罵倒する言葉が出て来る。
 - ①ラビ的悪霊論によれば、悪霊の長は「ショムロニ」である。
 - ②ヘブル語では、これはサマリヤ人か悪霊を指す言葉である。
 - ③イエスをサマリヤ人と呼ぶのは、悪霊につかれているという意味である。
 - ④一般のユダヤ人が、イエスは悪霊つきだと主張する指導者たちの意見を採用。

6. イエスの教え(49~50節)

「イエスは答えられた。『わたしは悪霊につかれてはいません。わたしは父を敬っています。しかしあなたがたは、わたしを卑しめています。しかし、わたしはわたしの榮譽を求めません。それをお求めになり、さばきをなさる方がおられます』

- (1) イエスは、父なる神の御心しか行っていない。
- (2) 父がイエスを信じない者をさばかれる。
- (3) 父がイエスに榮譽を与える。
- (4) かくしてユダヤ人たちは、悪魔からの解放者イエスを信じるができなかった。

結論：

1. 悪魔の働き

- (1) 悪魔に似た考え方、行動パターンを取っていると、悪魔の子である。
- (2) 悪魔は、最初の嘘を言い、最初の殺人の原因を作った。
- (3) 彼らは悪魔の教えに耳を傾け、イエスを悪霊つきと呼んだ。
- (4) 彼らが嘘を言い、人を殺すのは、悪魔の子どもたちだからである。
- (5) 悪魔が彼らの目を閉ざしている。
- (6) 2コリ 4:3~4

「それでもなお私たちの福音におおいが掛かっているとしたら、それは、滅びる人々の場合に、おおいが掛かっているのです。その場合、この世の神が不信者の思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光にかかわる福音の光を輝かせないようにしているのです」

2. アブラハムの業

「あなたがたがアブラハムの子どもなら、アブラハムのわざを行いなさい」(39節b)

- (1) 創 15:6
「彼は【主】を信じた。主はそれを彼の義と認められた」
- (2) アブラハムのわざとは、神のことばを信じることである。
- (3) ユダヤ人たちがそれをしていないのは、アブラハムの子どもでないから。
- (4) イエスを信じる者は、罪の束縛から自由になる。
- (5) 将来の行動が、今の告白が真実であるかどうかを証明する。

3. 奴隷と息子

- (1) クリスマンになるとは、罪と悪魔の奴隷から神の子にされること。

①神の養子になること。

- (2) イシュマエルとイサクの対比

「それでアブラハムに言った。『このはしためを、その子といっしょに追い出してください。このはしための子は、私の子イサクといっしょに跡取りになるべきではありません』
(創 21:10)

「しかし、聖書は何と言っていますか。『奴隷の女とその子どもを追い出せ。奴隷の女の子どもは決して自由の女の子どもとともに相続人になってはならない。』こういうわけで、兄弟たちよ。私たちは奴隷の女の子どもではなく、自由の女の子どもです」(ガラ 4:30~31)

「解放者主イエス（2）」

ヨハ8：51～59

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①十字架にかかる前の年の仮庵の祭り（半年前）
- ②神殿の中でのイエスの教えが続いている。
- ③ §98 と §99 は、5番目の説教である（ヨハネの福音書に7つの説教がある）。
- ④今回は、§99の最後の部分を取り上げる。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「自らの罪が暴かれたのでイエスに石を投げようとするパリサイ人たち」（§99）

ヨハ8：21～59

2. アウトライン

- (1) 罪からの解放者（31～39a 節）
- (2) 悪魔からの解放者（39b～50 節）
- (3) 死からの解放者（51～59 節）

*今回は（3）を取り上げる。

*今回のアウトライン

- (1) イエスの教え①（51 節）
- (2) ユダヤ人たちの応答①（52～53 節）
- (3) イエスの教え②（54～56 節）
- (4) ユダヤ人たちの応答②（57 節）
- (5) イエスの教え③（58 節）
- (6) ユダヤ人たちの応答③（59 節）

3. 結論：

- (1) イエスの神性宣言の内容
- (2) イエスの神性宣言への応答

イエスは、死からの解放者である。

I. イエスの教え①（51 節）

1. 51 節

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。だれでもわたしのことばを守るならば、その人は決して死を見ることはありません」

(1) この宣言は、「福音」そのものである。

① 訳文の比較

「まことに、まことに、あなたがたに告げます」(新改訳)

「はっきり言うておく」(新共同訳)

「よくよく言うておく」(口語訳)

「Verily, verily, I say unto you.」(KJV)

「Truly, truly, I say unto you.」(RSV)

② 原文では、「アーメン、アーメン」である。

* 重要な宣言の前に、注意を喚起するために用いる言葉である。

* ヨハネの福音書では、25回出て来る。

* 共観福音書に、2重のアーメンは出てこない。

(2) 福音の内容

「だれでもわたしのことばを守るならば、その人は決して死を見ることはありません」

① 「決して死を見ることはありません」

* この死は、肉体の死ではなく、永遠の死である。

* 永遠の死とは、永遠に神から切り離されることである。

* ヨハ3:16では、「滅びる」と表現される状態である。

② 「だれでもわたしのことばを守るなら」

* ヨハ8:31では、「わたしのことばにとどまるなら」と言われていた。

* イエスのことばに対する信仰的な応答のことを意味している。

* 業による救いではなく、信仰の結果としての行為を意味している。

③ このような宣言ができるのは、神しかいない。

II. ユダヤ人たちの応答① (52~53節)

1. 52節

「ユダヤ人たちはイエスに言った。『あなたが悪霊につかれていることが、今こそわかりました。アブラハムは死に、預言者たちも死にました。しかし、あなたは、「だれでもわたしのことばを守るならば、その人は決して死を味わうことがない」と言うのです』」

(1) ユダヤ人たちの誤解

① 「死を味わうことがない」を、肉体的死と理解した。

② 死なない人がいるとしたら、それはアブラハムや預言者たちである。

- ③しかし、アブラハムも預言者たちも死んだ。
- ④その矛盾をどう説明するのか。

(2) ユダヤ人たちの推論

- ①イエスは、気が狂っている。
- ②あるいは、悪霊につかれている。
- ③以前よりも深く、イエスが悪霊につかれていることを確信した。

2. 53節

「あなたは、私たちの父アブラハムよりも偉大なのですか。そのアブラハムは死んだのです。預言者たちもまた死にました。あなたは、自分自身をだれだと言うのですか」

- (1) 最初の質問は、「ノー」という回答を予想する形になっている。
 - ①イエスが「私たちの父アブラハム」よりも偉大であるはずがない。
- (2) アブラハムや預言者たちは死んだ。
 - ①彼らは、他人を救うどころか、自分自身を死から救うことさえできなかった。
 - ②なのに、イエスは他人を死から救うことができると教えている。
 - ③イエスは、自分のことをだれだと思っているのか。
 - ④イエスは、自分が目立つために活動しているのだろう。
- (3) ここには、2重の誤解がある。
 - ①イエスは、アブラハムよりも偉大である。
 - ②イエスは、自分に関心を向けさせるために働いているのではない。

III. イエスの教え② (54～56節)

1. 54節 a

「イエスは答えられた。『わたしがもし自分自身に栄光を帰するなら、わたしの栄光はむなしいものです。わたしに栄光を与える方は、わたしの父です』」

- (1) ユダヤ人たちの誤解を解く。
 - ①ヨハ8:50でイエスは、自分で自分の栄光を求めないと言われた。
 - ②自分で自分に栄光を帰すなら、それはむなしいものである。
 - ③父なる神がイエスを弁護し、イエスに栄光を与える。

2. 54節 b～55節

「この方のことを、あなたがたは『私たちの神である』と言っています。けれどもあなたがたはこの方を知ってはいません。しかし、わたしは知っています。もしわたしがこの方を知らないと言うなら、わたしはあなたがたと同様に偽り者となるでしょう。しかし、わたしはこの方を知っており、そのみことばを守っています」

(1) ユダヤ人たちは偽り者である。

①彼らは、天の父を「私たちの神である」と言っている。

*これは、神との契約関係を示す言葉である。

②しかし、彼らは天の父を知らない。

*契約に忠実な者(神の律法を守る者)は、「神を知る者」と呼ばれた。

*ユダヤ人たちは、神の律法を守っていないので、神を知らない者である。

③彼らの父は「悪魔」である。

*父が偽り者なので、彼らもまた偽り者となる。

(2) イエスは偽り者ではない。

①イエスは父を知っており、そのみことばを守っている。知る=守る。

②ユダヤ人たちは、イエスが父と同等であることを否定するように期待した。

③しかし、イエスの場合は、もし父を知らないというなら偽り者となる。

3. 56節

「あなたがたの父アブラハムは、わたしの日を見ることを思って大いに喜びました。彼はそれを見て、喜んだのです」

(1) 彼らが議論の中にアブラハムを持ち込んでくるので、イエスはそれに応答する。

①「あなたがたの父アブラハム」とは、肉体的な関係のことである。

②「わたしの日」とは、メシアの到来のことであり、メシアがもたらす救いのことである。

(2) アブラハムはいつ、それを見て喜んだのか。

①ユダヤ教の伝統が強調すること

*アブラハムは、イスラエルを抑圧する諸帝国と、その先のメシア時代に関する啓示を受けた。

②創12:3の中に、それを見たのかもしれない。

「あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。

地上のすべての民族は、あなたによって祝福される」(創12:3)

③あるいは、イサクを捧げた時に、それを見たのかもしれない。

*イサク奉獻は、メシアの死と復活の予表である。

*アブラハム、信仰によってそれを理解した。

IV. ユダヤ人たちの応答② (57節)

1. 57節

「そこで、ユダヤ人たちはイエスに向かって言った。『あなたはまだ五十歳になっていないのにアブラハムを見たのですか』」

(1) ユダヤ人たちの誤解

- ①イエスは、アブラハムを見たとは言っていない。その逆である。
- ②彼らは、イエスとアブラハムが同時代であるはずがないと考えた。
- ③イエスの当時の年齢は、33歳前後である。
- ④当然、50歳にはなっていない。
- ⑤50歳は、祭司としての役割を終える年齢である。

V. イエスの教え③ (58節)

1. 58節

「イエスは彼らに言われた。『まことに、まことに、あなたがたに告げます。アブラハムが生まれる前から、わたしはいるのです』」

- (1) ここでも、「アーメン、アーメン」が出て来る。
- (2) これは、イエスによる神性宣言である。
 - ①イエスの永遠性が啓示されている。

VI. ユダヤ人たちの応答③ (59節)

「すると彼らは石を取ってイエスに投げつけようとした。しかし、イエスは身を隠して、宮から出て行かれた」

1. 59節

- (1) 今度は、誤解はない。
 - ①イエスは、自分が神だと主張された。
 - ②ユダヤ的には、自分はメシアだと宣言しても、冒瀆罪に当たらない。
 - ③しかし、自分を神と等しくすることは冒とく罪に当たる。
 - ④そこで彼らは、イエスに石を投げつけようとした。
 - ⑤神殿は工事中なので、投げられるような石が多数あった。
 - ⑥ヨセフスの記録では、熱心党のユダヤ人たちが石を投げている。

(2) 旧約聖書に登場する石を投げられそうになった人々

- ①モーセ(出17:4)
- ②ヨシュアとカレブ(民14:10)
- ③ダビデ(1サム30:6)

(3) しかし、彼らはイエスを逮捕することができなかった。

- ①十字架の時はまだ来ていないから。

結論:

1. イエスの神性宣言の内容

(1) ヨハ8:58

「イエスは彼らに言われた。『まことに、まことに、あなたがたに告げます。アブラハムが生まれる前から、わたしはいるのです』」

- ①「まことに、まことに」
- ②「わたしはいるのです」
 - *「わたしはある」(新共同訳)
 - *「I am.」

(2) 出3:14

「神はモーセに仰せられた。『わたしは、「わたしはある」という者である。』また仰せられた。『あなたはイスラエル人にこう告げなければならない。「わたしはあるという方が、私をあなたがたのところに遣わされた」と』」

- ①神の永遠性を教える御名である。

(3) イエスはこの御名を使用された。

- ①イエスは、燃える柴の炎(シャカイナグローリー)とご自身を同一だとされた。

2. イエスの神性宣言への応答

(1) 肯定的応答

- ①イエスを救い主として信じるなら、死を見ることはない。
- ②永遠の滅びからの解放が与えられる。

(2) 否定的応答

- ①ユダヤ人たちは、自分たちの目の前に神が立っていることを認めなかった。
- ②それゆえイエスは、「身を隠して、宮から出て行かれた」。
- ③1サム4:21

「彼女は、『栄光がイスラエルから去った』と言って、その子をイ・カボデと名づけた。これは神の箱が奪われたこと、それに、しゅうとと、夫のことをさしたのである」

*エリの息子ピネハスの妻

*「イ・カボデ」とは、「栄光がない (no glory)」という意味である。

- ④エゼ10~11章

*主の栄光(シャカイナグローリー)が、神殿を去った記録。

- ⑥イエスが神殿を去ったのは、ユダヤ的に言えば、「イ・カボデ」である。

(3) イエスを誰だと言うか。

- ①イエスを信じるなら、シャカイナグローリーとともに住むようになる。
- ②イエスを拒否するなら、シャカイナグローリーから切り離される。
- ③人生で感じる空しさ、恐怖は、「イ・カボデ」の予表である。

「生まれつきの盲人の癒し(1)」

ヨハ9:1~12

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①十字架にかかる前の年の仮庵の祭り(半年前)
- ②イエスは神殿を去ったが、まだエルサレムにとどまっている。
- ③この箇所は、ヨハネの福音書の7つの奇跡の第6番目を含む。
- ④イザヤによるメシア預言(イザ42:7):メシアは盲人の目を開く。
- ⑤イエスは何人もの盲人の目を開かれたが、この箇所の癒しは、特別である。
*イエスのメシア性を示すメシア的奇跡である。
- ⑥ヨハ8:12の宣言の直後に起きた奇跡である。

「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです」(ヨハ8:12)

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「イエスは生まれつきの盲人を癒す」(§100)

ヨハ9:1~41

2. アウトライン

- (1) 肉体的癒し(1~12節)
- (2) 最初の尋問(13~17節)
- (3) 両親の尋問(18~22節)
- (4) 第2の尋問(23~34節)
- (5) 霊的癒し(35~41節)
*今回は(1)を取り上げる。

*今回のアウトライン

- (1) イエスの選び(1節)
- (2) 神学的質問(2~5節)
- (3) 癒しの業(6~7節)
- (4) 癒しの結果(8~12節)

3. 結論:

- (1) 絶望的なケース

(2) シロアムの池

イエスは、世の光である。

I. イエスの選び(1節)

1. 1節

「またイエスは道の途中で、生まれつきの盲人を見られた」(1節)

(1) 盲人は、他者の慈善によってしか生きる道はなかった。

① 神殿に近い場所が、最も収入を得られる場所である。

② 使3:2では、生まれつき足のなえた人が、「美しの門」に置かれていた。

③ この箇所のお跡は、恐らく、イエスが神殿を去った直後に起こったのであろう。

(2) イエスは主権者としてこの盲人を選んでいる。

① 絶望的なケース：生まれつきの盲人

② この人は、靈的にも盲目である。

II. 神学的質問(2~5節)

1. 2節

「弟子たちは彼についてイエスに質問して言った。『先生。彼が盲目に生まれつきたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか』」(2節)

(1) ユダヤ人たちは、すべての苦難は罪が原因となって起こると信じていた。

① 彼自身の罪のゆえに、彼は盲目に生まれつきたのか。

② 両親の罪のゆえに、彼は盲目に生まれつきたのか。

(2) エゼ18:4

「見よ。すべてのいのちはわたしのもの。父のいのちも、子のいのちもわたしのもの。罪を犯した者は、その者が死ぬ」(エゼ18:4)

① 人は、その人自身の罪の責任を問われる。

(3) 出20:5

「それらを拜んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、【主】であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、」(出20:5)

① 親の罪は、子孫の代にまで影響を及ぼす。

(4) 人は、誕生の前に罪を犯すことができるのか。

- ①パリサイ派の教え
- ②胎児には、善なる性質と悪なる性質が与えられている。
- ③悪なる性質が勝つと、敵意をもって母親の腹を蹴飛ばすようになる。
- ④これは、両親を敬わないという罪である。
- ⑤この盲人の癒しは、メシアにしかできないものである。

2. 3節

「イエスは答えられた。『この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現れるためです』(3節)

(1) イエスによる第3の答え。

- ①AでもBでもなく、Cである。

(2) ロマ3:23

「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、」(ロマ3:23)

- ①この人や両親が罪を犯さなかったという意味ではない。
- ②罪は、この世界に死と呪いをもたらした。
*すべての人は、罪人である。
- ③しかし、特定の病や試練を、罪の結果だと考えてはならない。

(3) 神はこの人が盲目で生まれることを許された。

- ①神のわざがこの人に現れるためである。

3. 4~5節

「わたしたちは、わたしを遣わした方のわざを、昼の間に行わなければなりません。だれも働くことのできない夜が来ます。わたしが世にいる間、わたしは世の光です」

(1) 日常的な体験を用いた教え

- ①夜間に働いているのは、城壁の見張り人か、羊飼いくらいである。
- ②人は、昼の間に働き、夜は休む。

(2) イエスにとっては、昼の間とは、公生涯の期間である。

- ①イエスは、十字架の時が迫っていることを知っておられた。
- ②夜とは、十字架の死を意味する。

③時が与えられている間に、自分を遣わして下さった父なる神のわざを行う。

III. 癒しの業(6~7節)

1. 6節

「イエスは、こう言ってから、地面につばきをして、そのつばきで泥を作られた。そしてその泥を盲人の目に塗って言われた」(6節)

(1) イエスは、つばきで泥を作られた。

①アダムは、地のちりから造られた。同じ物質である。

②癒しの方法としてではなく、この盲人の信仰を育てるためであろう。

(2) この方法は、パリサイ人たちとの論争を喚起するためのものである。

①安息日に行われた癒しである。

②口伝律法では、安息日に行ってはならない癒しの方法が例示されている。

*目にぶどう酒を塗る。

*目に、つばきで作った泥を塗る。

2. 7節

「『行って、シロアム(訳して言えば、遣わされた者)の池で洗いなさい。』」そこで、彼は行って、洗った。すると、見えるようになって、帰って行った」(7節)

(1) シロアムの池は、エルサレムの南端にある池である。

①言葉遊びがある。ヘブル語で「シロアハ」は「遣わされた」の意味である。

②イエスは、父なる神から遣わされて、御業を行っている。

③イエスは盲人をシロアムの池に遣わし、癒しを行う。

(2) この池は、仮庵の祭りの期間、エルサレムで最もにぎやかな場所となる。

①この癒しは、群衆が注目する中で行われた。

②盲人は、イエスの命令通りに行い、癒された。

③もしイエスがメシアなら、どうして安息日に癒すのかという反発が起こる。

IV. 癒しの結果(8~12節)

1. 8~9節

「近所の人たちや、前に彼が物ごいをしていたのを見ていた人たちが言った。『これはすわって物ごいをしていた人ではないか。』ほかの人は、『これはその人だ』と言い、またほかの

人は、『そうではない。ただその人に似ているだけだ』と言った。当人は、『私がその人です』と言った」

- (1) 人違いではないかという議論が起こった。
 - ①盲人の様相が、激変したことがうかがわれる。

- (2) 当人は、自分がそれだと言い張った。

2. 10～11節

「そこで、彼らは言った。『それでは、あなたの目はどのようにしてあいたのですか。』彼は答えた。『イエスという方が、泥を作って、私の目に塗り、「シロアムの池に行って洗いなさい」と私に言われました。それで、行って洗うと、見えるようになりました』(10～11節)

(1) もしそれが当人なら、当然の疑問は、どうして目があいたのかということである。

- (2) 彼は、事実をありのままに述べている。
 - ①イエスという方
 - ②彼は盲人だったので、一度もイエスを見たことがない。

3. 12節

「また彼らは彼に言った。『その人はどこにいるのですか。』彼は『私は知りません』と言った」(12節)

- (1) 見たことがないので、その人がどこにいるのか、知らない。
 - ①肉体的な目は開かれた。
 - ②霊的な目は閉ざされたままである。

結論：

1. 絶望的なケース

- (1) 「神の栄光が現れるためである」
 - ①生まれつき盲人であることが、神の栄光の現れだということではない。
 - ②神は盲人を癒すことができるということが、証明された。
 - ③すべての状況は、神の管理下に置かれている。

- (2) ヨハ5:5～6

「そこに、三十八年もの間、病気にかかっている人がいた。イエスは彼が伏せっているのを見、それがもう長い間のことなのを知って、彼に言われた。『よくなりたいか』(ヨハ5:

5~6)

- ①ベテスダの池の周りには、多くの病人が伏せっていた。
- ②イエスは、絶望的なケースを選ばれた。
- ③この時も、安息日の癒しである。
- ④神は悪の作者ではないが、悪を用いてでも栄光を現される。

(3) 試練に会ったとき、神には第3の答えがあることを思い出せ。

2. シロアムの池

(1) 地理的状况

- ①ヒゼキヤ王がアッシリヤ軍の攻撃に備えて、全長533mのトンネルを掘った。
- ②ギホンの泉からシロアムの池まで水を導いた。
- ③仮庵の祭りの間、大いに賑わっていた。

(2) 聖句

「この民は、ゆるやかに流れるシロアハの水をないがしろにして、レツインとレマルヤの子を喜んでいる。それゆえ、見よ、主は、あの強く水かさの多いユーフラテス川の水、アッシリヤの王と、そのすべての栄光を、彼らの上にあふれさせる。それはすべての運河にあふれ、すべての堤を越え、ユダに流れ込み、押し流して進み、首にまで達する。インマヌエル。その広げた翼はあなたの国の幅いっぱい広がる」(イザ8:6~8)

- ①北王国イスラエルは、アッシリヤに対抗するために、アラムに頼った。
- ②【主】は、ゆるやかに流れるシロアハの水である。
- ③アッシリヤは、洪水のように北王国を滅ぼす。
- ④エルサレムは、首まで水に浸かるような経験をする。

(3) 主イエスのご人格を思い出せ。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです」(マタ11:28~30)

「生まれつきの盲人の癒し(2)」

ヨハ9:13~41

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①十字架にかかる前の年の仮庵の祭り(半年前)
- ②イエスは神殿を去ったが、まだエルサレムにとどまっている。
- ③生まれつきの盲人の癒しは、ヨハネの福音書の7つの奇跡の第6番目である。
- ④イエスは何人もの盲人の目を開かれたが、この箇所での癒しは、特別である。
*イエスのメシア性を示すメシア的奇跡である。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「イエスは生まれつきの盲人を癒す」(§100)

ヨハ9:1~41

(3) 前回の復習

- ①イエスは、絶望的なケースを選び、癒しを行われた。
- ②その日は安息日であった。
- ③癒しの方法(つばきで泥を作り目に塗る)も口伝律法が禁じるものであった。

2. アウトライン

- (1) 肉体的癒し(1~12節)
- (2) 最初の尋問(13~17節)
- (3) 両親の尋問(18~22節)
- (4) 第2の尋問(23~34節)
- (5) 霊的癒し(35~41節)

*今回は(2)~(5)を取り上げる。

3. 結論:

- (1) 4つのメシア的奇跡
- (2) 「知っている」という言葉
- (3) 会堂からの追放

イエスは、世の光である。

II. 最初の尋問(13~17節)

1. 13~14節

「彼らは、前に盲目であったその人を、パリサイ人たちのところに連れて行った。ところで、イエスが泥を作って彼の目をあけられたのは、安息日であった」(13~14節)

(1) 群衆は、目が開いた人をパリサイ人たちのところに連れて行った。

①群衆は、これをよい知らせと受け取り、指導者たちの裁定を仰ぐために動いた。

(2) この癒しは、安息日に行われた。

①パリサイ人たちは、命の危険がないかぎり、安息日に癒しを行うのは律法違反だと考えていた。

②しかし神は、安息日に恵みの業を行うことを禁止してはおられなかった。

2. 15~16節

「こういうわけでもう一度、パリサイ人も彼に、どのようにして見えるようになったかを尋ねた。彼は言った。『あの方が私の目に泥を塗ってくださって、私が洗いました。私はいま見えるのです。』すると、パリサイ人の中のある人々が、『その人は神から出たのではない。安息日を守らないからだ』と言った。しかし、ほかの者は言った。『罪人である者に、どうしてこのようなしるしを行うことができよう。』そして、彼らの間に、分裂が起こった」(15~16節)

(1) この男の単純な証し

①あの方が目に泥を塗ってくれた。

②私が洗った。

③そしたら、見えるようになった。

④神の責務と人間の責務が表現されている。

(2) イエスとは言わず、あの方と言っている。

①イエスはエルサレムでは有名になっていた。

(3) パリサイ人たちの間に、意見の対立が起こった。

①安息日を守らない者は、神から出た者ではない。

②罪人である者に、このようなしるしを行うことはできない。

③パリサイ人の中のある者たちは、光を見出し始めている。

3. 17節

「そこで彼らはもう一度、盲人に言った。『あの方が目をあけてくれたことで、あの人を

何だと思っているのか。』彼は言った。『あの方は預言者です』(17節)

- (1) 再度、この男に質問する。
 - ①自分たちの間で分裂が起こっているから。
- (2) この男の信仰が成長している。
 - ①まだイエスを神とは信じていない。
 - ②しかし、預言者と認めている。
 - ・旧約聖書の預言者たちは、神から送られて奇跡を行った。

Ⅲ. 両親の尋問(18～22節)

1. 18～19節

「しかしユダヤ人たちは、目が見えるようになったこの人について、彼が盲目であったが見えるようになったということに信ぜず、ついにその両親を呼び出して、尋ねて言った。『この人はあなたがたの息子で、生まれつき盲目だったとあなたがたが言っている人ですか。それでは、どうしていま見えるのですか』(18～19節)

- (1) パリサイ人たちは、癒しが起こったことを信じたくなかった。
 - ①何かの手違いがあったのではないか。
 - ②両親なら、一番よく知っているはずだ。
 - ③本人なのかどうか、また、どのようにして癒されたのか。

2. 20～21節

「そこで両親は答えた。『私たちは、これが私たちの息子で、生まれつき盲目だったことを知っています。しかし、どのようにしていま見えるのかは知りません。また、だれがあれの目をあけたのか知りません。あれに聞いてください。あれはもうおとなです。自分のことは自分で話すでしょう』(20～21節)

- (1) 両親は、責任を回避した。
 - ①この男は、彼らの息子である。
 - ②彼が、生まれつき盲目だったことは知っている。
 - ③それ以上のことは、分からない。
 - ④証言能力のある年齢なので、本人に聞いてほしい。

3. 22節

「彼の両親がこう言ったのは、ユダヤ人たちを恐れたからであった。すでにユダヤ人たちは、イエスをキリストであると告白する者があれば、その者を会堂から追放すると決めていた

からである」(22節)

- (1) ユダヤ人たち(霊的指導者たち)は、イエスのメシア性を拒否していた。
 - ①もしイエスをメシアだと告白するなら、会堂から追放すると決めていた。
 - ②会堂から追放されると、経済的、社会的、宗教的基盤を失う。

- (2) 会堂が行う懲戒の3つのレベル
 - ①Neziphah : 7日間の追放
 - ②Niddui : 30日間の追放
 - ③Cherem : 完全な追放と社会的な交流の断絶。これが追放の段階である。

IV. 第2の尋問(23~34節)

1. 23~25節

「そのために彼の両親は、『あれはもうおとなです。あれに聞いてください』と言ったのである。そこで彼らは、盲目であった人をもう一度呼び出して言った。『神に栄光を帰しなさい。私たちはあの人が罪人であることを知っているのだ。』彼は答えた。『あの方が罪人かどうか、私は知りません。ただ一つのことだけ知っています。私は盲目であったのに、今は見えるという事です』(23~25節)

- (1) 「神に栄光を帰しなさい」の意味。2つの可能性がある。
 - ①誓いを求めている。自分が嘘をついていたと認めよ。
 - ②癒しのゆえに、神をたたえよ。イエスに栄光を帰すな。

- (2) 彼は、知らないことと、知っていることを、区別して証しをした。
 - ①イエスが罪人かどうか、知らない。
 - ②しかし、盲目であったのに、今は見えるということは知っている。

2. 26~27節

「そこで彼らは言った。『あの方はおまえに何をしたのか。どのようにしてその目をあけたのか。』彼は答えた。『もうお話ししたのですが、あなたがたは聞いてくれませんでした。なぜもう一度聞こうとするのです。あなたがたも、あの方の弟子になりたいのですか』(26~27節)

- (1) 同じ質問を受けて、この男は苛つき始めた。
- (2) 彼の回答は、皮肉である。
 - ①話したが、聞いてもらえなかった。
 - ②なぜもう一度聞こうとするのか。
 - ③イエスの弟子になりたいのか。

(3) パリサイ人にとっては、これ以上の侮辱はない。

- ①無学な物乞いが、学のある自分たちに、意見している。
- ②しかも、自分たちが最も忌み嫌っている内容を示唆している。

3. 28～29節

「彼らは彼をののしって言った。『おまえもあの者の弟子だ。しかし私たちはモーセの弟子だ。私たちは、神がモーセにお話しになったことは知っている。しかし、あの者については、どこから来たのか知らないのだ』(28～29節)

(1) この男の証言を崩せないで、証言している本人を攻撃する。

- ①お前はイエスの弟子だ。
- ②これは、最悪の罪である。
- ③自分たちは、モーセの弟子だ。
- ④これは、最高のことである。

(2) 神がモーセに語ったことは知っている。

- ①しかし、イエスがどこから来たかは知らない。
- ②もしモーセの教えを知っているなら、イエスをメシアと信じたはずである。
- ③モーセよりも偉大な方が彼らの前に現れたのに、その方を信じない。

4. 30～33節

「彼は答えて言った。『これは、驚きました。あなたがたは、あの方がどこから来られたのか、ご存じないと言う。しかし、あの方は私の目をおあけになったのです。神は、罪人の言うことはお聞きになりません。しかし、だれでも神を敬い、そのみこころを行うなら、神はその人の言うことを聞いてくださると、私たちは知っています。盲目に生まれついた者の目をあけた者があるなどとは、昔から聞いたこともありません。もしあの方が神から出ておられるのでなかったら、何もできないはずですよ』(30～33節)

(1) 皮肉から攻撃への転換

- ①パリサイ人たちは、予想もしなかったであろう。
- ②この男は、自立して考え始めている。

(2) この男が述べた理屈

- ①パリサイ人たちは、霊的指導者たちである。
- ②なのに、盲人の目を開けた方がどこから来たかを知らないという。
- ③恥を知れ。

- ④神は、罪人の言うことをお聴きにならない(ユダヤ教の教えの中心)。
- ⑤あの方が生まれつきの盲人の目をあけたのは、神から出ているからだ。

5. 34節

「彼らは答えて言った。『おまえは全く罪の中に生まれていながら、私たちに教えるのか。』
そして、彼を外に追い出した」

- (1) 再び、この男を虐待した。
 - ①盲目に生まれついたことと、特定の罪を結びつけた。
 - ②そのように教えてはならないことを、ヨブ記は語っている。
 - ③この男に教える資格はあるのか。ある。彼は体験したのである。
- (2) 「彼を外に追い出した」
 - ①神殿の外ではない。
 - ②会堂から追い出したという意味である。
 - ③これは、Cheremの段階である。
 - ④この男は、あらゆる意味で、生活の基盤を失った。

V. 霊的癒し(35～41節)

1. 35～36節

「イエスは、彼らが彼を追放したことを聞き、彼を見つけ出して言われた。『あなたは人の子を信じますか。』その人は答えた。『主よ。その方はどなたでしょうか。私がお方を信じることが出来ますように。』(35～36節)

- (1) イエスが彼を見つけ出した。
 - ①「あなたは人の子を信じますか」と尋ねた。
- (2) 彼はまだイエスが誰かを知らない。
 - ①彼の霊の目はまだ開いていない。

2. 37～38節

「イエスは彼に言われた。『あなたはその方を見たのです。あなたと話しているのがそれです。』彼は言った。『主よ。私は信じます。』そして彼はイエスを拝した(37～38節)

- (1) イエスは彼に、必要な情報を与えた。
 - ①あなたと話している私が、メシアである。

(2) 彼は、信仰によって応答した。

- ①ユダヤ人は、人を礼拝しない。
- ②イエスが癒し主だという理由では、礼拝しない。
- ③イエスが神の子であると信じたので、礼拝している。
- ④彼は、肉の目も霊の目も開かれた。

3. 39節

「そこで、イエスは言われた。『わたしはさばきのためにこの世に来ました。それは、目の見えない者が見えるようになり、見える者が盲目となるためです』(39節)

(1) 福音の効果

- ①目が見えないと認める人は、目が見えるようになる。
- ②目が見えると思っている人は、盲目のままにとどまる。

4. 40～41節

「パリサイ人の中でイエスとともにいた人々が、このことを聞いて、イエスに言った。『私達も盲目なのですか。』イエスは彼らに言われた。『もしあなたがたが盲目であったなら、あなたがたに罪はなかったでしょう。しかし、あなたがたは今、『私達目は見える』と言っています。あなたがたの罪は残るのです』(40～41節)

(1) パリサイ人たちの傲慢な質問

- ①これは、否定的な回答を要求する質問である。

(2) イエスの回答

- ①自分が盲目だと認めていたなら、罪の程度は軽かっただろう。
- ②しかし、目が見えると言っているので、重い罪がそのまま残る。

結論：

1. 4つのメシア的奇跡

(1) ツァラアト患者の癒し

- ①サンヘドリンによる厳しい尋問が始まった。

(2) 口のきけない悪霊の追い出し

- ①イエスはベルゼブルにつかれていると批判した。

(3) 生まれつきの盲人の癒し

①イエスを信じる者は、会堂から追放されるという決定がなされた。

(4) ヨナのしるし(ラザロの復活)

①サンヘドリンは、イエスを殺す決定を下した。

2. 「知っている」という言葉

(1) 登場人物たちが、「知っている」、「知らない」を繰り返している。

(2) パリサイ人たちは、自分たちはモーセとモーセの律法を知っていると主張した。

①結果的には、彼らは何も知らないことが明らかになった。

(3) 盲人の場合はどうか。

①彼は、律法に関しては無知であった。

②また、イエスが誰かについても無知であった。

③ただし、彼には、自分の目がイエスによって開かれたという知識があった。

④彼は、神を体験したのである。

⑤パリサイ人たちは、彼のその体験を論駁できなかった。

3. 会堂からの追放

(1) 歴史的経緯

①紀元70年までは、長老たちが共同体の中で裁き司の役割を担っていた。

②紀元70年以降、パリサイ人たちがその役割を担った。

③ヨハネの福音書は、紀元90年代に書かれた。

④ヨハネの福音書の読者の多くは、シナゴグからの追放を経験していた。

(2) 不信仰な世が私たちを追い出しても、イエスが私たちを受け入れてくださる。

①シナゴグの礼拝を失ったが、イエスを礼拝する特権を得た。

②ヨハネの福音書の読者たちには、大きな慰めになった。

(3) この話は、神を信じることに躊躇を覚える人にも、励ましとなる。

「良い牧者のたとえ(1)」

ヨハ10:1~10

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①十字架にかかる前の年の仮庵の祭り(半年前)
- ②イエスは神殿を去ったが、まだエルサレムにとどまっている。
- ③生まれつきの盲人の癒しが行われた。
- ④きょうの箇所は、その続きである。

*ヨハ9:41とヨハ10:1の間に区切りを設けるべきではない。

- ⑤パリサイ人たちへの厳しい言葉が出て来る。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「良い牧者のたとえ」(§101)

ヨハ10:1~21

(3) 良い牧者のたとえについて

①中東では、指導者を羊飼(牧者)、民を羊にたとえるのは、普通のことである。

- ②王や祭司は、自分を羊飼、民を羊と呼んだ。
- ③聖書でも、「牧者と羊」の比喩は頻繁に出て来る。
- ④羊飼いが職業であった人々

・アブラハム、イサク、ヤコブ、モーセ、ダビデ

⑤有名な聖書箇所

・詩23篇、イザ53章、ルカ15章(いなくなった羊のたとえ)

⑥イエスは、以上のような伝統の上に立って、霊的真理を教えた。

- ・たとえ話だという理由で、語られている真理を軽視してはならない。
- ・たとえ話は、信仰のない者から真理を隠すという効果がある。

2. アウトライン

- (1) 羊飼いと盗人(強盗)の対比(1~6節)
- (2) 羊の門と盗人(強盗)の対比(7~10節)
- (3) 良い牧者と雇い人の対比(11~18節)
- (4) 信じる者と信じない者の対比(19~21節)

*今回は、(1)と(2)を取り上げる。

3. 結論：

- (1) 比喩的言葉について
- (2) 羊と羊飼いの関係について
- (3) 豊かないのちについて

イエスは、良い牧者である。

I. 羊飼いと盗人(強盗)の対比(1~6節)

1. 1節

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。羊の囲いに門から入らないで、ほかの所を乗り越えて来る者は、盗人で強盗です」(1節)

(1) 牧場の朝の情景

- ①「羊の囲い」とは、冬の夜に、羊を集めておく場所である。
- ②通常は、石垣で囲まれている。イバラやアザミが生えている。
- ③仮庵の祭りの時期は、冬に近づいている。
- ④門番がいて、夜間の番をしている。
 - *獅子、ひょう、狼、熊、ジャッカル、などの野獣がいた。
- ⑤ひとつの囲いの中で、いくつもの羊の群れが休んでいる。
- ⑥朝になると、羊飼いは門から入り、自分の群れを連れ出す。

(2) 「まことに、まことに、あなたがたに告げます」

- ①重要な真理を教える際の、常套句である。
- ②文脈は、生まれつきの盲人の癒しである。
- ③聴衆は、その癒しを目撃したパリサイ人たちと群衆である。

(3) 「盗人と強盗」

- ①ユダヤ教の律法では、盗人と強盗は区別される。
 - *盗人は家に押し入る。
 - *強盗は荒野に潜んでいて、旅人を襲う。
 - *羊飼いは、野獣だけでなく、人間の害にも注意を払う必要があった。
- ②イスカリオテのユダは盗人である(ヨハ12:6)。
- ③バラバは強盗である(ヨハ18:40)。
- ④イエスとともに十字架に付けられた2人も強盗である(マタ27:38、44)。

(4) 「羊の囲いに門から入らないで、ほかの所を乗り越えて来る者」

① 「claim jumper」というレストランチェーンがある。

*他人の権利を侵害する者という意味

② これは、パリサイ人たちのことである。

*彼らは、盗人で強盗である。

*羊の囲い(ユダヤ人国家)に力づくで侵入し、他人の財産を奪っていく。

2. 2節

「しかし、門から入る者は、その羊の牧者です」(2節)

(1) これは、イエスのことである。

① イエスは門から入る。

(2) イエスとパリサイ人たちの対比

① イエスは、旧約聖書の預言の成就として来られた。

② パリサイ人たちは、口伝律法を作り、羊飼いであるかのように振る舞った。

*彼らは、モーセの律法を知っていると言いながら、イエスを信じなかった。

*また、イエスを信じた人を会堂から追放した。

3. 3～4節

「門番は彼のために開き、羊はその声を聞き分けます。彼は自分の羊をその名で呼んで連れ出します。彼は、自分の羊をみな引き出すと、その先頭に立って行きます。すると羊は、彼の声を知っているので、彼について行きます」(3～4節)

(1) 門番とは誰か。3つの可能性。

① 旧約聖書の預言者たち

② バプテスマのヨハネ

③ 聖霊

*聖霊は、私たちの心の扉を開いてくださる方である。

(2) 羊は、その声を聞き分ける。

① 癒された盲人は、パリサイ人たちの声ではなく、イエスの声に従った。

② パリサイ人たちは、彼を会堂から追放した。

③ イエスは、彼を囲い(パリサイ的ユダヤ教)から導き出した。

(3) 羊飼いは、自分の羊の名を呼ぶ。

① 複数の群れが同じ囲いの中にいる。

(4) 羊飼いは、羊の先頭に立って行く。

①羊は、彼について行く。

②真の牧者は、羊を追い立てない。

③先頭に立って、教え、行動、人格によって羊の群れを導く。

4. 5節

「しかし、ほかの人には決してついて行きません。かえって、その人から逃げ出します。その人たちの声を知らないからです」(5節)

(1) ほかの人

①盗人と強盗

②別の群れの羊飼

③ここでは、パリサイ人たちのこと。

(2) 2重の拒否

①決してついて行かない。

②逃げ出す。

③牧会者のゴールは、これである。

*みことばを教えることで、羊が真の牧者の声を聞き分けるようにする。

④ヨハネの福音書の読者は、この羊と自分を重ね合わせたことであろう。

*彼らの多くが、会堂から追放されていた。

*それは悲劇ではなく、「ほかの人」から逃げ出したことなのである。

5. 6節

「イエスはこのたとえを彼らにお話しになったが、彼らは、イエスの話されたことが何のことかよくわからなかった」(6節)

(1) イエスは、このたとえ話をパリサイ人たちに話した。

①彼らは、理解しなかった。

②羊飼いを軽蔑していたので、自分のこととは思わなかった。

③イエスの羊ではないので、その声を聞き分けることができない。

II. 羊の門と盗人(強盗)の対比(7~10節)

1. 7~9節

「そこで、イエスはまた言われた。『まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたし

は羊の門です。わたしの前に来た者はみな、盗人で強盗です。羊は彼らの言うことを聞かなかったのです。わたしは門です。だれでも、わたしを通過して入るなら、救われます。また安らかに出入りし、牧草を見つけます』(7~9節)

(1) 新しい比喩が用いられる。「まことに、まことに、…」

①ここで語られている門には、2種類ある。

* 囲いの門 (1~2節)

* 羊の門 (7節)

(2) 羊飼いに導かれた羊の群れは、牧草のある場所に来る。

①そこに、羊の囲い地がある。

②羊は、羊の門を使ってその囲い地に入出入りする。

③外に出れば水と牧草があり、内に入れば安全がある。

(3) イエスだけが、神の国に入るための門である。

①イエスよりも前に来た霊的指導者たちは、盗人で強盗である。

②この方以外に、救いはない。

2. 10節

「盗人が来るのは、ただ盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけのためです。わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです」(10節)

(1) 盗人の動機は、羊を搾取することである。

①自分の利益のために、羊を殺すことさえする。

(2) イエスは、奪うためではなく、与えるために来られた。

①羊は命を得る。

②その命を豊かに持つ。

結論

1. 比喩的言葉について

(1) 字義通りの解釈とは、比喩は比喩として読むということである。

①イエスは、文字通りの門ではない。

②イエスの役割と、門の役割に、相関関係があるということである。

(2) マコ 14:22 の解釈

「それから、みなが食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福して後、これを裂き、彼らに与えて言われた。『取りなさい。これはわたしのからだです』(マコ14:22)

- ①パン=イエスのからだ、ではない。
- ②これは、比喩的言葉である。

2. 羊と羊飼いの関係について

(1) これもまた、比喩的言葉である。

①羊と羊飼いの関係は、私たちと主イエスの関係に似ている。

(2) 羊飼いは、自分の羊に名を付けている。今もその習慣がある。

①羊飼いは名を呼んで、自分の羊をみな引き出す。

②一頭も残されることはない。

③聖書の例

*出33:17

「【主】はモーセに仰せられた。『あなたの言ったそのことも、わたしはしよう。あなたはわたしの心にかない、あなたを名ざして選び出したのだから』

*イザ43:1

「だが、今、ヤコブよ。あなたを造り出した方、【主】はこう仰せられる。イスラエルよ。あなたを形造った方、【主】はこう仰せられる。『恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの』

*ルカ19:5

「イエスは、ちょうどそこに来られて、上を見上げて彼に言われた。『ザアカイ。急いで降りて来なさい。きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから』

*使10:5

「さあ今、ヨッパに人をやって、シモンという人を招きなさい。彼の名はペテロとも呼ばれています」

3. 豊かないのちについて

「盗人が来るのは、ただ盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけのためです。わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです」(ヨハ10:10)

(1) 福音の三要素を受け入れ、イエスをそのような方と信じる。

(2) その瞬間から、新しいいのちが始まる。

①現在形の動詞。継続した動作を示す。

(3) 新しいいのちには、種々の段階がある。

①豊かに持つ段階へと進む。これも現在形の動詞。

②羊は、門を通過して出入りする。

*神の臨在の中に入り、神を礼拝する。

*礼拝した後、この世に出て行く。

③みことばは牧草である。

④聖霊の支配に服すれば服するほど、いのちは豊かになる。

「良い牧者のたとえ(2)」

ヨハ10:11~21

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①十字架にかかる前の年の仮庵の祭り(半年前)
- ②イエスは神殿を去ったが、まだエルサレムにとどまっている。
- ③生まれつきの盲人の癒しが行われた。
- ④きょうの箇所は、その続きである。

*ヨハ9:41とヨハ10:1の間に区切りを設けるべきではない。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「良い牧者のたとえ」(§101)

ヨハ10:1~21

(3) 良い牧者のたとえについて

- ①中東では、指導者を羊飼、民を羊にたとえるのは、ごく普通のことである。
- ②聖書でも、このたとえは頻繁に出て来る。
- ③イエスは、以上のような伝統の上に立って、霊的真理を教えた。
- ④たとえ話だという理由で、そこで語られている真理を軽視してはならない。

2. アウトライン

- (1) 羊飼いと盗人(強盗)の対比(1~6節)
- (2) 羊の門と盗人(強盗)の対比(7~10節)
- (3) 良い牧者と雇い人の対比(11~18節)
- (4) 信じる者と信じない者の対比(19~21節)

*今回は、(3)と(4)を取り上げる。

3. 結論:

- (1) イエスの本質
- (2) 羊飼いと羊の関係
- (3) 現代の羊飼

イエスは、良き羊飼である。

Ⅲ. 良い牧者と雇い人の対比(11～18節)

1. 11節

「わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます」

(1) 良い牧者の特徴

- ①獅子、ひょう、狼、熊、ジャッカル、などの野獣がいた。
- ②良い牧者は、羊を守るために、命がけで戦う。
- ③彼は、羊の所有者である。

(2) 良い牧者の実例

①ヤコブ(創31:38～40)

「私はこの二十年間、あなたといっしょにいましたが、あなたの雌羊も雌やぎも流産したことはなく、あなたの群れの雄羊も私は食べたことはありませんでした。野獣に裂かれたものは、あなたのもとへ持って行かないで、私が罪を負いました。あなたは私に責任を負わせました。昼盗まれたものにも、夜盗まれたものにも。私は昼は暑さに、夜は寒さに悩まされて、眠ることもできない有様でした」

②ダビデ(1サム17:34～36)

「ダビデはサウルに言った。『しもべは、父のために羊の群れを飼っています。獅子や、熊が来て、群れの羊を取って行くと、私はそのあとを追って出て、それを殺し、その口から羊を救い出します。それが私に襲いかかるときは、そのひげをつかんで打ち殺しています。このしもべは、獅子でも、熊でも打ち殺しました。あの割礼を受けていないペリシテ人も、これらの獣の一匹のようになるでしょう。生ける神の陣をなぶったのですから』

③イエスは、この系譜に属する良い牧者である。

2. 12～13節

「牧者でなく、また、羊の所有者でない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして、逃げて行きます。それで、狼は羊を奪い、また散らすのです。それは、彼が雇い人であって、羊のことを心にかけていないからです」

(1) 雇い人の特徴

- ①賃金のために働いているので、羊がどうなっても気にしない。
- ②自分の身の安全が第一なので、危険が迫ると逃げて行く。
- ③その結果、羊は奪われ、群れは散らされる。

(2) 雇い人の実例

- ①利己的な王たち、利己的な祭司たち、偽預言者たち。
- ②神の羊の群れは、常に雇い人の牧者によって苦しめられてきた。

③エレ10:21~22

「牧者たちは愚かで、【主】を求めなかった。それで彼らは榮えず、彼らの飼うものはみな散らされる。聞け、うわさを。見よ。大いなる騒ぎが北の地からやって来る。ユダの町々を荒れ果てた地とし、ジャッカルに住みかとするために」

④エレ12:10~11

「多くの牧者が、私のぶどう畑を荒らし、私の地所を踏みつけ、私の慕う地所を、恐怖の荒野にした。それは恐怖と化し、荒れ果てて、私に向かって嘆いている。全地は荒らされてしまった。だれも心に留める者がいないのだ」

⑤ゼカ11:4~17

(3) パリサイ人たちは、この系譜に属する雇い人たちである。

- ①彼らの教えを、軽く考えてはならない。
- ②パリサイ的ユダヤ教は、民衆を滅びに導く教えである。
- ③彼らは、民衆から受けるお礼を期待して教えていた。

2. 14~15節

「わたしは良い牧者です。わたしはわたしのものを知っています。また、わたしのものは、わたしを知っています。それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同様です。また、わたしは羊のためにわたしのいのちを捨てます」

(1) 良い牧者は、自分の羊を知っている。

- ①自分の所有物である。
- ②注意深く見守っている。

(例話) 花壇を割り当てた中学校の校長

(2) 羊は、所有者を知っている。

- ①相互関係のある知識である。
- ②緊密な関係を示している。

(3) その関係は、御父と御子の関係にたとえられる。

- ①完ぺきな調和と一致がある。

(4) 良い牧者は、羊のためにいのちを捨てる。

- ①これは、十字架の死の預言である。

3. 16節

Joh 10:16 わたしにはまた、この囲いに属さないほかの羊があります。わたしはそれをも導かなければなりません。彼らはわたしの声に聞き従い、一つの群れ、ひとりの牧者となるのです。

(1) 「この囲いに属さないほかの羊」とは、将来救われる異邦人信者である。

- ① イエスの死は、異邦人を父なる神のもとに連れて行くようになる。
- ② イエスは、聖書のことばを通して、異邦人にも語り続ける。

(2) 「一つの群れ、ひとりの牧者とある」とは、教会のことである。

- ① 教会は、ユダヤ人信者と異邦人信者からなる「新しいひとりの人」である。
- ② 教会の頭は、イエス・キリストである。
- ③ エペ2:11~22
- ④ エペ3:6

「その奥義とは、福音により、キリスト・イエスにあつて、異邦人もまた共同の相続者となり、ともに一つのからだに連なり、ともに約束にあずかる者となるということです」

4. 17~18節

「わたしが自分のいのちを再び得るために自分のいのちを捨てるからこそ、父はわたしを愛して下さいます。だれも、わたしからいのちを取った者はいません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、それをもう一度得る権威があります。わたしはこの命令をわたしの父から受けたのです」

(1) 再び、自らの死を預言する。

- ① ここでは、自発的死であることが語られる。
(例話) イスカリオテのユダがいなくても、イエスは十字架の死を遂げた。

(2) 父なる神は、御子を特別な愛で愛しておられる。

- ① 御子が命の犠牲を払って御心に従うからである。

(3) イエスの権威

- ① いのちを捨てる権威 (運命を支配する権威)
* 死の時をイエスは決める。
- ② もう一度それを得る権威 (死に勝利する権威)
* イエスの復活の預言
- ③ この命令は、父から来たものである。

IV. 信じる者と信じない者の対比(19~21節)

1. 19節

「このみことばを聞いて、ユダヤ人たちの間にまた分裂が起こった」

(1) これは3度目の分裂である。

①ヨハ7:43(祭りの終わりの大いなる日になされた宣言)

②ヨハ9:16(生まれつきの盲人の癒し)

(2) イエスが来られると、世界に、社会に、家庭に、個人の心に分裂が起こる。

①分裂が起こらないなら、聖書的メッセージとは言えない。

②ヨハネの福音書の読者は、そのことを体験していた。

2. 20節

「彼らのうちの多くの者が言った、『あれは悪霊につかれて気が狂っている。どうしてあなたがたは、あの人の言うことに耳を貸すのか』」

(1) 指導者たちの判断が、民衆レベルに浸透した。

①まったく罪のない、愛に溢れたお方を信じないことに、心の闇を見る。

3. 21節

「ほかの者は言った、『これは悪霊につかれた人のことばではない。悪霊がどうして盲人の目をあけることができようか』」

(1) 信じる人たちも現れた。

結論:

1. イエスの本質

(1) 「わたしは〇〇である」が7つ出て来る。

(2) 第3の宣言「わたしは羊の門です」(10:7)

(3) 第4の宣言「わたしは、良い牧者です」(10:11)

(4) イエスが自らの死と復活を預言できるのは、イエスが神であるから。

2. 羊飼いと羊の関係

(1) 父なる神と子なる神の関係に似ているというのだ。

(2) これは、驚くべき宣言である。

(3) この関係の土台にあるのは、神との契約関係である。

(4) エレ31:33~34

「彼らの時代の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうだ。——【主】の御

告げ——わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。そのようにして、人々はもはや、『【主】を知れ』と言って、おのおの互いに教えない。それは、彼らがみな、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るからだ。——【主】の御告げ——わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思ひ出さないからだ」

3. 現代の牧者

- (1) 牧者(羊飼)は、「ポイメイン」である。
- (2) 主イエスは、大牧者である(ヘブ13:20)。
- (3) 牧師(エペ4:11)もまた、「ポイメイン」である。
- (4) 1ペテ5:1~4

「そこで、私は、あなたがたのうちの長老たちに、同じく長老のひとり、キリストの苦難の証人、また、やがて現れる栄光にあずかる者として、お勧めします。あなたがたのうちにいる、神の羊の群れを、牧しなさい。強制されてするのではなく、神に従って、自分から進んでそれをなし、卑しい利得を求める心からではなく、心を込めてそれをしなさい。あなたがたは、その割り当てられている人たちを支配するのではなく、むしろ群れの模範となりなさい。そうすれば、大牧者が現れるときに、あなたがたは、しばむことのない栄光の冠を受けるのです」

①現代のキリスト教界には、残念ながら、雇い人の牧師がいる。

②正しい自己認識を持つ。

- *羊は自分の所有物ではない。
- *神の群れを牧することを、主イエスから委ねられている。
- *強制されてではなく、自発的に行う。
- *支配ではなく、模範となるように努力する。
- *追い立てるのではなく、先頭を歩む。
- *主イエスが模範である。

- (5) 1ペテ5:5~6

「同じように、若い人たちよ。長老たちに従いなさい。みな互いに謙遜を身に着けなさい。神は高ぶる者に敵対し、へりくだる者に恵みを与えられるからです。ですから、あなたがたは、神の力強い御手の下にへりくだりなさい。神が、ちょうど良い時に、あなたがたを高くしてくださるためです」

①神が立てた権威への従順が勧められている。

②謙遜な者は、高く上げられる。

「70人の派遣」

ルカ 10 : 1～24

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①この箇所の内容は、ルカだけが記録している。
- ②恐らくユダヤでの出来事であろう。
- ③イエスが行われた多くの業のほんの一例である。
- ④人数について、70人という写本と、72人という写本がある。
 - *原典から写本を作る際に、どちらかが間違った。
 - *ともに信頼性の高い写本なので、どちらが正しいか断定できない。
 - *ここでは、新改訳の「70人」を採用する。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「70人の奉仕とキリストの喜び」 (§ 102)

ルカ 10 : 1～24

2. アウトライン

- (1) 70人の派遣 (1～12節)
- (2) 不信仰な町の叱責 (13～16節)
- (3) 70人の帰還 (17～20節)
- (4) イエスの喜び (21～24節)

3. 結論：

- (1) 12人と70人
- (2) クリスチャンの喜び
- (3) イエスの喜び

70人の奉仕から、霊的教訓を学ぶ。

I. 70人の派遣 (1～12節)

1. 1節

「その後、主は、別に七十人を定め、ご自分が行くつもりすべての町や村へ、ふたりずつ先にお遣わしになった」(1節)

- (1) 12使徒を派遣した記事に似ている(マタ10章、ルカ9章)が、違いがある。
 - ①12使徒はガリラヤで伝道した。

②70人は、イエスがエルサレムに上る旅の途中で伝道した。

③70人の伝道は、一時的なものであった。

(2) 70人の特徴

①イエスの後を、多数の弟子たちが付き従っていた。

②イエスは、その中から70人を選ばれた。

*彼らは、無名の弟子たちである。

③彼らは、主イエスの先駆者としての働きを展開した。

*その点では、ミニ・バプテスマのヨハネと言える。

④「ふたりずつ」とあるのは、証しのためであり、実際的な目的のためでもある。

*最低、35の町々をカバーできる。

2. 2～4節

「そして、彼らに言われた。『実りは多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主に、収穫のために働き手を送ってくださるよう祈りなさい。さあ、行きなさい。いいですか。わたしがあなたがたを遣わすのは、狼の中に小羊を送り出すようなものです。財布も旅行袋も持たず、くつもはかずに行きなさい。だれにも、道であいさつしてはいけません』(2～4節)

(1) 祈る人は、行動を起こす人である。

①収穫の主に働き手を送って下さいと祈る人は、自ら働き手になる人である。

(2) 「狼の中に小羊を送り出す」とは、格言である。

①ユダヤ人たちは自分たちのことを、「狼(異邦人)の中にいる羊」と見た。

②キリストの弟子は、危険な場所に派遣される。

③この世は、基本的に神に敵対する。

④この世から歓迎されることを期待するな。

(3) 快適な生活を求めることは許されない。

①財布：物質的快適さ

②旅行袋：食物の保存

③くつ(サンダル)：予備のものを持つなということであろう。

④何も持っていないが、すべてを持っている状態

「悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり、貧しいようでも、多くの人を富ませ、何も持たないようでも、すべてのものを持っています」(2コリ6:10)

(4) 伝道以外のことで時間を浪費するな。

- ①道でのあいさつとは、東洋的な長々としたあいさつである。
- ②他人に悪い印象を与えるべきではないが、無駄なあいさつもいけない。

3. 5～9節

「どんな家に入っても、まず、『この家に平安があるように』と言いなさい。もしそこに平安の子がいたら、あなたがたの祈った平安は、その人の上にとどまります。だが、もしないなら、その平安はあなたがたに返って来ます。その家に泊まっていて、出してくれる物を飲み食いしなさい。働く者が報酬を受けるのは、当然だからです。家から家へと渡り歩いてはいけません。どの町に入っても、あなたがたを受け入れてくれたら、出される物を食べなさい。そして、その町の病人を直し、彼らに、『神の国が、あなたがたに近づいた』と言いなさい」(5～9節)

- (1) 歓迎されたなら、その家に留まる。
 - ①当時のユダヤ教では、旅人へのもてなしがきわめて重要であった。
 - ②先ず、「この家に平安があるように」と声をかける。
 - ③そのあいさつ(祈り)が受け入れられたなら、その家には平和の子がいる。
 - ④平和の子とは、平和のメッセージを受け入れる人のことである。

- (2) 歓迎されなくても、落胆しない。
 - ①その平和は、彼らに返って来る。
 - ②平和の祈りは無駄にはならない。他の人が受け取ることになる。

- (3) 同じ家に留まる。
 - ①家から家へと渡り歩くと、伝道の動機が疑われる。
 - ②質素で感謝にあふれた生活こそ、重要である。

- (4) 出されたものはなんでもいただく。
 - ①ぜいたくを言わない。
 - ②主の働き人として、食物を受ける資格がある。

- (5) 個人の場合と同じように、町にも2種類ある。
 - ①働き人を歓迎する町は、祝福を受ける。
 - ②病人が癒される。
 - ③神の国の福音が宣べ伝えられる。

4. 10～12節

「しかし、町に入っても、人々があなたがたを受け入れないならば、大通りに出て、こう言いなさい。『私たちは足についたこの町のちりも、あなたがたにぬぐい捨てて行きます。しかし、神の国が近づいたことは承知していなさい。』あなたがたに言うが、その日には、その町よりもソドムのほうがまだ罰が軽いのです」(10～12節)

(1) 不信仰な町は、祝福を失う。

- ①足のちりも払う。敬虔なユダヤ人は、異邦人地区を通過する際にそうした。
- ②不信仰な町に対しても、神の国の福音は宣言された。
- ③福音を拒否し続けるなら、これが最後のチャンスだという時がいつか来る。

(2) 特権には責務が伴う。

- ①神の国の福音を聞いた町は、ソドム以上の厳しさで裁かれる。

II. 不信仰な町の叱責 (13～16節)

1. 13～15節

「ああコラジン。ああベツサイダ。おまえたちの間に起こった力あるわざが、もしもツロとシドンでなされたのだったら、彼らはどうの昔に荒布をまとい、灰の中にすわって、悔い改めていただろう。しかし、さばきの日には、そのツロとシドンのほうが、まだおまえたちより罰が軽いのだ。カペナウム。どうしておまえが天に上げられることがありえよう。ハデスにまで落とされるのだ。」(13～15節)

(1) イエスは、特権に与ったガリラヤの3つの町を思い出された。

- ①コラジン、ベツサイダ、カペナウム。
- ②彼らは、メシアの業を目撃し、神の国の福音を聞いた。
- ③しかし、信じることも、悔い改めることもしなかった。

(2) 古代の異邦人の町ツロとシドンを引き合いに出された。

- ①もしツロとシドンが同じ特権に与っていたなら、彼らは悔い改めていた。
- ②それゆえ、コラジンとベツサイダはより厳しく裁かれる。
- ③今日、コラジンとベツサイダの詳しい位置は分かっていない。

(3) カペナウムは、イエスのホームタウンとなった (Town of Jesus)。

- ①イエスに選ばれた町であるのに、イエスを受け入れようとしなかった。

2. 16節

「あなたがたに耳を傾ける者は、わたしに耳を傾ける者であり、あなたがたを拒む者は、わたしを拒む者です。わたしを拒む者は、わたしを遣わされた方を拒む者です」(16節)

(1) 結びの言葉

- ①70人は、神の国の大使である。
- ②イエスの権威を受けて、派遣される。
- ③彼らを拒む者は、イエスを拒む者である。
- ④イエスを拒む者は、父なる神を拒む者である。

(2) これは、驚くべき言葉である。

- ①70人は無名であり、その後の記録も残っていない。
- ②その彼らを拒否することは、主イエスを、そして、父を拒否することである。
- ③忠実な僕の働きがいかに厳粛なものであるかが示されている。

Ⅲ. 70人の帰還(17～20節)

1. 17～19節

「さて、七十人が喜んで帰って来て、こう言った。『主よ。あなたの御名を使うと、悪霊どもでさえ、私たちに服従します』。イエスは言われた。『わたしが見ていると、サタンが、いなずまのように天から落ちました。確かに、わたしは、あなたがたに、蛇やさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を授けたのです。だから、あなたがたに害を加えるものは何一つありません』(17～19節)

(1) 70人は喜んで帰って来た。

- ①イエスの御名を使うと、悪霊どもが服従した。

(2) 「わたしが見ていると、サタンが、いなずまのように天から落ちました」

- ①悪霊どもは、サタンの指揮下に置かれている。
- ②70人は、イエスの権威によって悪霊どもを服従させた。
- ③悪の王国が崩壊しつつある。
- ④イエスは、このことの先に、サタンが敗北する姿を見た。
- ⑤これは今起こっているのではなく、将来起こることの預言である。

(3) 黙12:7～9

「さて、天に戦いが起こって、ミカエルと彼の使いたちは、竜と戦った。それで、竜とその使いたちは応戦したが、勝つことができず、天にはもはや彼らのいる場所がなくなった。こうして、この巨大な竜、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれて、全世界を惑わす、あの

古い蛇は投げ落とされた。彼は地上に投げ落とされ、彼の使いどもも彼とともに投げ落とされた」(黙12:7~9)

①このことは、大患難時代の中間に起こることである。

(4) 70人には、すべての害からの守りが約束された。

①彼らに、一時的に与えられた約束である。

2. 20節

「だがしかし、悪霊どもがあなたがたに服従するからといって、喜んではなりません。ただあなたがたの名が天に書きしるされていることを喜びなさい」(20節)

(1) 70人は、悪霊どもが自分たちに服従することを喜んだ。

①しかしイエスは、そこに潜む危険性を見抜かれた。

(2) 喜ぶべきは、自分たちの名が天に書き記されていることである。

①魂が救われていることを喜ぶべきである。

IV. イエスの喜び (21~24節)

1. 21~22節

「ちょうどこのとき、イエスは、聖霊によって喜びにあふれて言われた。『天地の主である父よ。あなたをほめたたえます。これらのことを、賢い者や知恵のある者には隠して、幼子たちに現してくださいました。そうです、父よ。これがみこころにかなったことでした。すべてのものが、わたしの父から、わたしに渡されています。それで、子がだれであるかは、父のほかには知る者がありません。また父がだれであるかは、子と、子が父を知らせようと心に定めた人たちのほかは、だれも知る者がありません』」(21~22節)

(1) イエスの喜びは、聖霊による喜びである。

①指導者だけでなく、多くの群衆がイエスを拒否した。

②しかし、少数の者たちはイエスに従った。

③イエスは、彼らを見て喜びに溢れた。

(2) 賢い者や知恵ある者と、幼子の対比

①賢い者、知恵ある者とは、パリサイ人たちである。

②彼らは、自らを知者と自認し、イエスのことばに耳を傾けようとしなかった。

③幼子は、イエスに従う無学な者たちである。

④自分の知恵に頼らない者は、イエスのことばを受け入れた。

(3) イエスは、父から渡された霊的「幼子」たちを喜ばれた。

- ①神の業は、このような単純な信仰を持つ人たちによって実行される。
- ②これは、神の計画によることである。

2. 23～24節

「それからイエスは、弟子たちのほうに向いて、ひそかに言われた。『あなたがたの見て
いることを見る目は幸いです。あなたがたに言いますが、多くの預言者や王たちがあなたがた
のしていることを見たいと願ったのに、見られなかったのです。また、あなたがたの聞いている
ことを聞きたいと願ったのに、聞けなかったのです』(23～24節)

(1) 12弟子への個人的言葉

- ①弟子たちは、旧約時代の聖徒たちよりも大きな特権に与っている。
- ②預言者や王たちが、メシアとメシアが行う奇跡を見たい、聞きたいと思った。
- ③しかし、彼らはそれを見ることができず、聞くこともできなかった。

(2) イエス時代の人々は、それを見たり聞いたりする特権に与った。

- ①イエスは、ご自身こそ旧約聖書が預言したメシアであると宣言された。

結論：

1. 12人と70人

(1) 12人の使徒たち

- ①12という数字は、イスラエル12部族を代表するものである。

(2) 70人の弟子たち

- ①ユダヤ教の伝統では、異邦人諸国は70あるとする。
- ②70という数字は、異邦人伝道の象徴と考えられる。

2. クリスチャンの喜び

「だがしかし、悪霊どもがあなたがたに服従するからといって、喜んではなりません。た
だあなたがたの名が天に書きしるされていることを喜びなさい」(20節)

(1) イエスが、喜ぶなと命じているのは、ここだけである。

- ①悪霊に勝利した喜びには、危険性が潜んでいる。
- ②自らの力と成功を誇る危険性である。
- ③成功の時こそ、謙遜になり、最高の喜びがなんであるかを黙想すべし。

(2) 喜ぶべきは、自分たちの名が天に書き記されていることである。

- ①この喜びは、神の愛と恵みを思い出すことにつながる。
- ②神との平和を持っていることを喜ぶべきである。

3. イエスの喜び

「ちょうどこのとき、イエスは、聖霊によって喜びにあふれて言われた。『天地の主である父よ。あなたをほめたたえます。これらのことを、賢い者や知恵のある者には隠して、幼子たちに現してくださいました。そうです、父よ。これがみこころにかなったことでした』」

(21節)

(1) パリサイ人たちは、救いの道を理解することができなかった。

- ①自らの知恵で、神のことばを解釈しようとした(パリサイ的ユダヤ教の知恵)。
- ②その結果、膨大な口伝律法の体系を作り上げた。
- ③イエスの単純なメッセージに反発した。

(2) 幼子たちは、神のことばを単純に受け止めた。

- ①彼らは、パリサイ的ユダヤ教の教育を受けていなかった。
- ②聖書のことばだけが頼りであった。
- ③そのため、イエスが旧約聖書の預言を成就する方であることを理解した。

(3) 今日の神学校の役割

- ①入学すると信仰を失くす人がいる。
- ②聖書のことばの単純な意味を疑うように教える。
- ③困難な箇所は、比喩的に解釈するように教える。
- ④聖書解釈の原則

*文脈

*字義通りの解釈

*最も自然な意味に解釈する。

「良きサマリヤ人のたとえ」

ルカ 10 : 25~37

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①前回に続いて、この箇所はルカだけの記録である。
- ②良きサマリヤ人のたとえは、ルカの福音書の中で最も有名なたとえ話。
- ③たとえ話の解釈においては、文脈が非常に重要である。
- ④前回は、70人の派遣について学んだ。
- ⑤イエスは幼子たちの信仰を喜ばれ、12弟子たちにこう言われた。

Luk 10:23 それからイエスは、弟子たちのほうに向いて、ひそかに言われた。「あなたがたの
見ていることを見る目は幸いです。

Luk 10:24 あなたがたに言いますが、多くの預言者や王たちがあなたがたの見ていることを見
たいと願ったのに、見られなかったのです。また、あなたがたの聞いていることを聞きたいと
願ったのに、聞けなかったのです。」(ルカ 10 : 23~24)

- ⑥それを聞いていた律法学者が、イエスを試そうとした。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「イエスは、良きサマリヤ人のたとえを用いて、律法学者の質問に答えた」 (§ 103)

ルカ 10 : 25~37

2. アウトライン

(1) 律法学者とイエスの対話 (25~28 節)

- ①律法学者 (25 節)
- ②イエス (26 節)
- ③律法学者 (27 節)
- ④イエス (28 節)

(2) 良きサマリヤ人のたとえ (29~37 節)

- ①たとえ話の背景 (29 節)
- ②たとえ話の内容 (30~35 節)
- ③たとえ話の結論 (36~37 節)

3. 結論 :

- (1) 第1のレベルの解釈
- (2) 第2のレベルの解釈
- (3) 永遠のいのち

良きサマリヤ人のたとえから、霊的教訓を学ぶ。

I. 律法学者とイエスの対話 (25～28 節)

1. 律法学者 (25 節)

Luk 10:25 すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスをためそうとして言った。「先生。何をしたら永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか。」

(1) 律法の専門家 (ノミコス) = 律法学者

- ① モーセの律法の専門家が、立ち上がって質問した。
- ② その動機は、イエスを試すためであった。
- ③ イエスはモーセの律法に無知か、モーセの律法を否定するか、そのいずれか。
- ④ イエスの評判を落とそうとしている。

(2) 彼の誤解

- ① イエスは、単なる教師のひとりであるという誤解。
 - * 「先生」は「ディダスカロス」である。
- ② 永遠のいのちは、業によって獲得できるという誤解。

(3) 質問の内容は、パリサイ的ユダヤ教にとっては典型的な神学的質問である。

- ① マタ 19 : 16～22
- ② ルカ 18 : 18～23

2. イエス (26 節)

Luk 10:26 イエスは言われた。「律法には、何と書いてありますか。あなたはどの読んでいますか。」

(1) この律法学者との対話を念頭に、今後の話の展開を理解する必要がある。

- ① 彼は、イエスを単なる教師としてしか見ていない。
- ② 彼は、永遠のいのちは業によって得られると考えている。

(2) イエスは、質問に対して質問で答えた。

- ① 典型的なラビ的教授法である。
- ② イエスは、2つの質問をした。
 - * 「律法には、何と書いてありますか」
 - * 「あなたはどの読んでいますか」(典型的なラビ的質問である)

3. 律法学者 (27 節)

Luk 10:27 すると彼は答えて言った。「『心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽

くして、あなたの神である主を愛せよ』、また『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』とあります。」

(1) 律法学者は、正しく答えた。

- ①申6:5
- ②レビ19:18

(2) 律法を正しく守るとは、神を愛し、隣人を愛することである。

- ①律法をこの2つの愛に要約することは、他の律法学者もしていた。
- ②イエスも同じことを教えた(マコ12:29~31)。

4. イエス(28節)

Luk 10:28 イエスは言われた。「そのとおりです。それを実行しなさい。そうすれば、いのちを得ます。」

(1) 「それを実行しなさい」とは、「それを継続して永遠に行いなさい」という意味。

- ①ギリシア語の現在形が用いられている。

(2) イエスの回答を誤解してはならない。

- ①一見すると、業による救いが可能なように見える。
- ②しかしこれは、仮定の回答である。

(3) イエスの回答に対する正しい応答とは、以下のようなものである。

- ①人間には、それは不可能である。
- ②私にはそれが実行できない。
- ③それゆえ、神よ、私を憐れんでください。

II. 良きサマリヤ人のたとえ(29~37節)

1. たとえ話の背景(29節)

Luk 10:29 しかし彼は、自分の正しさを示そうとしてイエスに言った。「では、私の隣人とは、だれのことですか。」

(1) これは、責任回避の質問である。

- ①律法学者は、良心の呵責を覚えている。
- ②しかし、自分の行為が不完全であることを認めるのは、プライドが許さない。
- ③そこで、話題をそらす質問をしたのである。
- ④隣人とは、当時の認識では、同胞のユダヤ人のことである。

2. たとえ話の内容 (30～35 節)

(1) 30 節

Luk 10:30 イエスは答えて言われた。「ある人が、エルサレムからエリコへ下る道で、強盗に襲われた。強盗どもは、その人の着物をはぎ取り、なぐりつけ、半殺しにして逃げて行った。

- ①たとえ話の細部を、比喩的に解釈してはならない。
- ②それらの要素は、たとえ話の中心テーマを伝えるために必要な仕掛けである。
- ③ある人とは、ユダヤ人であろう。
- ④エルサレムからエリコまでは、約900メートルの下り(約30キロ)である。
- ⑤強盗が潜む非常に危険な道である。
- ⑥当時、着物は高価なもので、一般人は一着しか持っていなかった。
- ⑦旅人は、半殺しに会った。

(2) 31～32 節

Luk 10:31 たまたま、祭司がひとり、その道を下って来たが、彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。

Luk 10:32 同じようにレビ人も、その場所に来て彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。

①祭司

- *アロンの家系
- *隣人を愛するはずの人
- *死体に触れることを恐れた。
- *パリサイ人たちは、自分の影が死体にかぶさっただけで汚れると教えた。
- *彼は、エルサレムから下る旅の途上にある。
- *神殿での奉仕ができなくなることを心配する必要はない。
- *旅人は半殺しに会っている。
- *祭司は、リスクを冒したくないと考えた。
- *この役目は、レビ人が一般のユダヤ人に任せるのがよい。

②レビ人

- *レビ族であるが、アロンの家系ではない。
- *神殿で祭司の援助をした。
- *汚れに関する教えは、祭司ほど厳しくない。
- *しかし彼も、汚れに触れることを恐れた。

(3) 33～35 節

Luk 10:33 ところが、あるサマリア人が、旅の途中、そこに来合わせ、彼を見てかわいそうに思い、

Luk 10:34 近寄って傷にオリーブ油とぶどう酒を注いで、ほうたいをし、自分の家畜に乗せて宿屋に連れて行き、介抱してやった。

Luk 10:35 次の日、彼はデナリ二つを取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『介抱してあげてください。もっと費用がかかったら、私が帰りに払います。』

①サマリヤ人

*ユダヤ人たちは、サマリヤ人を悪霊の名前としても使っていた。

*ヨハ8:48でイエスは、サマリヤ人(悪霊つき)と呼ばれた。

Joh 8:48 ユダヤ人たちは答えて、イエスに言った。「私たちが、あなたはサマリヤ人で、悪霊につかれていると言うのは当然ではありませんか。」

*サマリヤ人は、ユダヤ人とアッシリヤ人の混血である。

*イエスは、このたとえ話で、ユダヤ人の偏見を批判された。

②サマリヤ人は、困難な中に置かれたユダヤ人の隣人となった。

*憐みの心を抱いた。

*応急手当を施した。

・オリーブ油とぶどう酒を医薬品として使用し、包帯をした。

・ロバに乗せて、宿屋に連れて行って介抱した。

*宿屋の主人に看護を委託した。

・ユダヤ人は、異邦人の油やぶどう酒を避けた。

・費用の支払いを約束した。

3. たとえ話の結論(36~37節)

Luk 10:36 この三人の中でだれが、強盗に襲われた者の隣人になったと思いますか。」

Luk 10:37 彼は言った。「その人にあわれみをかけてやった人です。」するとイエスは言われた。「あなたも行って同じようにしなさい。」

(1) イエスの質問

①「この三人の中でだれが、強盗に襲われた者の隣人になったと思いますか」

(2) 律法学者の回答

①彼には、答えは分かっている。

②しかし、サマリヤ人という言葉は使っていない。

(3) イエスの教え

①「あなたも行って同じようにしなさい」

②問うべきは、誰が隣人かではなく、私は誰の隣人になれるだろうか、である。

結論：

1. 第1のレベルの解釈

(1) 隣人愛の教え

- ①ユダヤ人たちは、同胞のユダヤ人を隣人と考えていた。
- ②サマリヤ人は、苦難に会っているユダヤ人の隣人となった。

(2) 隣人愛を心に宿す人は、差別や偏見を乗り越えて困っている人を助ける。

- ①神に従う人は、そのような隣人愛を実践すべきである。

2. 第2のレベルの解釈

(1) 当時のユダヤ教の指導者たちは、半殺しになっている人を見捨てた。

- ①罪人を救うことに関しては、律法は無力である。
- ②律法は命じるが、それを実行する力を与えてくれない。

(2) ユダヤ人たちから拒否されていたサマリヤ人が、隣人愛を示した。

- ①イエスは、ユダヤ人たちから拒否され、サマリヤ人とさえ呼ばれた。
- ②良きサマリヤ人の中に、イエスの姿を見る。

3. 永遠のいのち

(1) 律法によって永遠のいのちを得ることは不可能である。

- ①律法は、恵みによってエジプトを脱出することができた民に与えられた。
- ②律法は、私たちがいかに罪深いかを教えるものである。

(2) 神と隣人に対する完ぺきな愛を実行することは、不可能である。

- ①「何をしたら永遠のいのちが得られるのか」という質問は、的外れである。
- ②隣人愛の実践に心を砕く人に約束されているのは、地上生活での長寿である。

(3) 永遠のいのち

- ①時間的要素よりも、質的要素に強調点がある。
- ②神との平和から来る新しいいのちである。
- ③イエスを信じた時から始まっているが、やがて完成するいのちである。
- ④信仰と恵みによって得るいのちである。
- ⑤ヨハ3:16

Joh 3:16 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

「マルタとマリア」

ルカ 10 : 38～42

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①前回到続いて、この箇所はルカだけの記録である。
- ②70人の派遣、永遠のいのちに関する律法学者との議論(良きサマリヤ人)
- ③そして、マルタとマリアの話へと続く。
- ④ルカは、イエスに仕えた婦人たちについて記録している福音記者である。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「マルタとマリアの家の客となるイエス」 (§104)

ルカ 10 : 38～42

2. アウトライン

- (1) 安らぎの家 (38～39 節)
- (2) 苛立ちの家 (40 節)
- (3) 権威ある言葉 (41 節)

3. 結論 :

- (1) 優先順位 (1)
- (2) 優先順位 (2)
- (3) 正しい優先順位の結果

マルタとマリアに語られたイエスのことばから、霊的教訓を学ぶ。

I. 安らぎの家 (38～39 節)

1. 38 節

Luk 10:38 さて、彼らが旅を続けているうち、イエスがある村に入られると、マルタという女が喜んで家にお迎えした。

- (1) ある村とは、ベタニヤである (ヨハ 11 : 1、12 : 1～3)。
 - ①エルサレムから約3キロ離れた所にある村。
 - ②オリーブ山の東山麓に位置する。
 - ③最後の過越の祭りの際の訪問とは、別のものである。

- (2) イエスを迎えたのは、マルタである。

- ①マルタ、マリア、ラザロの3人はベタニヤに住んでいた。
- ②マルタとマリアが初めて登場する。
- ③マルタがイエスを迎えているので、一家の主人であったと思われる。
- ④この家は、70人の派遣によって用意されたものである可能性がある。
- ⑤イエスは、この家に留まった。それ以降も、ここに泊まることを好まれた。

2. 39節

Luk 10:39 彼女にマリヤという妹がいたが、主の足もとにすわって、みことばに聞き入っていた。

(1) マリアの姿勢

- ①主の足もとにすわって、みことばに聞き入っていた。
- ②これは、弟子が師から学ぶときの姿勢である。
- ③将来自分が師になって弟子に教えようとする者は、このような姿勢を取った。

(2) 婦人の役割に関する伝統的なイメージが覆される。

- ①婦人は、教師にはなれない。だから専門的に学ぶ必要はない。
(例話) 2世紀に、高名なラビの娘がいた。博学なラビと結婚した。
ほとんどのラビたちは、彼女の意見を受け入れなかった。
- ②マリアは、伝統的な婦人の役割を捨てて、イエスの教えを吸収しようとした。
- ③イエスは、彼女の学びの姿勢を受け入れた。
- ④その様子を見て、男性たちはショックを感じたことであろう。

II. 苛立ちの家 (40節)

1. 40節 a

Luk 10:40a ところが、マルタは、いろいろもてなしのために気が落ち着かず、

- (1) マルタは、伝統的な婦人の役割に徹した。
 - ①客をもてなすのは、主人の責務である。
 - ②客は、少なくとも13名はいた。イエスと弟子たち。
 - ③中東風のおもてなし

(2) 訳文の比較

「ところが、マルタは、いろいろもてなしのために気が落ち着かず、」(新改訳)

「マルタは、いろいろのもてなしのためせわしく立ち働いていたが、」(新共同訳)

「ところが、マルタは接待のことで忙がしくて心を取りみだし、」(口語訳)

「マルタ饗應(もてなし)のこと多(おほ)くして心(こころ)いりみだれ、」(文語訳)
「一方マルタはというと、てんてこ舞の忙しさです。『どんなごちそうで、おもてなし
しようかしら。あれがいいかしら、それとも……。』気を使うことばかりです」(リビング
バイブル)

2. 40節b

Luk 10:40b みもとに来て言った。「主よ。妹が私だけにおもてなしをさせているのを、何とも
お思いにならないのでしょうか。私の手伝いをするように、妹におっしゃってください。」

(1) マルタの自己義認の態度

- ①自分は正しいことをしている。
- ②他の人はそうではない。
- ③自己義認は、怒りの感情を生む。
- ④怒りやすい人は、怒りの理由について考えるとよい。

(2) マルタの怒り

- ①最初は、妹のマリアに向けられた。
- ②次に、マリアの怠惰を放置しているイエスに向けられた。
- ③イエスをもてなそうとしたのに、イエスを批判するようになった。

III. 権威ある言葉 (41節)

1. 41～42節a

Luk 10:41 主は答えて言われた。「マルタ、マルタ。あなたは、いろいろなことを心配して、
気を使っています。」

Luk 10:42a しかし、どうしても必要なことはわずかです。いや、一つだけです」

(1) イエスは、マルタをたしなめた。

- ①一時的なことに気を取られて、動転してはならない。
- ②ものごとを大局的に見ることを教えた。

(2) どうしても必要なことは、一つだけである。

- ①メシアの教えを受けることは、メシアに仕えることよりも重要である。
- ②ともに良いことであるが、メシアの教えを受けることを優先すべきである。

2. 42節b

Luk 10:42b 「マリヤはその良いほうを選んだのです。彼女からそれを取り上げてはいけません

ん」

- (1) イエスは、マリアを擁護された。
 - ①イエスは、婦人がみことばを学ぶことを奨励された。
- (2) マリアは、良い方を選んだ。
 - ①彼女は、弟子たちでさえも理解できなかったことを学んだ。
 - ②イエスは、死のうとしておられる。

結論：

1. 優先順位 (1)

- (1) 与えることと、受けること
 - ①マルタは、イエスに与えようとした。
 - ②マリアは、イエスから受けようとした。
 - ③ともに良いことである。
 - ④しかし、イエスから受けずして、他者に与えることは難しい。
 - ⑤それゆえ、マリアの選びの方がよい。
- (2) 行為と、内面の状態
 - ①イエスに与えること(奉仕)の中には、傲慢の種が混入する可能性がある。
 - ②傲慢の種が芽を出し成長すると、他者への裁きという実を付けるようになる。
 - ③イエスから受けること(静思)は、傲慢の種を取り除く作業である。
 - ④傲慢の種が取り除かれると、聖霊の実を付けるようになる。

2. 優先順位 (2)

- (1) 良きサマリヤ人のたとえ話と、マリアの選び
 - ①十戒の5戒～10戒は、隣人への愛を教えている。
 - ②十戒の1戒～4戒は、神への愛を教えている。
- (2) 優先順位は、神への愛、そして、隣人への愛である。
 - ①キリストとともに時を過ごした人は、キリストの香りを放つ。
(例話) アロマオイルのそばにおいたキーホルダーの香り
- (3) 神への愛を確認できた人は、平安に、静かに、親切に隣人に仕えるようになる。

3. 正しい優先順位の結果

(1) マリアは、イエスが死のうとしていることを理解した。

(2) マリアは、イエスに香油を注いだ。

①マタ 26 : 12~13

Mat 26:12 「この女が、この香油をわたしのからだに注いだのは、わたしの埋葬の用意をしてくれたのです。」

Mat 26:13 まことに、あなたがたに告げます。世界中のどこでも、この福音が宣べ伝えられる所なら、この人のした事も語られて、この人の記念となるでしょう」

②今も、マリアの行為は世界中で語り継がれている。

(3) イエスの死を理解したことは、イエスの復活を理解したことでもある。

①マリアは、兄弟ラザロの蘇りを体験するようになる(ヨハ11章)。

②彼女は、他の婦人たちといっしょにイエスの墓には行かなかった。

(4) 神の計画を理解した人だけが、自分の働き場を見い出すことができる。

「継続した祈り」

ルカ 11 : 1~13

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①なぜイエスは、祈る必要があったのか。祈りは霊的生命線であった。
- ②イエスは、重要な局面で必ず祈っておられる。
- ③ルカは、イエスの祈りの生活を克明に記録している。
 - *バプテスマの時 ルカ 3 : 21
 - *一人での祈り ルカ 5 : 16、9 : 18
 - *弟子を選ぶ時 ルカ 6 : 12
 - *変貌の山で ルカ 9 : 28~29
 - *シモンの信仰がなくならないように ルカ 22 : 32
 - *ゲツセマネの園で ルカ 22 : 40~44
 - *十字架上で ルカ 23 : 46
- ④弟子たちは、イエスの祈りの生活に感銘を受けていた。
- ⑤「主の祈り」は、山上の垂訓の中に出ていた(マタ 6 : 9~15)。
- ⑥ここでは、簡単に解説をする。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「イエスは再び祈りのひな型を示す」 (§ 105)

ルカ 11 : 1~13

2. アウトライン

- (1) 祈りのひな型 (1~4 節)
- (2) たとえ話 (1) (5~10 節)
- (3) たとえ話 (2) (11~13 節)

3. 結論 :

- (1) 山上の垂訓での「主の祈り」との対比
- (2) ユダヤ教の祈りとの対比
- (3) 聖霊を求める祈り

継続した祈りの重要性を学ぶ。

I. 祈りのひな型 (1~4 節)

1. 場面設定 (1 節)

Luk 11:1 さて、イエスはある所で祈っておられた。その祈りが終わると、弟子のひとりが、イエスに言った。「主よ。ヨハネが弟子たちに教えたように、私たちにも祈りを教えてください。」

(1) ユダヤ教の習慣

- ①ラビは弟子たちに、状況にあった祈り方を教えた。
- ②バプテスマのヨハネは、弟子たちに祈り方を教えていた。

(2) 弟子のひとりがイエスに願った。

- ①弟子たちは、イエスの祈りの生活に感銘を受けていた。
- ②祈りを中断させるような行動や質問は、慎むべきである。
- ③イエスが祈り終わったのを見て、弟子のひとりがイエスに願った。

(3) イエスの回答

- ①祈りの6つの要素を教えた。
- ②この言葉の通りに祈りを再現せよ、ということではない。

2. 前半の3つの要素(2節)

Luk 11:2 そこでイエスは、彼らに言われた。「祈るときには、こう言いなさい。『父よ。御名があがめられますように。御国が来ますように』」

(1) 呼びかけ

- ①「父よ」(アバ)
(例話) 米国でのホームステイでの出来事
- ②「天にいます私たちの父よ」(山上の垂訓)
- ③「アバ」と呼びかけるのは、神を愛に溢れた父とみているから。
- ④この呼びかけは、旧約時代の聖徒たちが知らなかったことである。

(2) 「御名があがめられますように」

- ①人々が神を恐れますように。
- ②神の評判が、人々の間で高められますように。

(例話) 聖書を題材にした映画や演劇

- ③この祈りは、神への愛の表現である。

(3) 「御国が来ますように」

- ①ヨハネ、イエス、弟子たち、そして70人は、御国の福音を宣べ伝えた。
- ②この祈りをするとき、私たちは彼らのメッセージを受け入れている。

③やがてメシアが再臨され、地上にメシア的王国が成就する。

④これは、信仰による祈りである。

3. 後半の3つの要素(3~4節)

Luk 11:3 「私たちの日ごとの糧を毎日お与えください。」

Luk 11:4 私たちの罪をお赦しください。私たちも私たちに負いめのある者をみな赦します。私たちが試みに会わせないでください」

(4) 日ごとの糧

①肉体的な糧と、霊的な糧

②日々、神に信頼して生きることの表明である。

③生かされているという認識が重要である。

(5) 罪の赦し

①罪の告白をすれば、神は私たちの罪を赦してくださる。

②これは、神の赦しを信じる、信仰の祈りである。

③信仰があるということ、他者を赦すという行為で表現する。

(6) 誘惑からの解放

①自らは、誘惑に弱いという認識がある。

②誘惑に陥るような状況に会わないようにという祈りである。

③これは、自分自身を信頼していない人の祈りであり、健全な祈りである。

(例話) 鎖につながれた猛犬

II. たとえ話(1)(5~10節)

1. 諦めない人(5~8節)

Luk 11:5 また、イエスはこう言われた。「あなたがたのうち、だれかに友だちがいるとして、真夜中にその人のところに行き、『君。パンを三つ貸してくれ。』

Luk 11:6 友人が旅の途中、私のうちへ来たのだが、出してやるものがないのだ』と言ったとします。

Luk 11:7 すると、彼は家の中からこう答えます。『めんどろをかけないでくれ。もう戸締まりもしてしまっし、子どもたちも私も寝ている。起きて、何かをやることはできない。』

Luk 11:8 あなたがたに言いますが、彼は友だちだからということで起きて何かを与えることはしないにしても、あくまで頼み続けるなら、そのためには起き上がって、必要な物を与えるでしょう。

(1) 旅の途中の友人が、夜中に訪ねてきた。

- ①ユダヤ文化の中では、「おもてなし」が極めて重要である。
 - ②食事を出さねばならないが、パンが残っていない。
 - ③庶民の家では、その日のパンはその日の内に消費していた。
- (2) 彼は、友人の家にはパンがあることを知っている。
- ①旅人には、割って硬くなったパンではなく、新しいパンを出す必要があった。
 - ②そこで、友人の家に行って、パンの塊3つを貸してほしいと願った。
- (3) 友人は、起きたくない。
- ①かんぬきをかけた。
 - ②家族は寝ている。
 - ③めんどろをかけないで欲しい。
- (4) しかし、あくまでも頼み続けた。
- ①友人は起き上がってパンを与えないわけにはいかなかった。
 - ②村中に知れる恐れがある。

2. 適用 (9～10 節)

Luk 11:9 わたしは、あなたがたに言います。求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。

Luk 11:10 だれであっても、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれま

す。

- (1) 継続した祈りの重要性 (徐々に段階が上がっている)
- ①求め続ける。
 - ②捜し続ける。
 - ③たたき続ける。
- (2) 父なる神といやいや起き上がった友人の対比
- ①カル・バホメル (大から小へ) の議論
 - ②人間でも、ましてや、神は。
 - ③願いは聞かれる。
 - *より良いもの
 - *「NO」という答えも、より良いものである。

Ⅲ. たとえ話 (2) (11～13 節)

1. 人間の親子関係（11～12節）

Luk 11:11 **あなたがたの中で、子どもが魚を下さいと言うときに、魚の代わりに蛇を与えるような父親が、いったいいるでしょうか。**

Luk 11:12 **卵を下さいと言うのに、だれが、さそりを与えるでしょう。**

- (1) 子どもが魚を求める。
 - ①父親は、蛇を与えるようなことはしない。
 - ②魚と蛇の類似性

- (2) 子どもが卵を求める。
 - ①父親は、さそりを与えるようなことはしない。
 - ②卵とさそりの類似性

2. 適用（13節）

Luk 11:13 **してみると、あなたがたも、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天の父が、求める人たちに、どうして聖霊を下さらないことがありますしょう。」**

- (1) ここでも、カル・バホメル（大から小へ）の議論が展開されている。
 - ①人間の父と天の父の対比

- (2) 父なる神が私たちに与えてくださる最高のものは、聖霊である。
 - ①ペンテコステ前なので、ここでは「外側を覆う聖霊の力」である。
 - ②信者としての生活を可能にする聖霊の力
 - ③弟子としての奉仕を可能にする聖霊の力
 - ④旧約聖書の世界観からすると、これは預言者として召されること。
 - ⑤このことばを聞いた人たちは、驚いたに違いない。

結論：

1. 山上の垂訓での「主の祈り」との対比

- (1) 山上の垂訓は、メシアによるモーセの律法の解釈である。
 - ①パリサイ人たちの律法解釈と対比されるべきものである。
 - ②モーセの律法は、教会時代には適用されない。
 - ③「主の祈り」もまた、モーセの律法の一部である。

- (2) しかし、ユダヤ人たちがイエスを拒否して以降、状況が変わる。
 - ①山上の垂訓の中のある要素は、再び取り上げられている。

- ②それらの要素は、教会時代に適用されるメシアの教えとなった。
- ③「主の祈り」もまた、再度教えられているので、教会時代に適用される。

2. ユダヤ教の祈りとの対比

- (1) ラビたちは、祈禱書を使用した祈りを奨励した。
 - ①即興の祈りは奨励しなかった。
 - ②今もユダヤ人たちは、祈禱書を用いて祈る。
- (2) イエスは、即興の祈りを奨励した。
 - ①イエスが示したのは、文字通り祈る祈りではない。
 - ②祈りのひな型を示し、それに従って即興で祈るように教えた。
 - ③この祈りは、形式的なものではなく、心のこもったものである。

3. 聖霊を求める祈り

- (1) 使2章で、聖霊がユダヤ人信者たちに下り、教会が誕生した。
 - ①聖霊を求める祈りは、教会誕生前の信者の祈りである。
- (2) 今は、信じた者はその瞬間に聖霊を受けている。
 - ①まだ何かに欠けているかのごとく、聖霊を受ける祈りをするのは間違っている。
 - ②大事なのは、すでに内住の聖霊が与えられているという認識を持つことである。
(例話) 失くしたパスポート
- (3) 教会時代の信者の祈り
 - ①エペ5:18
「また、酒に酔ってはいけません。そこには放蕩があるからです。御霊に満たされなさい」
 - ②「聖霊に満たされよ」と命令されている。
 - ③この満たしとは、聖霊の支配のことである。

「口をきけなくする悪霊の追い出し」

ルカ 11 : 14~36

1. はじめに

(1) 文脈の確認

①ベルゼブル論争の記事と似ている。

* § 61 マタ 12 : 22~37

*ユダヤ人の指導者たちが、イエスのメシア性を拒否した出来事

*この出来事は、イエスの公生涯の分水嶺となった。

②これとそっくりの内容が、再度登場する。

* § 61 とは、別の出来事である。

* § 61 とは異なる要素がいくつか出て来る。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「ベルゼブルの力を借りているという冒瀆的非難」 (§ 106)

ルカ 11 : 14~36

2. アウトライン

(1) イエスを非難する言葉 (14~16 節)

(2) イエスの回答 (17~23 節)

(3) 当時のユダヤ人たちの霊的状态 (24~28 節)

(4) 当時のユダヤ人たちへのしるし (29~32 節)

(5) 信仰の道と不信仰の道 (33~36 節)

3. 結論 :

(1) 最初のベルゼブル論争との対比

(2) 健全な目と悪い目の対比

キリストの弟子としての心構えを学ぶ。

I. 非難の言葉 (14~16 節)

1. 14 節

Luk 11:14 イエスは悪霊、それも口をきけなくする悪霊を追い出しておられた。悪霊が出て行くと、口がきけなかった者がものを言い始めたので、群衆は驚いた。

- (1) イエスは、口をきけなくする悪霊を追い出した。
 - ①マタ 12:22 では、「悪霊につかれて、目も見えず、口もきけない人」。
 - ②口をきけなくする悪霊の追い出しは、メシア的奇跡である。
- (2) 群衆は驚いた。
 - ①イエスがメシア的奇跡を行ったから。
 - ②ここでの重要なポイントは、イエスを批判するのが群衆だという点である。
 - ③群衆の中に、2種類の不信仰の言葉を口にする者たちがいた。

2. 15～16 節

Luk 11:15 **しかし、彼らのうちには、「悪霊どものかしらベルゼブルによって、悪霊どもを追い出しているのだ」と言う者もいた。**

Luk 11:16 **また、イエスをためそうとして、彼に天からのしるしを求める者もいた。**

- (1) イエスは、悪霊どものかしらベルゼブルの力を借りていると主張する者たち
 - ①ベルゼブルとは「蠅の主」という意味で、サタンを指す。
 - ②彼らは、ユダヤ人の指導者たちの意見を採用し、イエスのメシア性を否定した。
- (2) イエスをためそうとして、天からのしるしを求める者たち
 - ①メシア性を証明する奇跡を求めた。

*彼らには、盲目で生まれついた人の癒しだけでは不十分だった。
 - ②奇跡を行えば、非難する者たちは沈黙するのではないかという誘いがある。
 - ③「十字架から降りてきたら信じてやる」という意識と似ている。

II. イエスの回答 (17～23 節)

1. 17～18 節

Luk 11:17 **しかし、イエスは、彼らの心を見抜いて言われた。「どんな国でも、内輪もめしたら荒れすたれ、家にしても、内輪で争えばつぶれます。**

Luk 11:18 **サタンも、もし仲間割れしたのだったら、どうしてサタンの国が立ち行くことができます。それなのにあなたがたは、わたしがベルゼブルによって悪霊どもを追い出していると言います。**

- (1) その非難は、間違っている。
 - ①悪の王国でも、仲間割れしたら崩壊してしまう。
 - ②これは、最初のベルゼブル論争にも出て来た要素である。

2. 19～20 節

Luk 11:19 もしもわたしが、ベルゼブルによって悪霊どもを追い出しているのなら、あなたがたの仲間は、だれによって追い出すのですか。だから、あなたがたの仲間は、あなたがたをさばく人となるのです。

Luk 11:20 しかし、わたしが、神の指によって悪霊どもを追い出しているのなら、神の国はあなたがたに来ているのです。

(1) 彼らは、悪霊の追い出しは聖霊の力によると信じていた。

- ①ベルゼブルによって悪霊を追い出しているとの主張は、神学的に矛盾する。
- ②これもまた、最初のベルゼブル論争に出て来た要素である。

3. 21～23 節

Luk 11:21 強い人が十分に武装して自分の家を守っているときには、その持ち物は安全です。

Luk 11:22 しかし、もっと強い者が襲って来て彼に打ち勝つと、彼の頼みにしていた武具を奪い、分捕り品を分けます。

Luk 11:23 わたしの味方でない者はわたしに逆らう者であり、わたしとともに集めない者は散らす者です。

(2) 強い人とはサタンであり、もっと強い者とはイエスである。

- ①分捕り品とは、サタンによって束縛されていた人々である。
- ②これもまた、最初のベルゼブル論争に出て来た要素である。

Ⅲ. 当時のユダヤ人たちの霊的状态 (24～28 節)

1. 24～26 節

Luk 11:24 汚れた霊が人から出て行って、水のない所をさまよいながら、休み場を捜します。一つも見つからないので、『出て来た自分の家に帰ろう』と言います。

Luk 11:25 帰って見ると、家は、掃除をしてきちんとかたづいていました。

Luk 11:26 そこで、出かけて行って、自分よりも悪いほかの霊を七つ連れて来て、みな入り込んでそこに住みつくのです。そうになると、その人の後の状態は、初めよりもさらに悪くなります。」

(1) このたとえ話は、当時のユダヤ人たちの霊的状态を説明したものである。

- ①内側が掃除されたとは、バプテスマのヨハネがしたことである。
- ②内側が空き家になっているとは、形式的な信仰のことである。
- ③初めの状態よりもはるかに悪い状態がやって来るとは、裁きの預言である。
 - *当時、ユダヤ人たちは多少の自治権を持っていた。
 - *この時から40年後、エルサレムは滅ぼされた。
 - *神殿の崩壊、ユダヤ人の世界離散、系図や歴史的記録の破壊など。

(2) このたとえ話は、最初のベルゼブル論争に出て来た。

2. 27～28節

Luk 11:27 イエスが、これらのことを話しておられると、群衆の中から、ひとりの女が声を張り上げてイエスに言った。「あなたを産んだ腹、あなたが吸った乳房は幸いです。」

Luk 11:28 しかし、イエスは言われた。「いや、幸いなのは、神のことばを聞いてそれを守る人たちです。」

(1) ひとりの女が、イエスを称賛する。

- ①母親を祝福することによって、息子を称賛するのは当時の習慣である。
- ②自分がこのような人物の母であったら、どんなに素晴らしいかと考えた。

(2) イエスは、血のつながりよりも、霊的關係を重視された。

- ①ユダヤ人たちは、自分たちがアブラハムの子孫であることを誇りとした。
- ②神のことばを聞いてそれを守る人たちとは、イエスを信じる人たちである。
- ③ルカは、異邦人の救いを予見している。

(3) 最初のベルゼブル論争との相違

- ①マリアとイエスの兄弟たちが、イエスを家に連れて帰ろうとした。

IV. 当時のユダヤ人たちへのしるし (29～32節)

1. 29～30節

Luk 11:29 さて、群衆の数がふえてくると、イエスは話し始められた。「この時代は悪い時代です。しるしを求めているが、ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられません。」

Luk 11:30 というのは、ヨナがニネベの人々のために、しるしとなったように、人の子がこの時代のために、しるしとなるからです。

(1) 聴衆は群衆である。

- ①彼らは、しるしを求めた。
- ②イエスは彼らを、「悪い時代」と呼ばれた。
*「悪い世代」である。

(2) イエスは、ヨナのしるし以外のしるしを与えることを拒否された。

- ①ヨナのしるしとは、復活のことである。

- ②ヨナは、ニネベの人々のためのしるしとなり、人々は悔い改めた。
- ③イエスは、この時代のためのしるしとなる。
- ④民族的には崩壊するが、個人的な救いの道は残されている。
- ⑤イエスをメシアと信じるのが、救いの道である。

(3)「赦されない罪」への言及は、ここにはない。

2. 31～32節

Luk 11:31 南の女王が、さばきのときに、この時代の人々とともに立って、彼らを罪に定めます。なぜなら、彼女はソロモンの知恵を聞くために地の果てから来たからです。しかし、見なさい。ここにソロモンよりもまさった者がいるのです。

Luk 11:32 ニネベの人々が、さばきのときに、この時代の人々とともに立って、この人々を罪に定めます。なぜなら、ニネベの人々はヨナの説教で悔い改めたからです。しかし、見なさい。ここにヨナよりもまさった者がいるのです。

(1) 南の女王

- ①シェバの女王は、なんのしるしもないのに、ソロモンに会いに来た。
- ②裁きの時に、彼女は立って、この時代の人々を裁く。

(2) ニネベの人々

- ①彼らは、ヨナの短い説教を聞いて悔い改めた。
- ②裁きの時に、ニネベの人々は立って、この時代の人々を裁く。

(3) 南の女王とニネベの人々の話は、最初のベルゼブル論争に出て来た。

V. 信仰の道と不信仰の道 (33～36節)

1. 33節

Luk 11:33 だれも、あかりをつけてから、それを穴倉や、枘の下に置く者はいません。燭台の上に置きます。入って来る人々に、その光が見えるためです。

(1) イエスを信じることは、光の中を歩むことである。

- ①イエスを信じないことは、光を拒否し、暗やみの中を歩むことである。

(2) イエスのことばはあかりである。

- ①それは、父なる神を啓示するあかりである。
- ②それを受け取った人は、そのあかりを隠さず、他の人々に示す。

2. 34～36節

Luk 11:34 **からだのあかりは、あなたの目です。目が健全なら、あなたの全身も明るいが、しかし、目が悪いと、からだも暗くなります。**

Luk 11:35 **だから、あなたのうちの光が、暗やみにならないように、気をつけなさい。**

Luk 11:36 **もし、あなたの全身が明るくて何の暗い部分もないなら、その全身はちょうどあかりが輝いて、あなたを照らすときのように明るく輝きます。」**

(1) 多くの人が、目から光が出て、ものが見えるようになると考えていた。

①つまり、目がランプの役割を果たしていると考えていたのだ。

②目から光が入るという考え方もあった。

③ここでは、その両方の考え方が反映されている。

(2) 「目が健全なら」：英語で「single eye」である。

①「目が悪ければ」：英語で「evil eye」である。

②マタ6：22～23では、寛容な人と、貪欲な人が対比されている。

③ここでは、イエスのことばを受け入れる人と、そうでない人が対比されている。

結論：

1. 最初のベルゼブル論争との対比

(1) 共通項が多く見られるが、違いもある。

(2) 場所

①ガリラヤ地方で、複数回(マタ9：34)起こっている。

②ここにあるのは、ユダヤかペレアでの質問である。

③巡回伝道者には、よく起こることである。

(3) 時期

①約1年後の隔たりがある。

(4) 赦されない罪への言及がない。

(5) ベルゼブル論争後の出来事

①イエスは、湖畔に出て多くのたとえ話を語った。

②家に入ると、弟子たちにいくつかのたとえ話を解説した。

③その後、湖を渡ってゲラサ人の地に向かった。

(6) ここでの出来事

①パリサイ人との食事

②パリサイ人を糾弾することば(公生涯が終わりに近づいてきた)

2. 健全な目と悪い目の対比

(1) 肉体の目に関して言えることは、霊的目に関しても言える。

①ユダヤ人たちの霊的目は、開いていなかった。

②彼らは、自分たちの内には光があると思っていたが、それは闇であった。

③イエスの教えに目を開くなら、神の啓示の光が心を満たしてくれる。

(2) 私たちへの教訓(ラオデキヤの教会へのメッセージ)(黙3:17~20)

Rev 3:17 あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。

Rev 3:18 わたしはあなたに忠告する。豊かな者となるために、火で精錬された金をわたしから買いなさい。また、あなたの裸の恥を現さないために着る白い衣を買いなさい。また、目が見えるようになるため、目に塗る目薬を買いなさい。

Rev 3:19 わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。

Rev 3:20 見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところに入って、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。

①悪い目の教会

* 裕福で満ち足りた教会

* 自己認識が歪んだ教会

②金融業による富がある町

* 火で精錬された金を買え(永遠に価値あるもの)。

③羊毛で有名な町(黒の上着)

* 白い衣(義の衣)を買え。

④医学の学校があった町(目薬が売られていた)

* 目に塗る目薬を買え。

* 神のことばに問題があるわけではない。

* 自分の霊的目に問題がある。

(例話) 朝、ホテルのカーテンを開ける。